

星雲特警ヘイデリオン

オリーブドラブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

(本作は毎週日曜08:01に更新されます)

獰猛な闘争本能を持ち、殺戮を好む邪悪な異星人。シルディアス星人と呼ばれる彼らを駆逐するため、銀河の平和を預かる星雲連邦警察は、強化外骨格を纏うエリート戦士「星雲特警」を集結させる。血に飢えた凶悪な血族を絶ち、人々に安寧を齎すために。

——だが、その中でただ1人。正義によつて定められた処刑に抗う、若き星雲特警がいた。シルディアス星人の「帝王」を討ち取った英雄でありながら、血で血を洗う戦いを嘆く彼は、生き残りの少女を連れて組織を脱走してしまった。

敵は、「正義」。

星雲特警へイデリオンの、孤独な戦いが向かう先は——幸福か、破滅か。

(イラスト提供：peco様)

(本作は小説家になろう、カクヨム、暁でも連載予定です。また、下記の作品群とコラボさせて頂いております)

- ・廃機竜は殺戮と共に死ぬ。（peco先生）
- ・英雄（岳飛先生）
- ・Soldier, Believe（戦狗を継ぐ者）（岳飛先生）
- ・宇宙刑事デューネ（MrR先生）

・特務部隊

電光
(シンカー・ワン先生)

目 次

第1話	滅ぶべき血族	1
第2話	叛逆の逃避行	6
第3話	ガラスの平和	11
第4話	ハイデリオンとユアルク	16
第5話	ヒダカ・タロウの名を捨てて	22
第6話	流れ着いた先	28
第7話	戦いと鮮血	32
第8話	少女達の昇天	39
第9話	さらば涙、ようこそ笑顔	43
最終話	いつの日か、きっと	49
番外編	星雲特警メイセルド	53
番外編	帝王は暁を仰ぐ	61
番外編	星雲特警ユアルク	68
番外編	星雲特警と怪獣映画	77
番外編	四季は移ろい、花が咲く	86
特別編 神具の力	笑顔のために — For Smile —	101
第1話	正義なき大義	105
第2話	反吐が出る甘さ	113
第3話	神具の力	121
第4話	禊	126
第5話	愚者の炎	135
最終話	笑顔のために — For Smile —	144

第1話 滅ぶべき血族

蒼の光刃が激しく閃き、紅の光刃が唸りを上げる。二つの刃は互いの死を望み、主人の意のままに操られていた。

首を狙う紅い閃光が、守りに入つた蒼い光に阻まれ。下から斬り上げる蒼光を、眩い真紅が最上段から迎え撃つ。

横薙ぎには、刃を縦に構えて防ぎ。反撃の蹴りが来れば、後方に跳んで衝撃を逃す。力任せに弾けば、その反動を利用して——身体ごと刃を翻し、回転しながら斬り込む。

足を斬ろうと下段を狙えば、それを読んで飛び上がり、顔面に上段から振り下ろす。それが肩を捉えた瞬間、反撃の回し蹴りが胸に直撃した。

だが、転倒しても蒼い光刃の主は——素早く立ち上がり、紅い光刃を振るう男の巨躯に肉迫していく。圧倒的な体格差さえ、ものともせず。ただ、眼前の敵を屠るために。

その勇ましさに、紅い光刃の先が歓喜に震える。眼前的仇敵が見せる、かつてないほどの蛮勇が、巨漢を奮い立たせていた。

互いの剣は、再び衝突し——絶え間なく火花を散らす。この剣戟が生む発光だけが、この薄暗い世界を照らしていた。

斬り、防ぎ、蹴り、掴み、投げ、倒れ、立つ。互いの技が互いの身体を、命を削つて行く。だが、それでも彼らは止まることなく、己の血肉を闘争に捧げていた。

——やがて、紅い光刃が勇者の肩を掠めた時。蒼く煌めく破邪の剣が、巨体の胸を貫いた。

深く沈みゆく電熱の刃が、肉を裂き内臓を焼き、心臓を蒸して行く。命の火が最期の輝きを放ち、虚無の果てに消えて行く。

だが、貫かれた巨躯の男は——仮面の下で、嗤つていた。こうして果てることこそが、己にとつて最良の最期であつたと。言外に、そう告げるかのように。

——そんな彼を見下ろす、蒼き光刃の勇者は。己の貌を隠す、紅い仮面の下で。

声を殺して——哭いていた。

◇

悲鳴と怒号が天を衝き、渦となり、戦場を席巻する。その動乱の渦中でありながら、帝王の間は静寂に包まれていた。

天井に広がる血飛沫の痕から、滴り落ちる赤い零。その音だけが、この空間に反響している。

そして、その音を聴く者は1人しかいなかつた。彼は足元に倒れ伏した骸を一瞥し、窓の向こうに視線を向ける。

激戦の後を彷彿させる、血と亀裂と瓦礫に彩られた帝王の間。その一室の窓から覗いた先には——阿鼻叫喚の戦場が広がつていた。

彼らの叫びはここには届いて来ない。が、その表情に現れた慟哭の色が、彼らの痛みを如実に物語つっている。

「……」

鋼鉄の片胸チエストプロテクター当てと、メタリックレッドの強化外骨格を纏い。フルフェイスの鉄仮面で素顔を隠した、長身の少年。彼は頭頂部にトサカ状トサカメラソの刃を備えた、紅い仮面に哀しげな眼を隠して……戦場に散りゆく命を見届けている。

自分と同規格の強化外骨格を纏う、戦士達も。紫紺の体と漆黒の爪を持つ、禍々しい異星人達も。10mもの体躯を持つ、機械仕掛けの巨人達も。皆、生き延びる為に戦い、死んで行く。

少年は、帝王に「死」を齎した蒼い光刃の剣を持ったまま——静かに、この部屋の外へと歩み出して行つた。

一族の長が斃れた今も、異星人達は抵抗を続けている。これ以上の無益な犠牲を回避するには、自分も速やかに合流して彼らを滅ぼすしかない。

それが星雲連邦警察の決定である以上、拒否権などないのだから。「……帝王を倒せば、全てが終わるだなんて。やつぱり、嘘つぱちじやないか」

だが。そうと知りながら、これが現実と知りながら。帝王を討ち取つた真紅の英雄は、重い足取りと共に毒を吐く。その仮面に隠された貌は、死人のようであつた。

◇

この宇宙の平和維持を担う、星雲連邦警察^{せいうんれんぽうけいさつ}。その組織が総力を挙げて、絶滅させねばならないと躍起になつてゐる一族がいた。

その名は、シルディアス星人。

多種多様な異星人達の中において、抜きん出た戦闘力と闘争本能を備えている彼らは——その本能を満たし充足を得る為に、他の星々を侵略し暴虐の限りを尽くしていた。

生まれながらに凶悪な破壊者としての資質を持つ彼らは、子供の時点で既に強大な力を持つてゐる。強化外骨格を纏う、星雲連邦警察のエリート戦士「星雲特警^{せいうんとっけい}」すらも簡単に縊り殺せるのだ。

彼らとの平和的な交渉に成功した事例は皆無であり、日を追うごとに犠牲となる星が増える一方であつた。そして極力、過激な処置は避けるべきとしていた星雲連邦警察にも、限界が来てしまつたのである。

シルディアス星人を1人残らず殲滅し、この宇宙の平和を取り戻す。それが、星雲連邦警察の決断であつた。

組織の精銳である星雲特警はその急先鋒として、全宇宙に散らばるシルディアス星人を狙い追撃作戦を開始。凶悪な戦闘民族を撃滅すべく、行動を開始した。

——それから、数百年を経た今。

1人の若き星雲特警の手で、シルディアス星人を束ねる「帝王」が討たれ、指導者を失つた彼らの軍勢は急速に瓦解。

彼らの母星に攻め入つた星雲特警の強襲隊は、残る残党を駆逐すべく掃討作戦を遂行していた。

帝王を討つた、若き英雄。その少年の胸中に沈む、深い悲しみに背を向けて。

◇

「1人も逃すな！ 奴らを殲滅せねば、この宇宙に平和は来ない！」

シルディアス星の深い森の奥にある、難民キャンプ。そこは今、星雲特警の襲来により阿鼻叫喚の戦場と化していた。

エメラルドに輝く外骨格を纏う、強襲隊隊長メイセルド。彼は紫色

に発光する光刃剣を天高く掲げ、隊員達を鼓舞する。その後ろには、全長10mもの体格を誇る、機械の巨兵達がひしめいていた。

連日続いた戦闘により、既に隊員の過半数が疲弊しきつている。だが、この機を逃してシルディアス星人を宇宙まで逃してしまえば、再び犠牲となる人々を増やしてしまうのだ。彼らの生体反応を追える装置も、外宇宙まで逃げられては効力を発揮出来なくなるのだから。銀河の運命を預かる星雲特警として、それだけは避けねばならない。メイセルドは指揮官の身でありながら、隊員達の先頭に立ち戦場を駆け抜ける。

老兵と言えども、剣の腕は未だに衰えず。彼はがむしやらに挑み掛かるシルディアス星人の残党達を、次々と切り捨てていく。

彼らという命は物言わぬ肉塊と化し、焦げ臭い骸となつて大地に散らばっていた。その様を見せつけられ、圧倒的な不利を感じ始めた残りの星人達は、退却を始めるが——彼らの背に、メイセルドは容赦なく光線銃レーザーガンを撃ち放つ。ピストルの銃口から迸る閃光が、次々と逃げ惑う異星人達に死を齎した。

鬼気迫る彼の戦いぶりに促されるように、やがて他の隊員達も光線銃を構える。その中にはメイセルドの弟子であり、「蒼海將軍」の異名を持つエースもある——星雲特警ユアルクも含まれていた。

メタリックブルーの外骨格を纏う、彼の背後から援護射撃を行う巨兵達——すなわち人型機動兵器の部隊は、手にした黒い巨大銃砲を撃ち放ち、自分達より遙かに小さい異星人達を根こそぎ焼き払つていく。その光線砲による掃射が終わった後は、焼け爛れた無残な肉塊だけが散らばつていた。

そんな阿鼻叫喚の虐殺の渦中。ユアルクは残党達の背中を撃ちながら——やがて、自分の教え子がいないことに気づき、隊長の側に駆け寄る。

「隊長！　ハイデリオンの……タロウの姿が見えません！」
「なに……！」

「確か奴らの何人かは、キャンプ裏の林に逃げ込んだはず。それを追つて、1人で動いているのかも知れません。私も林に向かいます

！」

「頼んだ！」

ユアルクはメイセルドから離れ、キャンプ裏にある林へと駆け出していく。地に転がる難民達の骸を踏まぬよう、幾度も飛びながら。

第2話　叛逆の逃避行

鬱蒼と生い茂る林の中。その奥へと突き進むユアルクは、逃げ惑うシルディアス星人達を次々と射殺しながら前進していく。

（どうだタロウ……無事でいてくれ……！）

史上最年少で星雲特警となつた彼の教え子は、このシルディアス星での戦いで敵の首魁「帝王」を討ち、英雄となつた。

——が、彼自身は戦いを嫌う穏やかな少年である。両親をシルディアス星人に殺された身でありながら、彼らを憎みきれずにいたほどに。

彼の教官であるユアルクも、その師であるメイセルドも、そんな彼の心根は理解していた。だから今まで、殺意を剥き出しにしてくる凶戦士達としか戦わせなかつたのだ。

しかし今回の戦いは、今までのものとは違う。この戦いは難民キャンプにいる、女子供といった非戦闘員も含めた、全シルディアス星人の殲滅を目的としている。

一口に女子供と言つても、シルディアス星人としての残忍性や戦闘力を持つた個体もいることに違ひはない。稀に、高度な理性を以て本能を抑制している無害な者もいるが……前線に出てくる凶戦士達とは違うといつても、やはり侵略宇宙人の血統なのだ。

そうと知りながらも情を捨てきれず、それゆえに命を落とした星雲特警の同胞達を、ユアルクは今まで何人も見てきた。彼の教え子は、そういう危険性が特に高いのだ。

家族を奪つた仇にさえも憎しみを向けられない、愚かしいほどの博愛主義。そんなものを抱えたまま、無理に戦い続けてきた彼の心は、限界に近づきつつある。そんな彼にとつてこの掃討戦は、生き地獄に等しい。

だからこそ、その隙を窺かれる可能性も非常に高いのだ。彼という人物をよく知るがゆえに、蒼海将軍は焦燥を露わにして彼を探し続けっていた。

（……ん、あれは！）

——やがて、彼の視界に赤い煌めきが映り込む。それがメタリックレッドの外骨格を纏う教え子のものだと感づき、ユアルクは胸を撫で下ろした。

「ここにいたのか、タロウ——いや、ヘイゼリオン。メイセルド隊長も心配している、一度キャンプまで引き返すぞ」

「……」

「……？」

だが、近くまで駆け寄つても教え子は反応を示さない。その様子に不審なものを感じたユアルクは、彼の視線を辿り——巨大な木の陰で震える、人影を見つけた。

鋭い漆黒の爪と紫紺の肌を持つ、異形の宇宙人。紛れもなく、シリディアス星人である。

恐らくは難民キャンプから逃げおおせた非戦闘員なのだろう。母親らしき女性が、年頃の娘を抱き寄せて身を震わせている。

唇を震わせる彼女は、どうか見逃してくれ、娘だけは助けてくれ——と、視線で訴えていた。

そんな彼女達を目にしたユアルクは、事の経緯を察するや否や——躊躇うことなく光線銃を抜き、母親の眉間に撃ち抜いた。

「あッ……！」

「生き残りを見つけたはいいが、トドメを刺すこともできず睨めっこ。……お前らしいな」

その瞬間、母を奪われたシリディアス星人の少女は声にならない悲鳴を上げ、教え子は悲痛な声を漏らす。

敢えてそれに耳を貸さず、ユアルクは母の骸を搖さぶる少女に、銃口を向けた。

「……どうしても殺さねばならないんですか。この子一人が生きていたとして、何ができるって言うんですか！」

「少女だと子供だと、関係ない。全宇宙を震撼させたシリディアス星人が生きている——それが問題なんだ」

——数分前、メイセルドから通信が入っていた。

難民キャンプ周辺のシリディアス星人は殲滅した。残りの反応は、

この近辺のみであると。

つまるところ、シルディアス星人の生き残りはこの少女1人ということになる。

確かに教え子が言う通り、彼女1人が生き延びたところで、抹殺に躍起になる必要はないだろう。母親を殺されても怒るどころか、前よりひどく怯えているところを見る限り、好戦的な性格でもない。

恐らくは破壊衝動より理性の方が優っている、稀有な個体なのだろう。

——が、それでは終われないのだ。シルディアス星人の血が絶えていない。その事実は、力無き人々を怯えさせるには十分過ぎる重なのだ。

例え彼女自身は無害であるとしても、その子孫がそうであるという保証はない。彼女が生きているというだけで、人々は不安に晒され続けることになる。

可能性が存在することさえ、許されないので。ゆえにその芽を完全に摘み取り、より確実な平和を手にするしかないのである。

——それが星雲連邦警察の決断である以上、星雲特警である自分達は従うしかない。そう言い放つように、ユアルクは引き金に指を掛けた。

「……やめて、やめてください！　もう、もうこんなことする必要、ないじやないですか！」

「ハイデリオン。今まで、よくやつてくれた。よく頑張った。もうお前が手を汚す必要はない。背を向けて耳を塞ぎ、隊長の元へ走れ。それで、全てが終わる」

「や、やめて……やめてください……！　戦いなら、もう、終わつたんだ！」

その光景に——少女は怯えきった表情で声にならない悲鳴を上げ、教え子はフルフェイスの仮面の下で嗚咽を漏らす。だが、ユアルクはそれでも止まらない。

いたずらに苦しめることなく、確実に死を齎すため。僅かなブレもなく、照準を少女の眉間に向ける。

「やめ、て、くれツ……！　この子の命だつて、オレ達と同じ、命なんだ……！」

「さらばだ。……せめて生まれ変わつた先で、幸せになつてくれ」

そして教え子の痛みを汲み、少女の幸せを願いながらも——引き金を、引いた。

「——やめろおおおおおッ！」

その瞬間、だつた。

教え子は一瞬にして光刃の剣を引き抜き、逆袈裟に振るう。蒼く閃く刃がユアルクの光線銃を弾き、銃身が宙を舞つた。

銃口から放たれた光弾は明後日の方向に飛び、その隙に教え子は少女を庇うようにユアルクと対峙する。

「く……！　ハイデリオン、考え方直せ！　お前の苦しみがわからんとは言わん、だがこれは星雲連邦警察の決断なのだ！　それに背くといふのか！」

「構いません！　こんな、こんなこと……オレはもう、たくさんなんですよ！　——シユテルオソンッ！」

すると、教え子の呼び声に応じるように——空の彼方から、流線型のジェット機が飛来してきた。

真紅のボディを持つ、そのマシンを見上げると——教え子は少女の体を抱き抱え、一気に飛び上がる。

「きやあっ!?」

「くッ……！」

ユアルクは咄嗟に光線銃を拾い上げ、再び構えるが——照準に入っていた教え子の背は、どうしても撃てなかつた。

「な、何なんですか、一体、何が……！」

「……ここから逃げるんだ。少しでも、遠くへ！」

「えつ——きやあああ!?」

その隙にハッチを閉じた教え子は、膝の上に少女を乗せたまま、最大戦速でこの場から飛び去つてしまう。

——星雲特警の相棒である、可変式光速宇宙戦闘機「シユテルオソン」。その速さを以て逃げられてしまつては、容易には追いつけない。

蒼海将軍はシルディニアス星人の少女を連れ、逃走してしまった教え子の姿を、ただ見送ることしか出来なかつた。

「……タロウ、お前は……本当に、これでツ……」

仮面の下で、苦虫を噛み潰した表情を浮かべるユアルク。彼は拳を震わせ、己の判断を悔いるように立ち尽くしていた。

——いつかは、こういうことになる。薄々、そう察していたがゆえに。

第3話 ガラスの平和

——それから、1年の月日が流れた頃。とある辺境の小さな惑星で、穏やかに暮らす少年少女達がいた。

薄緑色の空の下、鬱蒼と生い茂る奇怪な森。その只中に造られた、質素な木造家屋。彼らはその「秘密基地」で、平和な日々を過ごしている。

「タロウ、ホラ見て！ これ、食べられる木の実！」

「これも、これも！」

「お、ホントだ。コロルもケイも、よく見つけたなあ」

太い木の枝に登り、夕食の木の実を探す黒髪の青年。そんな彼を見上げる2人の幼い子供が、籠に集めた木の実を嬉々として見せつけている。

——その子供達はどちらも、異様な容姿であった。眼は二つではないし、肌の色は違うし、翼や尾まで生えている。

紅いレザースーツに袖を通した青年は、そんな彼らに微笑を送りながら、その籠に新しく見つけた木の実を投げ入れた。次々と増える収穫に、子供達はキヤツキヤとはしゃいでいる。

「やつたあ！ 今日『馳走』やん！」

「だーめ、コロル昨日もたくさん食べてたじやん！ 半分は蓄えに残すの！」

「んだよー！ ケイのケチー！」

やがて、取り分を巡つて彼らは喧嘩を始めてしまう。そんな幼子達の日常に苦笑いを浮かべつつ、タロウと呼ばれた青年はボロ布のマントを翻し、枝から颯爽と飛び降りた。

「コラコラ、喧嘩しないの。……ケイ、籠を家に置いたら今日はもう遊んでいいよ。夕飯になつたら呼ぶから、あんまり遠くまで行かないようにな」

「え、いいの！ やつたー！」

「えー！ おれはー!?」

「コロルはオレと一緒に、今日の『馳走』探しだ。……たくさん食べ

たいんだろ？」

「よつしゃー！ 燃えてきたー！」

タロウに促されるまま、ケイと呼ばれた少女は籠を抱えて走り去つていく。そんな彼女を見送った後、タロウはコロルという少年の手を引き、森の奥へと歩み出した。

——それから、約20分ほど進んだ先で。コロルは長い耳をそばだてて、声を上げる。

「あれ……？ この音、シンシア？」

「え……？」

その言葉に反応して足を止めたタロウは、耳を澄まして音を辿る。……鋭い刃で、枝を切る音。それを耳にしたタロウは、早足でその場所を目指した。

「……あっちだな。行こう、コロル」

「うん！」

コロルの手を引き、巨大な木の幹の上を滑りながら、タロウは森のさらに奥深くへと突き進む。

——陽の光を浴びて煌めく、森の中の泉に辿り着いたのは、それから間もなくのことだった。

泉に到着したタロウ達の視界には、黒い爪を振るい枝葉を切る美少女の姿が窺える。コロルは彼女の音を聞き取り、この場所を探り当てていたのだ。

少女はタロウ達には気づかないまま、枝を切り地面に落としている。その枝には、タロウ達が探していた木の実が無数に繋がっていた。

「シンシア！」

「ひやあ！」

だが、背後から自分の名前を呼ばれた途端。少女は素つ頓狂な声を上げてひっくり返ってしまう。ショートボブに切り揃えた、黒く艶やかな髪が——ふわりと靡いた。蓮^{ハス}に似た淡い桃色の花飾りが、それに呼応するように揺らめく。

紫紺の肌を保つ異形の少女は、恐る恐る振り返り——眉を顰めたタ

口ウと目が合う瞬間、肩を竦ませた。

「タ、タロウ……」

「シンシア、いつも言つてるだろう。君は、あんまり家から離れちゃいけないんだ。食事ならオレが探してくるし……」

「で、でも……いつもタロウに任せてばかりだし、私も何かしなきやつて……」

「何もやつてない、つてことはない。いつもコロルやケイと遊んでくれてるだろう」

「……うん……」

刀剣のような鋭い爪を持ちながら、まるで覇気のないシリデイアス星人の少女。そんな彼女に苦笑を浮かべながら、タロウは手を差し伸べる。

爪を全く恐れない、その掌に頬を染めて——シンシアは彼を傷つけないようにゆつくりと、温かい人間の手を握る。

やがてタロウの手を借りて立ち上がった彼女は、コロルに柔らかな微笑を送つた。

「……今日は、コロルも一緒に来てくれたんだね。ありがとう」

「へへっ！ なにせ今日はご馳走だからな！」

「シンシア。先に帰つて、ケイと遊んでくれ。……2人して、遠くまで行かないようにな」

「あ、あはは……」

苦笑交じりにクギを刺すタロウの言葉に、シンシアは乾いた笑いを浮かべる。

——その時だつた。

「……!?」

「あれ……タロウ、この音、なに？」

タロウは咄嗟に顔を上げ、一瞬にして剣呑な面持ちに変わる。その原因である「音」を耳にしたコロルは、聞いたことのない波長に首を傾げていた。

一方、タロウの様子からただならぬものを感じたシンシアは、不安げな表情を浮かべている。

(この音はシユテルオンの……まさかツ——!?)

やがて、その「音」の実態を知るタロウは眼を見張る瞬間。茂みに向こうから、眩い閃光が飛び出して来た。

「危ないッ！」

「きやあ！」

「わああ!?」

タロウは咄嗟にシンシアとコロルを抱き寄せ、地面に伏せる。彼らの頭上を閃光が通り過ぎた瞬間、着弾した先の木に風穴が空いてしまった。

「光線銃……やはり！」

その光景を目の当たりにしたタロウは、身を起こすや否や腰のホルスターに手を伸ばし光線銃を構える。

そして——シンシアを狙つて飛んで来た閃光を、こちらからの銃撃で弾いた。

「コロル！ シンシアを連れて家に帰るんだ！」

「タロウ！ なんだよあれ、どうなつてんの!?」

「いいから早く！ シンシア、走れるか!?」

「あ、うう……！」

銃撃が止んでいる間に、タロウは2人を助け起こうとする。が、コロルは謎の現象に眼を剥くばかりであり、シンシアは過去の恐怖を想起させる事態に、腰を抜かしていた。

「——ようやく見つけたぞ、タロウ。いや、星雲特警ヘイデリオン」「……！」

そして。茂みの奥から——黒いマントを纏かせる、金髪の美男子が現れる。その碧眼でタロウ達を射抜く彼の手には、光線銃が握られていた。

艶やかなブロンドの髪を短く切り揃えた、蒼いレザースーツの男は、黒髪の青年をじっと見据えている。タロウもまた、そんな彼を剣呑な眼差しで見つめていた。

「さあ、シルディアス星人をこちらに渡して貰おう。今度こそ、邪悪な侵略者の血統を絶つ」

「……ユアルク教官！」

——蒼海将軍の、容赦なき眼を。

第4話 ヘイデリオンとユアルク

突如襲来した、星雲連邦警察の刺客。その恐怖の象徴を前に、シンシアは震え上がっていた。

愛する母を目の前で奪つた彼が、今度は自分を滅ぼそうとしている。眼前に広がるその現実が、彼女の呼吸を乱れさせ、その足を竦ませていた。

そんな彼女の窮状を一瞥し、タロウは唇を噛み締める。

「ユアルク教官……！」

「……よもや、このような未開の辺境惑星に逃れていたとはな。おかげでお前達を探し出すまでに、1年も掛かつてしまつた」

「……今までして、シンシアを殺さなきやいけないんですか！　この子1人のために、そんな！」

「お前の言い分は分かる。が、それが星雲連邦警察の決定なのだ。彼女を殺さねばならん理由はないかも知れんが、生かしておく理由もない」
「そんなことはさせない……！　もうこれ以上、誰も死なせるものか！」

ユアルクは淡々とした様子で、シンシアを射殺すべく光線銃を連射する。その光弾を全て撃ち落とし、タロウは彼の「処刑」を阻止していた。

やがてユアルクは教え子の光線銃から処理しようと、彼に向けて発砲する。すると、タロウの光線銃の銃口下部から光刃の短剣が伸び、その光弾を全て切り落としてしまつた。

「——大丈夫だシンシア！　オレは死なない、君も死なせない！　だから、走るんだ！」

「……っ！」

互いに1発も当てさせない、一進一退の攻防。その霸気に当てられ、萎縮していたシンシアは——タロウの声に、ハッと顔を上げる。

1年前のあの日から、自分を守り続けて来た彼。初めて会つた頃、全てに怯えてばかりだった自分を、何度も助けてくれた彼。……自分

のよう、異形ゆえに追放された子供達を、我が子のように匿つてくれた彼。

——そんな彼の口から、死なせない、と宣言された。その事実から胸に染みる想いが、シンシアの足を駆り立てる。

彼女はキッと蒼海将軍を一瞥した後、コロルの手を引いてこの場から走り去つて行つた。星雲連邦警察の刺客は、そんな彼女を追おうとするが——タロウの牽制射撃に阻まれてしまう。

「……コロル、こつち！」

「シツ、シンシア!?」

「コロル、シンシアを頼むぞ！」

「お、おうつ！」

そんな彼らの戦いに、後ろ髪を引かれながら。シンシアはコロルの手を引き、戦場と化したこの泉から姿を消してしまつた。

その背を見送つた後、タロウは改めてユアルクと対峙する。

「……お前は捜査能力や戦術眼こそからつきしではあつたが。その類稀な戦闘力の高さだけは、本物だつた」

「……」

「そんなお前が相手では、光線銃^{こんなもの}で決着が付くはずもない、か。……いいだろう、コスモアーマーで勝負を付けてやる」

一步も引かぬ、という決意を纏う教え子の眼光。その眼差しを前にした蒼海将軍は、漆黒のマントを翻し——メタリックブルーの片胸当てを露わにする。

それに呼応するように、タロウもボロ布のマントを翻した。その胸に巻かれたメタリックレッドの片胸当てが、光を浴びて煌めきを放つ。

「——^{そうせい}装星」

やがて、その呑きと共に。片胸当てから広がる光の粒子に包まれ、ユアルクの全身はメタリックブルーの外骨格に覆われてしまつた。

フルフェイスの鉄仮面越しに、ユアルクは鋭い眼光で、獲物と化した教え子を射抜く。

「装星ッ！」

——それは、タロウも同じであった。片胸当てを中心には広がる光の粒子は、彼の全身をメタリックレッドの外骨格で覆い尽くしてしまう。

彼らは互いの素顔を仮面に隠したまま、腰から光刃剣を引き抜き対峙する。もう、戦いは避けられない。

コスマーラーを纏つた2人はマントを靡かせ、一気に剣を振りかかる。蒼く発光するタロウの剣と、翡翠に輝くユアルクの剣が、火花を立てて激突した。

互いの叫びが重なり合い、それと同時に剣が交わる。首を狙つて放たれた一閃を斬り払い、腹部を狙うカウンターを、手首を返して持ち替えた光刃で受け流す。そんな一進一退の剣戟が、絶えず続けられた。

やがてタロウがユアルクを蹴り飛ばし、泉に転落させる。浅い水辺に転がり落ちた蒼い騎士は、水飛沫に紛れて光線銃を撃ち放つた。

——その光弾が、タロウの脇腹を掠めた時。泉に飛び込んだ彼の光刃剣が、蒼海将軍の光線銃を断ち切る。

銃身を斬られた光線銃はただの鉄塊と成り果て、ユアルクは咄嗟にそれをタロウに投げ付けた。

タロウは、それを光刃剣で切り落とす。——その一瞬の隙を突き、今度はユアルクが体当たりを仕掛けってきた。

さらに激しく水飛沫が上がり、足を取られたタロウは仰向けに転倒してしまう。視界を水に覆われ、ユアルクの姿がぼやけていた。

その隙に蒼海将軍は光刃剣を構え、タロウの首筋に当てようとする。降伏を迫るために。

——だが、そんな甘さが動作の遅れに繋がっていた。ユアルクが光刃剣を手にすると同時に、タロウは巴投げの要領で彼をひっくり返してしまった。

そこからいち早く身を起こした彼は、体勢を立て直そうとしたユアルクに飛び蹴りを放つた。泉の外まで吹っ飛ばされた蒼い騎士は、なんとか立ち上がるが——その瞬間、光線銃の連射を浴びてしまう。「く……！」

——タロウはこの1年、前線から離れていた。そのブランクがありながらも、戦いの腕はまるで衰えていない。

否、その1年をとっても差を埋められないほどに、彼の戦闘力は抜きん出ていたのだ。自分を遙かに超越した教え子の力に、複雑な感情を抱きつつ——ユアルクは銃撃を受けた胸を押さえ、後方に飛び退いた。

「だが、諦めるわけにはいかん……シユテルオンツ！」

ユアルクは険しい表情を画面に隠し、相棒である戦闘機を呼ぶ。その叫びに呼応するように——木々を激しい風で揺らしながら、蒼いジェット機が飛来して来た。

彼は素早くそれに飛び乗ると、機体に装備されている光線砲による掃射を開始する。巨大な閃光が雨のように降り注ぎ、タロウを襲つて来た。

「クツ……シユテルオンツ！」

土埃と爆音が絶えない死地の渦中に立たされた彼は、何度も地を蹴り宙を舞い、回避に専念する。その立ち回りの中で、対抗するように相棒を呼ぶタロウの声に反応し、遙か上空から赤いジェット機が急降下しててきた。

「ぐおつ……！」

オートバイロット

自動操縦機能による、上方からの射撃を浴びたユアルクは掃射を中心断し、操縦桿を切つて旋回する。その回避行動による隙を突き、タロウは素早く自機に飛び乗った。

〔チエンジ変形、メイルトルーパー歩兵形態！〕

そして、音声入力と同時に特定のレバーを倒し——自身の機体をジェット機から、人型機動兵器の姿へと変形させる。

鋭い刃のようなトサカと、蒼く発光する両眼。そして、赤一色のメタリックボディを持つ、体長10mの機械巨兵。背部のスラスター噴射によつて滞空する、その人型機動兵器を目にして——蒼海將軍は固唾を飲んだ。

——この光速宇宙戦闘機「シユテルオン」には元々、人型兵器に変形する機構はなかつた。だが、強化外骨格「コスモアーマー」さえも

食い破るシルディアス星人に対抗するため、星雲特警が着用する「第2の鎧」として近年、試験的に導入されるようになつたのである。

その数少ない最新型を所有するヘイデリオン——もといタロウは、赤く巨大な鉄腕で光線砲を構える。漆黒の大型銃砲は、旋回中のユアルク機を正確に捉えていた。

一方的な虐殺のためだけに造られた、その最新型を嫌うベテラン達の1人である蒼海將軍は——赤い巨兵を見遣り、より険しい面持ちになる。

「教官……この距離なら、外す方が難しいくらいですよ。シユテルオンから降りて、投降してください」

『私が投降したとして、お前はどうする？ 人質にでもする気か？ ——シルディアス星人の殲滅を最優先事項としている、今の星雲連邦警察が……私1人の命など、いちいち気にかけるとでも思っているのか？』

「……ッ！ それが、正義を掲げる星雲特警の……星雲連邦警察の在り方ですか」

『勘違いするな。我々に在るものは権威であつて、正義ではない。そんな御題目は、周りが勝手に並べているだけのことだ。そして権威に刃向かう存在こそが、常に悪と糾弾される。……お前が今しているのは、そういう戦いだ！ 私は無謀な戦いで命を散らせるために、お前に戦い方を教えたのではないッ！』

やがて、蒼いジェット機は怯むことなく突撃し、ヘイデリオン機に光線砲を撃ち放つ。その怒りとも、悲しみともつかない叫びを聴きながら——タロウはスラスターを巧みに制御し、光線砲の連射を回避した。

——正義を持たない、権威。それが星雲特警の本質であると叫ぶユアルクは、本気でタロウに当てることが出来なかつたのである。

戦時中、殺し合いを嫌うタロウの心的負担を和らげるために——「星雲特警の戦いは正義」「シルディアス星人は斃すべき悪鬼」などと吹き込んでいたのは、他ならぬユアルク自身だつたのだから。

「……ッ！ それでも！ こんな、誰かの血を吐かせ続けるような真

似を……放つておくわけには行かないんだッ！」

その自己矛盾から生まれる罪悪感が、照準を鈍らせた時。戦局は、一気に反転する。

蒼いジェット機とすれ違う瞬間。ハイデリオン機は素早く身を翻し——後方からユアルク機に反撃の一閃を撃ち込んだ。

空戦ドッグファイトそのものが成り立たなくなるほどの旋回性能。それが人型の歩兵形態を持つ、最新型シユテルオンの特性なのだ。

その性能差に物を言わせた銃撃を浴びて、ユアルク機はふらつきながら退却を始めた。

『ぬあッ……！　くッ、タロウ……！　そんなことでは、お前はツ……！』

口惜しげに、苦悶の声を漏らしながら。少年の師は、被弾した自機を辛うじて安定させながら、森の彼方へ飛び去っていく。

「……」

そんな彼を、タロウは深追いすることなく見送った。今は追撃よりも、シンシア達の方が気掛かりだからだ。

焼け野原となってしまった地上に着地し、シユテルオンから飛び降りたタロウは、コスマモアーマーを解いて本来の姿に戻ると、ボロ布を翻してここから走り去っていく。その表情に、焦燥の色を滲ませて。（どうどう、ここが見つかった……！　やるしかない、オレがみんなを守るしか――！）

第5話 ヒダカ・タロウの名を捨てて

——翡翠色の惑星を、暗黒の空から見下ろす一隻の大型宇宙船。その操縦席に座している、緑のレザースーツを纏う褐色肌の男は、通信で金髪の男と対話していた。

モニターに映る弟子の表情は、心労ゆえか酷くやつれているように見える。彼の教え子のことであるのは、明白であった。

「……報告を聞こうか、ユアルク」

『はい。……やはりヘイデリオンは、この惑星ルバトナに潜伏していました。シルディアス星人の少女も一緒です』

「そうか。……お前の顔を見るに、いい返事は貰えなかつたようだな』

『……申し訳ありません』

「構わん。1年……いや、それよりも前から予期していたことだからな」

『……』

この船から、現地にいる蒼海将軍と交信しているメイセルドは——神妙な面持ちを浮かべ、弟子から視線を外す。ルバトナと呼ばれた惑星を見つめるその眼は、遠い過去を眺めているようだつた。



星雲連邦警察が管轄下に置いている無数の惑星。その中の一つに、「地球」という星がある。

数十年前まで豊富な資源を保有していたその星は、過去に幾度も宇宙怪獣や異星人達からの侵略を受けてきた。その都度、星雲特警が動き彼らを撃退してきた、という歴史がある。

——しかし。地球上に住む人々が私利私欲のために自然を食い潰し、星の資源を切り詰めていくに連れて、地球そのものの「値打ち」が低下。

現在ではわざわざ侵略するほどの価値はないと看做され、怪獣や異星人達に放置されるようになつていた。

その頃から地球人達は、星雲特警に頼らず故郷を守る為、「地球守備軍」という國家の枠組みを超えた組織を作り出していたのだが——そ

れが完成した時には既に、かつての侵略者達は地球への関心を失っていた。

そうして幸か不幸か、地球人達は結果として平和を摑むことに成功した——のだが。最後に星雲特警が地球に出向いた日から、30年以上の年月が過ぎた頃。

——100人以上のシルディアス星人が、地球に来襲したのである。

破壊と殺戮を求める彼らにとつて、星の資源などハナから無関係なのだ。道理も兵器も通じない侵略宇宙人の急襲を受け、地球守備軍はなす術もなく撃退されてしまう。

異星人達が30年以上も攻めてこなかつたのは、地球守備軍に恐れをなしていたから——そんな根拠のない思い込みが慢心を招き、惨劇に繋がったのである。

事態を知り、駆け付けた星雲特警により半数以上のシルディアス星人が討たれ、侵略者達は最終的に撃退された。が、結果として地球守備軍は全く戦果を上げられず……多数の戦死者を出した上、200万人もの民間人が犠牲となつたのである。地球守備軍の最新兵器である宇宙戦闘機「コスマビートル」も、まるで歯が立たなかつたのだ。

——そして。その日を境に、一つの町が地球の地図から消え去つた。そして、その町に住んでいた住民達は全員、死亡したものとして報じられたのである。

だが、その犠牲者達の中に、ただ1人。遺体の一欠片も見つからず、行方不明者として処理された少年がいたのである。

その少年——火鷹太ひだかたろうは、当時現場に駆けつけていた2人の星雲特警により、保護されていたのだ。

メイセルドと、ユアルク。この2人によつて。

——シルディアス星人は、一度取り逃がした獲物への強い執着心を持つている。このまま太太を解放しても、逃げ延びた個体のうちの1人が、必ず少年を殺すために地球へ帰つてくるのだ。

しかも彼らはほとんどの個体が、「一度獲物を逃せば厄介な敵となつて復讐される」という経験を共有している。直接彼らに襲われた

地球人の中でも唯一の生き残りである太団は、間違なく標的にされてしまうのだ。

そうなれば、なす術を持たない少年は今度こそ殺されてしまう。その「ついで」で、再び地球人が何人殺されるかわからない。彼らは血と闘争を好みはするが、自分達に損害が出ない範囲を選ぶ狡猾さも兼ね備えている。

——「星雲特警が動かない程度」で、幾つもの命が奪われることになるのだ。

経験則からそう判断した2人は、地球が再びシルディアス星人に襲われるリスクを回避するため。彼らに襲われた地球人達の中で、唯一生き延びた少年を、自分達で引き取ることに決めたのだつた。

——少年の父であり、地球守備軍の伝説的戦闘機^{ファイターバイロット}火鷹吾団^{ひだかごろう}は、シルディアス星人との戦いですでに殉職している。元より彼には、身寄りもないのだ。

とはいって、当時はシルディアス星人を駆逐するために、1人でも多くの星雲特警が必要な状況であり——無力な少年を穏やかに養える余裕など、ありはしなかった。

そこでメイセルドは、太団に自衛手段を身に付けさせるべく、彼を星雲特警として育てることに決める。その判断には、シルディアス星人にマークされている太団を、地球を狙わせないための^{デコイ}圓に使おうと、いう、星雲連邦警察の思惑も絡んでいた。

そんな上層部の非道さを察しつつも、結局はその通りにするしかない。それに、地球人である太団を星雲特警として育成すれば、地球への襲撃に味を占めかねないシルディアス星人に対する牽制にもなり得る。

そうした葛藤を抱えたメイセルドによつて、教官として選ばれたユアルクは——太団を師として兄として、徹底的に鍛え上げた。

——争いを好まない穏やかな性格に反して、太団は星雲特警としての素質に満ち溢れていた。加えて父譲りの操縦センスもあり、シュテルオンのパイロットとしても優秀であった。

捜査能力や戦術眼といった、人の上に立つ者に要求される資質こそ

皆無ではあったが、単純な戦闘力においては他者を圧倒する才覚を持つていたのである。そしてそれは、シルディアス星人との抗争が激化していた当時において、非常に貴重であるとされた。

そのような世情もあり、太団は訓練を始めてから僅か2年余りで、星雲特警の資格を獲得。弱冠14歳という異例の若きでコスモアーマーを託され、コードネーム「ハイデリオン」を与えられたのだつた。——だが、両親を殺した相手にすら、心から憎しみをぶつけられない纖細な少年にとつて。ここから始まる戦いこそが、本当の地獄だつた。

血で血を洗う過酷な戦いの日々。自分自身に降り掛かる危険や疲弊だけでなく、戦う相手の断末魔や悲鳴も、彼の心をすり減らしていった。

——いつまで、こんな戦いを続けなくてはならないんですか！　あと何人殺せば、この戦いは終わるんですか！？

嗚咽交じりに、そう訴える教え子の嘆きを……メイセルドとユアルクは、今でもはつきりと覚えている。

そして、父として兄として、師として接してきた彼らでさえも、その問には最後まで答えることが出来なかつた。まだ太団の技が洗練されていなかつた当時は、シルディアス星人達との決着が付く見通しなど、まるで立つていなかつたのである。

いつかは終わる。あと半年。あと数ヶ月。お前が力を尽くしてくれれば。

——そんな曖昧な言葉ではぐらかし、先延ばしを繰り返す。そうしてでも彼らは、天賦の才を持つ太団の力に頼るしかなかつたのだ。それがどれほど、少年の心を苦しめているのかを知りながら。

そして、太団が「星雲特警ヘイデリオン」となつてから2年。彼が16歳を迎えた頃——ついに、限界が訪れた。

シルディアス星人達を束ねる「帝王」との決戦。それさえ制すれば戦いは終わり、これ以上血が流れることはなくなる。

メイセルドにそう説得された太団は、言われるがまま死力を尽くして戦い抜き、ついに「帝王」を打ち倒すに至つたのだが——結局、シ

ルディアス星人達の血が止まることはなかつた。

——その後になつてようやく、太団は星雲連邦警察の決断を悟つたのである。シルディアス星人を絶滅させるまで、自分達の戦いは終わらないのだと。

そして、彼らの血族を断ち切るべく開始された、難民キャンプへの襲撃。その渦中でついに、太団の心は限界を超える——星雲連邦警察への叛逆に至つたのである。

彼を欺き、利用し続けていれば、いづれはこうなる。それはメイセルドもユアルクも、以前から察していたことだつた。

しかし、星雲特警として優れた資質を持っていた彼への親心が、それを誤魔化していたのである。彼は強い子だ、だから乗り越えられる、きっと大丈夫。

——そんな当人の思いを無視した結果が、この始末だつた。

太団の苦悩を知りながら、それに目を背け、天才だ英雄だと美辞麗句で担ぎ上げ、体良く利用し続ける。

そのような師としての愚行を改めて思い知らされ、メイセルドもユアルクも、沈痛な表情を浮かべていた。



——現在、太団は戦場の混乱の中で行方不明になつた……ということがになつてゐる。

「帝王」を討つた英雄としてすでに祭り上げられているヘイデリオンの名を、今更「シルディアス星人を連れて逃げた反逆者」という事実で汚すわけにはいかないからだ。

シルディアス星人の犠牲になつた人々の総数は、数千億人にのぼる。彼らの遺族にとつて「星雲特警ヘイデリオン」は平和と正義の象徴であり、彼を讃える人々の声が、星雲連邦警察への支持にも繋がっているのだ。

それだけに、今のヘイデリオン——太団本人の行動が明るみに出てしまうのは、上層部にとつては相当な痛手なのである。

そこで上層部は、彼との関わりが深いメイセルドとユアルクに、太団の捜索と説得を命じているのだ。最悪の場合、シルディアス星人の

生き残り共々抹殺せよ……とも。

——メイセルドとユアルクにとつても、これは太団を救う好機であつた。散々手酷く利用してきた罪を償い、彼を助けるには。

英雄という名誉を与え、「絶対的正義」の庇護下に導くしかない。それが、2人の決意だつたのである。

『……タロウは、まだかなりの練度を維持しています。恥ずかしながら、私1人では……』

「ああ、わかっている。なにせ相手は、お前が育てた『英雄』だからな。……お前はそこで待機している。明日は、私も降下する」

『了解しました……』

「我々の手でシルデイアス星人を始末するにせよ、まずはタロウを抑えねば話にならん。……明日が勝負だ」

やがて通信を切り、独りになつたメイセルドは天を仰ぐ。褐色の肌を持つスキンヘッドの老兵は、憂いを帶びた眼差しで眼前の惑星を見つめていた。

「……お前の痛み。悲しみ。それら全てを知りながら、背を向けておいて……何が父。何が師。笑わせてくれる……」

第6話　流れ着いた先

闇夜に包まれた、静寂の中。

幼子達の寝息に紛れて響き渡る、苦悶の声を——太団は、敏感に聞き取っていた。身を起こした彼の隣には、寝静まつたコロルとケイ、そして……悪夢にうなされるシンシアが寝そべっている。

やがて目を覚ました彼女は、自分を見つめる太団の視線に気づき、恥じらうように目を背けてしまつた。彼にとつての自分は「妹」だが、自分にとつての彼は「異性」なのだ。

「……ごめんなさい、起こしてしまつて」

「元々疲れなかつたんだ、別に構わない。……怖いよな、やつぱり」

太団はそんな彼女の黒髪に指を絡ませ、劳わるように頭を撫でる。全てに絶望し、怯えていた1年前からずつと、彼はこうして孤独な少女を慰めてきた。

——母を奪われ、故郷を奪われ、命を狙われ。ただシルディアス星人に生まれただけの彼女は、募る悲しみを少年にぶつけるしかなく。生まれ持つた鋭利な爪で、何度も彼を傷つけたかわからない。

それでも太団は、決して抵抗することもなく。彼女の怒りも悲しみも、その身で受け止め続けてきた。赤い服の下には今も、痛ましい生傷が隠されている。

そうまでして自分を守ろうとする、彼の胸中がわからないほど、シンシアは子供ではなく。そうと知つて、悲しみを堪えられるほど、大人でもなかつた。

母星と家族の仇であり、自分の恩人もある。そんな彼に、シンシアが悲しみの爪を振るわなくなつたのは、この星に来てから半年以上が過ぎてのことだつた。

——彼女がどれほど例えようのない悲しみを、やり場のない怒りをぶつけても。傷つけても、彼は決して少女に光刃を向けることはなく。いつだつて、傷だらけの地球人の腕で、優しく少女の体を包み込んで來た。

その腕は、シルディアス星人の膂力に比べれば脆弱で、シンシアが

その気になれば簡単に折れてしまうというのに。それでも彼は恐れることなく、ただあやすように、彼女に寄り添い続けてきたのだ。ヒトのものではない、異形の少女に。

その献身に、次第に心を溶かされ。やがて彼女は、彼なしではいら
れなくなつてしまつていた。それが異性への欲求であると、少女自身
が悟つたのは、つい最近のことである。

「……」
全てを奪われ、悲しみの中で生かされてきた彼女は、この銀河の果てまで流された今になつて——ヒトらしい感情を得るに至つたのだ。

やがて。太団の掌から伝わる甘美な温もりに、甘えるように。シンシアは顔を背けたまま頬を染め、吐息を漏らす。彼に貰つた宝物——
淡い桃色の花飾りを、胸に抱いて。

——ずっと、こんな時間が續けばいいのに。誰にも脅かされることなく、こうして暮らしていられればいいのに。そう願うたびに、昼間に突きつけられた「現実」が、彼女の涙を誘う。

毛布に染みる雪を一瞥した太田が、そつとシンシアの背に身を寄せたのは、その直後だった。

「……君も、コロルもケイも、必ずオレが守る。寝る前に、そう言つただろう？ 明日は、コロルに剣を教えてやる約束だしな」

……私も、それは同じだよ」

頬を染め、顔を近づけながら、シンシアは太囃と視線を交わす。濡れそぼつた瞳は、自分に残された最後の希望を、ただ真っ直ぐに見つめていた。

「誰からも愛されない。憎まれ、滅ぼされるか、滅ぼすか。それしかな
いって言われてきた私に、こんな暮らし出来る日が来るなんて、信
じられなかつた。遠い星の子達にしかできないことだつて、ずっと
思つてた」

「……それは、コロルやケイも一緒だよ。2人とも、特異な異星人同士の混血児だったから、異端視されてこの森まで追いやられた。オレ

だつて、星雲連邦警察に付き合いきれなくて、ここまで君と逃げてきた。みんな、君と同じ。遠い世界の希望に縋つて、ここまで流れてきたんだよ」

「じゃあ……これからもずっと、みんな一緒に流れていいける？」

「もちろん。それを邪魔する人達なんて、オレがみんな追い払つてやるさ。……教官と隊長は、怒るかも知れないけど」

やがて2人は、囁き合いながら身を寄せ合い、互いの温もりを確かめ合う。子供達を、自分達の声で起こさないよう……静かに、ゆっくりと。

「……だから、信じて待つてくれ。どんなことがあっても、オレ達はみんな一緒だから」

「うん……うん……」

シンシアは、そんな太団の言葉に酔いしれるように。逞しい彼の胸に顔を埋め、微睡みに沈んでいく。

こうしていれば、例え夢の中でもきっと彼が助けに来てくれる。そんな、どこまでも都合の良い、甘い夢を抱いて。

——そんな幼気な少女の細い肩を、抱き寄せながら。太団は鋭い眼差しで夜空を仰ぐ。その眼はかつてない困難に挑む、勇敢な色を湛えていた。

(……ユアルク教官を退けた今、再び彼が1人で来るとは考えにくい。
……来るだろうな、隊長……)



——翌朝。聞き慣れない……否、昨日初めて聞いた「音」に反応したコロルが、慌てて家から飛び出して来た先では。すでに身支度を整えていた太団が、剣呑な面持ちで佇んでいた。

「タ、タロウ！　この音つ！」

「ああ、わかってる。……悪いなコロル、剣を教えるのは今日の戦いを乗り切つてからだ」

コロルの後ろに隠れているケイとシンシアは、不安げな面持ちで互いの顔を見合せている。コロルも棒切れを握つて身構えてはいるが……その足は、ガタガタと震えていた。

「タ、タロウ……大丈夫かなあ……」

「……大丈夫だよ。タロウなら、絶対に大丈夫だから。私達は信じて、ここで待つの。タロウがいない間、この家を守れるのは私達なんだから……ねつ？」

「シンシアあ……」

不安で今にも泣き出しそうなケイを、シンシアは微笑を浮かべて励ましている。が、その裏に滲む不安の色を、隠しきれずにいた。やがてそれが表出するように、シンシアは太団の傍らに歩み寄つていく。

「……シンシア。子供達を頼む」

「うん……タロウ、気をつけて……ね」

そんな彼女に微笑を送り、太団はボロ布のマントを翻すと——「音」の方角を辿り、走り出して行つた。

(……損傷していないシユテルオンのエンジン音だ。来たな、隊長……!)

これから始まる戦いに、「帝王」との決戦以来となる極度の緊張感を覚えながら。

「……タロウ……」

——そして、そんな彼の背を見送るシンシアは。

この戦いが、昨日の太刀合わせとは全く違うものであると、シリディアス星人の直感で察して。

張り裂けるような思いを抱えるように、悲痛な表情を浮かべるのだつた。

第7話 戦いと鮮血

天を衝くように聳え立つ巨大な樹木。それらが幾つも立ち並ぶ、深い森の中で——太団は、2人の星雲特警と対峙していた。

金髪を切り揃えた色白の美男子。褐色の肌を持つ、スキンヘッドの屈強な大男。彼らは太団の前で黒いマントを脱ぎ捨て——メタリックブルーとエメラルドの片胸当てを露わにする。

それに対応するように、太団もボロ布のマントを投げ捨てた。メタリックレッドの片胸当てが、僅かに差し込む陽射しに照らされ、眩い輝きを放つ。

「……やはり答えは変わらんか、ハイデリオン。優しくも、頑固な男だ」

「あなた方にシンシアを渡すわけにはいきません。……絶対に、ここで止めてみせる」

かつての隊長——メイセルドを前にしても、太団は一步も引くことなく抗戦の意を告げる。そんな教え子の姿に眉を顰めたユアルクは、意を決したように声を張り上げた。

「……ならば我々も星雲特警の責務を果たすのみ。お前を倒してでも進ませて貰うぞ、ハイデリオン！」

「……！」

やがて、彼らの叫び——「装星」のコールが重なり合い。この森に閃く三つの輝きが、彼らの全身を外骨格で覆い尽くしてしまう。

エメラルドの鎧を纏う、メイセルド。メタリックブルーの甲冑を身に付けた、ユアルク。そしてメタリックレッドの装甲に身を包む、ハイデリオンこと太団。

彼ら3人は、互いの怒号を合図に光刃剣を引き抜き、一気に激突していく。かつて師弟であり、親子であつた彼らは、こうすることできか互いに折り合いを付けることが出来なくなつていた。

激しい氣勢と共に、メイセルドの紫色の光刃が閃き——それと同時に、ユアルクの翡翠色の光刃が唸りを上げる。

その二つの斬撃に挟まれた太団は、咄嗟に腰のホルスターから光線

銃を引き抜き——銃口下部から伸びる光刃短剣で、ユアルクの剣を受け止めた。そして、より強力なメイセルドの一撃を、蒼く輝く光刃剣で防御する。

そこから体勢を立て直すべく、太団はメイセルドに蹴りを放つのが——その一手は読まれていた。膝でミドルキックを防がれた太団は、逆に軸脚を払われ転倒してしまう。

次の瞬間、2人は一気に光刃剣を振り下ろすのだが——仰向けのまま光刃剣と光刃短剣で、太団は彼らの追撃を凌いでしまう。そこから股を開くようにV字に放った蹴りが、双方の顔面に直撃したのは、その後だつた。

彼らがよろけた隙に首の力で跳ね起きた太団は、光線銃の連射で2人を牽制しながら、距離を取る。そんな彼を追うように、2人も光刃剣で光弾を切り払いながら距離を詰めていった。

幹から枝へ。枝から枝へ。高所を飛び回る太団を狙い、2人は同時に光線銃を連射する。だが、太団はその全てを巧みにかわし、地の利を活かして彼らを攪乱していた。

しかし、その目的が自分達を搔き回すことにあると看破した2人は——互いに額き合うと、同時に銃口を一点に集中させる。次に彼らが撃ち抜いたのは、太団が着地する予定だつた枝。

足場を奪われた太団は、そのまま墜落していく——彼を追撃すべく、2人も飛び降りていく。

だが、それこそが太団の狙いであつた。他の樹木から垂れている蔓を手に取つた太団は、そこから弧を描くように身を振つて宙を滑り——空中にいる2人に、斬撃を浴びせる。

直前で気づいたメイセルドは辛くも防御に成功したが、反応が遅れたユアルクはまともに斬撃を浴び、墜落してしまつた。メイセルドは反撃に出るべく、すれ違いざまに太団の背後に光線銃を撃ち込む。

星雲特警のエース「蒼海將軍」に痛打を浴びせたことによる、一瞬の隙。そこを突かれた太団は咄嗟に振り向き、銃口下部の光刃短剣で防御するが……その弾みで自分の銃を弾かれてしまつた。

そこから反撃に出るべく、瞬時に頭部にあるトサカ状の刃——

頭部光刃に蒼い光熱を纏わせ、一気に投げつけたのだが……それもメイセルドの剣閃により、弾かれてしまう。

難なく着地したメイセルドの肩を借り、なんとか立ち上がったユアルクは再び光刃剣を構え——体勢を立て直した太団も光刃剣を振るいながら、跳ね返された頭部光刃をキャッチする。

「シユテルオンッ！」

「……シユテルオン！」

間髪入れず、太団は愛機を呼び出し——メイセルドもそれに対抗し、エメラルドのジェット機を飛来させる。2人は各自の乗機に乗り込むと、弾かれたように森の上へと急上昇した。

「変形！ 歩兵形態ッ！」

矢継ぎ早に、太団は自機をジェット機から人型に変形させる。眩く発光する蒼い両眼が、メイセルド機を捉えた。

『——覚えておくのだな。性能だけで埋められるほど、私とお前の経験差は浅くないと！』

だが、自在な角度から放てる光線砲の掃射を——エメラルドのジェット機は、難なくかわしていく。僅かな隙間を縫うように飛び、反撃の一閃がハイデリオン機の肩を掠めたのは、その後だつた。

「あぐッ！」

『その最新型を使いこなせぬうちは、私を潰すことなどできんぞ！』

「ならッ——今から使いこなします！」

手痛い反撃を浴びたハイデリオン機の傍らを、メイセルド機が通り過ぎる——瞬間。太団は急加速を掛け、一気にエメラルドのジェット機へ肉薄した。

「ぐつ——があはッ！」

「なつ!? あいつ、なんて無茶を！」

その捨て身の行動に、地上から戦局を見ていたユアルクが声を上げる。

刹那、凄まじい圧力がコクピット内に掛かり、少年は仮面の中で鮮血を吐き出した。対Gスースを兼ねてているコスモアーマーがなれば、間違いなく即死している加速だ。

そして、血と痛みを代償に得た速さを以て——光線砲を捨てたヘイデリオン機の右腕が、メイセルド機の翼を掴む。

『ぬツ……！』

「捕まえましたよ、教官ツ！」

『……やつてくれるな、タロウツ！』

だが、ヘイデリオン機の左腕が鉄拳を振り下ろすよりも速く。片翼を掴まれたことでバランスが乱れたことを利用し、メイセルドは錐揉み飛行を始めた。

ヘイデリオン機の重量を活かして回転数を上げ、彼を振り落としためだ。

『ぬう、ぐツ……おおおおツ！』

「だ、ああ……ああああツ！」

だが、太団は懸命に食い下がる。メイセルド機にしがみつく彼を引き剥がそうと、老兵は更に回転を加速させるが——彼は、落ちない。

やがて、ヘイデリオン機の重量に引き摺り下ろされるように。メイセルド機の高度が、徐々に下がっていく。——森に衝突する、直前であつた。

『うーツ……おおおツ！』

「が、ああああツ！」

そして、森を彩る木々を、抉るように——ヘイデリオン機が、大木に激突した。

衝撃で引き剥がされた赤い巨兵は、大木もろとも無数の木々をなぎ倒しながら、地表を滑つていく。機体を構成するパーツを、方々に撒き散らしながら。

「……よく、やつてくれたな」

一方、衝突の影響で片翼をもがれたメイセルド機も、姿勢制御を失い限界を迎えていた。乗機の「死」を悟った老兵は、相棒に別れを告げ——颯爽と飛び降りる。

「隊長ツ！」

そして。遙か上空から、エメラルドの外骨格を纏うメイセルドが現れ——ユアルクの前に着地した瞬間。彼が乗っていたジエット機は

遙か彼方に墜落し、爆散してしまった。

「……」

——やがて。彼と同様に乗機を破壊された太団も、メイセルドとユアルクの前に駆けつけてくる。鬼気迫る表情を紅い仮面に隠し、蒼く煌めく光刃剣を構えながら。

「……どうやらまだ、終われぬようだな」

「ええ……終われません」

紅き闘士、ハイデリオン。蒼海將軍、ユアルク。翡翠の老兵、メイセルド。

互いに一步も譲らぬ、彼ら師弟の戦いは——さらに苛烈になろうとしていた。

◇

剣と剣が交わる衝突音。光弾が飛び交う銃撃音。翼で風を切る音と、木々をなぎ倒す轟音。そして、体の芯にまで及ぶほどの地鳴り。その戦いの余波は、遠く離れているはずの「家」にまで響き渡つていた。

太団達の戦いの激しさを肌で感じ、コロルとケイは震えながらシンシアに寄り添つてゐる。そんな子供達の肩を抱く少女も、悲痛な表情で太団の帰りを待ち続けていた。

——否。もう、彼女には分かつてゐたのだ。帰りを待つ意味など、ないのだと。

(……例えあの人達を追い払えたとしても……ここを見つけられてしまつたら、私達は……もう……)

太団もシンシアも、すでに星雲特警——ひいては星雲連邦警察に発見されてしまつてゐる身である。

仮に太団がユアルクとメイセルドを倒せたとしても、必ず他の星雲特警がここに駆けつけて来るだろう。そうなればやがて、数多の戦士達がこの星に押し寄せて来ることになる。シンシアの首を取るために。

それでも太団は、シンシアを守るために徹底抗戦に踏み切るだろう。恐らくは、コロルやケイも。彼らと1年間、共に暮らしてきたこ

とで……それは痛いほどに理解していた。

——だからこそ、見えてしまうのだ。この先の未来にはもう、破滅しかないのだと。

例えシルディアス星人の「帝王」を倒した勇者であろうと、太団は所詮1人。星雲連邦警察を相手にして、自分達を守りながら戦い抜けるはずがない。

必ずいつか、力尽きてしまう。滅ぶべき血族を守るために。あんなにも優しく、愛おしい青年が。

——自分が滅ぶことよりも。今となつてはそれこそが、シンシアにとつては堪え難い結末となつていた。

だが、自分が生贊になると訴えたところで、太団がそんな選択を受け入れるはずもない。彼は何が何でも、自分を守るために骨の一本になるまで戦う道を選んでしまう。そんな男だからこそ、1年前にあんな行動に出たのだ。

このままでは自分はもちろん、太団も子供達も助からない。だが、自分を差し出そうとしても彼は、それを阻んでしまうだろう。

誰も助からず、最後は1人残らず絶え果ててしまう。その結末は、自分達が見つかってしまった昨日の時点で、確定していたのだ。

太団も恐らくは、すでにそのことを察している。その上で自分達を

気遣い、敢えて強気に振舞っていたのだ。

——メイセルドとユアルク。その強さも恐ろしさも、深く知つているというのに。

だが、そうやつて取り繕うことさえも、今となつては難しい。初めから破滅が決まっていた幸せを、1年も続けていられたのは、最早奇跡と言つていい。

(……でも、それでも……私、は……)

——だが。全てが先延ばしの繰り返しから生まれた、欺瞞と知りながら。

シンシアはそれでも、僅か一欠片でも希望を紡ぐために……ある決断を下そうとしていた。

それは人として生きることを求められた自分には、絶対に許されない。

い悪業。積み上げてきた幸せを全て、水泡に帰す所業。

それでも、もう彼女には。これしか、残されていなかつたのである。

——太団だけが助かり、その後には何も残らない。そんな、彼が何としても避けようとしていた未来を、実現するしか。

「……コロル、ケイ」

「え？」

「なあに？」

突如、落ち着き払つた声色に変わつた。そんなシンシアの変化を不思議に思い、コロルとケイは思わず顔を上げる。

——その時すでに、彼女の貌は。子供達が今まで見たことのない、形相となつていた。

「この戦いが終わつたら……みんなで一緒に、流れて行こうね。誰かに嫌われたり、追われたりしない……幸せな世界に」

優しげなその咳きに反して。シンシアの眼は、「理性」を欠いた狂気には包まれていた。まるで、太団が戦つてきたシルデイアス星人の凶戦士のように。

そして。

彼ら4人の幸せが詰まつた家に、血飛沫が降り掛かる。

第8話 少女達の昇天

斬撃と銃撃が絶えず交錯する、森林の戦場。その渦中で凌ぎを削る3人が、同時に手を止めた時——彼らは、仮面の下で驚愕の表情を浮かべていた。

太団達が視線を向けた先では——ただならぬ勢いで、黒煙が噴き上がっていたのである。さらにその近辺には、激しい火の手まで上がっていた。

「なんだ、あれは……！　まさか、別働隊……!?」

「バカな……！　我々以外、ここを嗅ぎつけた者はいないはずだ！」

「シンシア……!?　シンシアッ！」

そして、その火災は——シンシア達がいた、家の方角から上がっている。

それを目の当たりにした瞬間、太団は弾かれたように走り出して行つた。メタリックレッドの装甲は既に傷だらけだが、彼は痛みさえも無視して全力で疾走する。

「待てタロウ！　——ぐツ！」

「隊長ッ！」

そんな彼を追うべく、メイセルドも動き出そうとする……のだが、彼の方がダメージは深刻であつた。膝から崩れ落ちる師の肩を、ユアルクが咄嗟に支える。

「……タロウ……」

メタリックブルーの騎士は、去りゆく教え子の背中を、神妙な面持ちで見送つていた。

——自分達以外に、ここを見つけた星雲特警はいない。もし、あの火災が星雲連邦警察とは無関係なものとすれば……。

そこまで思考を巡らせたところで、ユアルクは見ていられないとばかりに、目を伏せてしまつた。間違いなく、太団にとつて最悪の結末が待ち受けているからだ。

——だが、全ての原因は自分の不始末にある。ならば、目を背けるわけにはいかない。蒼海将軍はその一心で、メイセルドの肩を支えな

がら、ゆっくりと歩み出していく。

戦いの終焉を告げる、あの火の手の向こうへと。



灼熱の猛火が天を衝き、樹木も芝生も焼き尽くしている。この森に渦巻く破壊の炎は、全ての命を刈り取ろうとしていた。

——その渦中に踏み込んだ太団の前に、人影が映る。否、それはもう太団が彼女に望んだ「ヒト」ではなくなっていた。

「……シンシア……」

装星を解き、人の姿で舞い戻った太団を出迎えたのは、辺り一面に転がる肉塊だった。先ほどまで、コロルとケイという「命」だった、肉塊。

首だけが残された彼らを掴む、少女の眼はすでに理性をかなぐり捨てた凶戦士の色へと成り果てていた。今まで少年が切り捨ててきた、シルディアス星人の色へと。

その景色が、今まで抗い続けてきた現実を突きつけているかのようであつた。シンシアはあくまで、破壊と殺戮を好むシルディアス星人の血族なのだと。

——だが、シンシアはシルディアス星人としては理性の割合が強く、これまで本能を抑制して生きてきた。1年間共に暮らしても、彼女が本能を暴発させたことなど一度もない。

シンシアなら、自分の中にある狂氣を完全に制御出来たはずなのだ。なら、このような事態など起きるはずもない。

彼女自身が、自ら理性を捨てない限りは。

「……！」

凶戦士を彷彿させる狂笑と、凶眼。その貌に紛れて頬を伝う雫が、太団にそれを教えていた。これが彼女の、決断なのだと。

——現世の外にしか、流れる先はないのだと。

だが、そんなことを太団が許すはずはない。シンシア自身もそれを理解していた。だから自らの手で子供達を骸に変え、森に火を放つたのである。

——自分は死すべき悪であると訴え、全ての退路を断ち切るため

に。

(タロウ。あなたなら、きっと分かるよね。平和を守る星雲特警なら、みんなのために、何をしてあげられるか。私は、ずっとそれを信じてる)

そして、こうなった以上、もはや後には引けない。すでにシンシアは、コロルとケイを手にかけてしまった。

血と闘争を好む悪鬼になってしまった。太団が何よりも否定したかつた未来に、繋がつてしまつた。

——彼女を放つておけば、必ず犠牲者は増え続けていく。もう彼女は、無害な少女ではない。

その現実を受け止めた上で、太団は悲痛に歪んだ貌のまま——声にならない彼女の叫びを、確かに感じていた。

「……うん、分かるよシンシア。何をしたらいいか、オレには分かる」ならば、応えねばならない。それが彼女の望んだ世界ならば、それをしていけるのは、自分だけだ。

——彼女を幸せに見送れるのは、自分だけだ。

「ごめん、少しだけ先で待つて。コロルも、ケイも、君も……みんな一緒に。必ず、迎えにいくから」

泣きながらでも構わない。叫びながらでも、構わない。それでも、自分に託された最後の役目は、果たさねばならない。

——星雲特警として。そして、彼女達の家族として。

その想いに突き動かされるまま、太団は走り出す。「装星」と叫んだ彼の声は、嗚咽と慟哭が混じり合い——もはや、言語の体を成していなかつた。

真紅の鎧を纏う彼は、蒼く輝く剣を振りかざし、彼女に向かつて飛び上がっていく。

——そんな彼を、前にして。

狂気に沈んだはずの少女は、子供達の骸を抱き寄せながら——片手を広げ、微笑を浮かべていた。

愛する人を、受け止めるように。

そして。

淡い桃色の花飾りが、空の向こうへと舞い上がる。

第9話　さらば涙、ようこそ笑顔

黒ずんだ焼け跡だけが残された、かつての森。そこへ辿り着いたユアルク達の前には、中心に立ち尽くす教え子の姿があつた。

周囲一帯を爆破すれば、火の元から消し飛ばせる。以前に自分達が教えた通りに、火災を止めていた少年は——師に背を向けたまま、空を仰いでいた。

炎を浴び、炭のように変わり果てた花飾りを、その掌に乗せて。少年が見上げているのは、今までと何ら変わらない、空。その景色が、この結末さえ時の流れの一つに過ぎないという事実を、突きつけているかのようだつた。

そんな彼の近くに歩み寄り、ユアルクとメイセルドは——黒焦げた骸を見つける。数は、3人。

そこから全てを察した蒼海将軍は、何一つ語らない太団に、静かに語り掛ける。

「……今からでも脱走をなかつたことにすれば、最後のシルディアース星人を探し出し撃滅した英雄として、お前は不動の名誉を手にできる。私達の傷も、彼女に付けられたものと言えば周りも納得するだろう」
「……」
「だが、分かつていて。お前は、そんなものは最初から望んでいない。あの日からずっとお前は、人々を……希望を、笑顔を守るためだけに戦ってきた。これが、お前の幸せには程遠い幕切れであることは、私達でも分かる」

太団は黙したまま、背中で師の言葉を浴び続ける。弟子の物憂げな声色から、その心中を察したメイセルドは——ゆっくりと、腰のホルスターに手を伸ばした。

「……彼女達の元に逝くことがお前の願いであるなら、師として我々が天に導こう。それが、お前の人生を散々かき乱してきた我々が果たすべき、最大の責務だ」

やがて、太団は静かに振り返り——自分に向けられた銃口と相対す

る。筆舌に尽くしがたいほどの「酷い貌」を前に、メイセルドは仮面の下で沈痛な表情を浮かべていた。

絞り出すような声が漏れてきたのは、その直後だった。

「……まだですよ。今逝くには、土産話が足りなさすぎる」

「……そうか。星雲特警に復帰は……いや、愚問だつたな」

「いつか、あの子達と笑い合える日が来るまで。彼らを笑顔にできる思い出を、一つでも多く。それが、太団が選んだ償いだつた。

——すぐ後に後を追つたところで、シンシアが哀しむのは、目に見えている。こんな末路を辿つてまで、彼女が先に逝つた意味がない。

そんな彼の答えを聞いたメイセルドは、胸を撫で下ろすように銃口を下ろし、ユアルクと視線を交わす。その意図を察した金髪の青年は、穏やかな動作で太団に手を差し出した。

「今まで、よくやつてくれた。よく頑張つてくれた。色々なことはあつたが……それでも私達は、お前に感謝している。……ありがとうございます、本当に」

「……はい」

その手を一瞥した太団は、メタリックレッドの片胸当てを外し……かつての師に、返上する。教え子から星雲特警の証を預かつた蒼海将軍は、その重さを噛み締めるように、青い胸に片胸当てを抱いていた。

「——さあ、帰ろう。お前がいるべき星へ。お前が、歩るべき道へ」

そんな彼の、目の前で。花飾りだつた消し炭が、砂細工のように崩れ落ちて行く。



本来、太団は戦いには向かない性格である。そうと知りながら星雲特警として戦わせてきたのは、シルディアス星人に対抗できる戦士を1人でも多く揃えるためであつた。

そのシルディアス星人が1人残らず滅亡した今、もう太団がヘイデリオンとして戦う理由はない。何より、これまでに負つた傷が、余りにも深過ぎる。

——そうした背景を鑑みた、メイセルドの判断に基づき。太団はコスマオーマーとシユテルオン、そして「ヘイデリオン」のコードネー

ムを、星雲連邦警察に返上。

彼は名実共に、一介の地球人でしかない 火鷹太団に戻ることがで
きた。公的には戦死とされ、伝説となつた「星雲特警ヘイデリオン」の
英雄譚は、本人とは無縁の宇宙で語り継がれていくことになる。

その後、太団はユアルクに連れられ地球へと帰還。彼と繋がりのあ
る地球守備軍出身の政府高官に、身柄を託されることになった。

シルディアス星人が滅びた今、地球が異星人の侵略を受ける可能性
はないに等しい。彼らの犠牲を経て、ようやく太団は故郷の星へ帰る
ことを許されたのである。

だが——5年ぶりに地球へと帰ってきた今になつても。少年の心
は、晴れないままであつた。



「ユアルク殿には、35年前にも世話になつててなあ。地球守備軍が
創設される前から、この星を守つてくれていた大恩人なんだ。その彼
が、まさか5年前の災厄の生き残りを連れて来るのはなあ。5年間も
宇宙人と暮らしてきた地球人なんて、前代未聞だぜ。コスマビートル
のパイロットだつた、君のお父さん…… 火鷹少尉も生命力に満ち溢
れた男だつたが、君はそれ以上だな」

「……」

「しつかしあの人、昔から見た目が全然変わつとらんなあ。俺なんて
もう、白髪がこんなに増えちまつて大変だぜ。宇宙人はほとんど歳も
取らねえんだから、得だよなあ？」

「……」

——20XX年、東京。

5年前に起きたシルディアス星人の襲撃も、この時勢においては過
去のものとなつていた。人々は地図から消え去つた町の名前すら忘
れ、平和な日々を謳歌している。

一方で、幾度となくこの星を救つた「ユアルクやメイセルド星雲特警」の存在は広く認
知されており、彼らを神の使徒と祀り上げる宗教まで台頭していた。

東京スカイツリーの景観から、そんな地球の日常を見下ろす太団の
隣で——地球守備軍の制服に袖を通す、初老の男が豪快に笑つてい

る。

しなやかでありつつも筋肉質な体格に、強面な顔つき。白髪が混じつた、黒のパンチパーマ。どれを取つても、政府の官僚とは思えない容貌である。現場の鬼軍曹、と言わされた方がよほどしつくり来る外見だ。

(父さん……)

彼から、殉職した父の遺品である赤いスカーフを受け取った太団は——その形見を、静かに見下ろしていた。

「なんだなんだ、黙りこくつちまつて。……ああ、この先の暮らしが心配なのか。なあに心配はいらん、マスコミには君のことを報道しないよう、すでに手を回してある。極力、君が世間から変な目で見られることのないようにしろって、ユアルク殿からもクギを刺されることだしな」

「……オレは結局、何もできなかつた」

「あん?」

「自分に出来ることを、力の限り尽くしても……結局、何一つ守れなかつた。オレに、もっと力があれば、こんなことには……」

「……」

高官は高らかに笑いながら、隣に立つ太団を励まそうとしている。が、過去の罪から抜け出せずにいる少年は、窓ガラスに手を当てたまま沈痛な面持ちとなっていた。

黒のレザージャケット。赤いレザーグローブ。赤いレザーパンツ。高官が用意した、それらの私服に袖を通し、名実共に「ただの地球人」に生まれ変わった今でも——その貌は、消せない罪に囚われている。しばらくその様子を眺めていた高官は——何を思ったのか、いきなり太団の両頬をつねり始める。

「……っ!? いひやい、いひやい! なにひゆるんでひゆか!?」

「いかんなあ! いつまでも若いモンが、そうやつてメソメソしてちやあ!」

その不意打ちに涙目になりながら、抗議する少年。そんな彼の眼を真つ直ぐ見つめながら、高官は声を張り上げる。

周囲に立っている黒尽くめのガードマン達は、「また始まつた」とため息をついていた。

「俺はな、はつきり言つて君の苦しみを全く知らん！ ユアルク殿からは、5年間宇宙で辛い思いをしてきた……としか知らされておらんからな！ だが、そんな俺でも分かることはある！」

——太団の素質を軍事利用させないため、ユアルクは彼が「地球人でただ1人の星雲特警」だつた事実を伏せていた。

それでもおおよその経緯を察していた高官は、少年が歩んできた道の辛さを慮りながらも、喝を入れ続ける。

「君に足りんのはな、力なんぞではない！ ——笑顔だ！ せつかく帰ってきたというのに、そんなに辛氣臭い顔ばかりしてるから……目の前に転がってきた幸せも、みんな逃げちまう！」

「……え、がお……？」

「そうだ！ だから君は、笑顔にならにやいかん！ 子供の顔が暗く沈んでいるのは、その子が不幸だからだ！ だから君は、幸せにならにやあいかん！ その君が、希望を自分から投げちまうのは、至極勿体ねえ話だ！」

やがて、太団の頬から手を離した高官は、再び豪快に笑うと——力強い掌で、少年の肩を掴んだ。

その勢いに、圧倒されながらも。同じ地球人として「幸せになれ」と訴える彼の言葉に、太団の心は徐々に吸い寄せられていた。

親も師もいなくなつた彼にとつて、この高官らしからぬ男の存在は、最後の希望なのかも知れない。

「君は今まで、笑えねえ目に遭つてきたかも知れん。もしかしたら、この先もそうかも知れん。だつたら平和な今だけでも笑つておかんと、辛氣臭いだけ損じやろが！ ——『さらば涙、ようこそ笑顔』、だ！」

「……！」

過去との決別。光ある未来。それは、太団にとつては生涯つきまと難題であった。だが、だからこそ向き合わねばならないのかも知れない。

前を向いて、生き抜いた上で。いつか、シンシアと逢うために。

(……笑顔、か)

最期の瞬間に彼女が見せた、あの笑顔。心からの幸せを感じさせる、あの微笑。それを思い起こした太団は、天を仰ぎ——涙を堪えていた。

笑顔を取り戻すのも、涙と別れるのも。今はまだ、難し過ぎる。だが、それでもいつかは。

——そう思う心は、すでに彼の中に芽生えていたのだつた。

最終話　いつの日か、きつと

——それから、約1ヶ月。

5年前に起きた「シルディアス星人の災厄」を生き延びた、火薙太団は。ごく普通の高校生として、朝の通学路を歩んでいた。

緑色のブレザーに袖を通す、颯爽とした黒髪の少年は、商店街を行き交う主婦や学生、サラリーマンの日常を眺めながら——人混みの中を進み続ける。

そんな彼が通りがかつた街頭テレビでは、コメントーター達による討論が繰り広げられていた。

『地球守備軍が大敗を喫した、シルディアス星人の厄災から今年で5年。軍備は当時の数倍になつてているのですが、予算の無駄ではないかという声も上がっております』

『守備軍が創設されていなかつた35年前も、5年前の災厄の時も。光楯コウジュン以外の兵達は勝負にならなかつたという話ですからねえ。地球の防衛は「英雄」に任せて、我々は経済回復と環境保全を優先すべき……』という意見も少なくありますな』

『確かに星雲特警は、我らのヒーローでしょう。ですが、彼らはあくまで異星人。必ず我々を救つてくれる確証もない現状で、彼らに依存するのには危険……』という見解もありますな』

『ならば、光楯以外の戦力を底上げするのが先。……なのですが、そんな機会は、もうない方がいいのでしょうか』

——テレビの向こうで交わされる、そんなやり取りを一瞥しながら。商店街を抜けて住宅街に出た太団は、青空を仰いでいた。

全てを失う前……幼かつた頃と変わらない、平和な景色。それは激戦と悲劇が絶えなかつた宇宙での日々とは、まるで異なる別次元の世界だつた。

それでも、たつた1ヶ月である程度適応出来てるのは、やはりここが故郷だからだろう。例え何年離れようとも、太団は間違いくこの星で生まれ育つた地球人なのだから。

(……他の星でも、今はこうなんだろうか。……そうだといいな)

シルディアス星人が滅びたことで、全宇宙の治安は安定しつつあるのだという。

彼らの犠牲を払つて得てしまつた、この平和が……せめて、より多くの人々の幸せに繋がるようにと、少年は人知れず祈り続けていた。

——そんな彼が、横断歩道を視界に捉えた瞬間。

(……！)

ランドセルを背負つた、小学生の少年。彼が横断歩道に入つたと同時に——信号無視のトラックが、迫ろうとしていた。

刹那。

その現場に通りがかつた人々が、声を上げるよりも速く。少年を見つけた運転手が、急ブレーキを掛けるよりも速く。

……少年が、目の前の事態を飲み込むよりも速く。

かつて、最強の星雲特警だつた男は——弾かれるようにアスファルトを駆け抜け、少年の体を攫つていた。

地球人の限界値まで鍛え抜かれた彼の躰は、少年を抱えながら軽やかに飛び上がり——横断歩道の向こう側へ、颯爽と着地する。

並外れた膂力が成せる芸当を目の当たりにして、助けられた少年はもちろん、周囲の人々も唖然となつていた。その英雄的行動に拍手が送られたのは、それから何秒も過ぎた後のことである。

「ど、ともくん、ともくんっ！」

「あつ……お姉ちゃんっ！」

やがて、トラックから降りてきて頭を下げていた運転手を押し退けて——太団と同じブレザーを着た少女が、少年を涙ながらに抱き締めた。どうやら、少年の姉であるらしい。

家族と触れ合つたことで緊張の糸がほぐれたのか、少年も釣られるよう泣き出してしまう。そんな姉弟を微笑ましく一瞥し、太団は立ち去ろうとする……のだが。

「あつ……ありがとうございます、ありがとうございます！ ともくん……弟を助けてくれて！ なんてお礼を言つたらいいか……！」

「はは、礼なんて別にいいですよ。その子が無事で、本当によかつ——!?」

顔を上げた姉に呼び止められ、振り向いた瞬間——言葉を失つてしまつた。

シンシアがいたからだ。

……否、シンシアではない。それは、太団自身も頭で理解はしていた。

が、余りにも瓜二つだつたのだ。くりつとした優しげな瞳も、穏やかな顔立ちも、ショートボブの黒髪も。さらには、声まで。肌と眼の色を除けば、シンシアそのものと言つてもいい。それほどに似通つた少女が、自分を真つ直ぐな眼差しで見つめていた。そんな眼も、ますます彼女を想起させる。

「……っ」

「えつ……あ、あの、どうかされたんですか？　もしかして、どこかお怪我を……!?」

思わず視線を外し、俯いてしまう。悲痛に歪んだ顔を、隠すために。だが、小柄な彼女は下から見上げたことで、その表情に気がついてしまつた。胸に両手を当て、心配する彼女の優しさが——今の太団には、ただただ痛い。

「……大丈夫、オレなら大丈夫ですよ」

「えつ……？」

「今は無理かもだけど……きつといつかは、大丈夫。大丈夫だから」やがて、痛みを噛み締めるように顔を上げた太団は、精一杯の「笑顔」で、シンシアに似た少女を気遣う。

その口から出た言葉の意図を見出せず、小首を傾げる少女。そんな彼女の表情を、微笑を浮かべて一瞥した後——太団は、踵を返して走り出した。

路傍に咲き誇る、一輪の蓮を通り過ぎるように。

「……それじゃあ、オレもう行きますね！」

「えつ……!?　あ、あの、待つてくださつ——！」

再び呼び止めようとする少女に構わず、太団は通学路をひた走る。瞼を腫らす感情の波を、振り切るように。

(さらば涙、ようこそ笑顔——か)

その表情は悲しげなようで、優しくもあり……それでも確かに、笑っていた。

（シンシア。オレはいつか、きっと——）

彼の笑顔から、悲哀の色が抜け落ちる時。それは、果てしなく遠い未来なのだろう。

それでもいつか、その時が来れば。彼はようやく心からの笑顔で、あの少女と逢うことができるのだ。

誰かに嫌われたり、追われたりしない——幸せな世界で。

番外編　星雲特警メイセルド

——今から約200年前、遠き星雲の果て。

砂漠の惑星「レトウロイン」に巢食うシルデイアス星人を駆逐すべく、幾人もの星雲特警が降下していた。

光線銃と光刃剣を振るい、塵が吹き抜ける砂礫の戦場を駆け抜ける彼らは——自らの任務を果たすことだけに注力し、武力を行使する。戦闘の余波で生じる、多少の犠牲には目もくれず。

「……っ」

「ボサツとするな、まだG—17区域では残党共が抵抗を続いている！追撃に向かうぞ！」

「……は、はい……」

自分達の戦闘に巻き込まれ、死屍累々と横たわる無数の骸。この星の住民である彼らは、わけもわからぬままシルデイアス星人の牙にかかり——自分達の流れ弾を浴びた。

その事実に胸を痛める暇すらなく、戦場は移ろいゆく。この戦いで初陣を飾った、若き星雲特警メイセルドは、辺り一面に転がる「命」だつた肉塊を……弔う時間すら得られなかつた。

後ろ髪を引かれる思いを抱えながら、褐色の青年は悲痛な貌を翡翠ショコラルオニの仮面に隠して、先輩に続くようにな……エメラルドに輝く愛機に乗り込んでいく。

機体下部から噴き上がるジェットが、砂埃を舞い上げ視界を遮る。砂塵が届かぬほどの高さまで垂直に上昇し、ようやく視界が開けたところで——メイセルドの眼に、あるものが留まつた。

「……先輩、あれは！」

「ん？——ああお前、『機竜』を見るのは初めてか

紅い瞳。たなびく白髪。生命としての自然から逸脱した、機械仕掛けの体を持つ鋼鉄の飛竜。

それを初めて眼にしたメイセルドは、仮面の下で息を飲む。話に聞くのと、実際に目にするのとでは、全く次元が違うのだ。

——最下級人類を培養・機械化し、融機生命体の兵器として運用す

る「機竜」。とある惑星の「タワー」で製造されていたその「機竜」を、星雲連邦警察が対シリデイアス星人の兵器として、買収し始めたと聞いたことがある。

まだ実戦投入して間もない状況ではあるが、低コストであることから、星雲連邦警察の上層部ではウケがいいとの噂もあった。安く、戦力にもなり、犠牲になるのは取るに足らない者ばかり。そんな彼らを、宇宙の平和を預かる者達は嗤つて足蹴にしている。

眼前に広がる戦場という現実から、それを実感していたメイセルドは、操縦桿を握る手を震わせていた。——あの噂は、尾ひれなんて付いていなかつたのだと。

自分達が移動しようとする中、機竜はこちらを見上げたままじつと動かすにいる。よく見れば、翼が片方損壊しているようだ。

「先輩、あの機竜……負傷しています！ 助けないと……！」

「はあ？ バカ言うなよメイセルド。知らないなら教えといてやるが、機竜の連中は修理するより新造する方が遙かに『安い』んだ。それに、あいつらの生死は業者が決める事であつて、俺ら星雲特警が関与するような話じやない」

「そ、そんな……！」

「どうせ機竜にされてる人間なんて、他に使い道のない最下級人類だ。それにあいつらには自我もない。自分が生きてるか死んでるかも分からぬ、機械と何も変わらない連中に……俺らがいちいち構う理由があると思うか？」

「……」

「……無駄口は終わりだ。今は、同じ星雲特警の仲間を助けることに集中しろ」

救うに値しない「命」。機竜にあるものはそれだけであると、言い切られて。経験の乏しいメイセルドは、それを否定する言葉を持てないまま——静かに自分を見つめる紅い瞳に背を向け、シユテルオンを走らせていく。

それから、間もなく。空を翔ける戦闘機の中で、彼は次の戦場を眼にした。

爆炎に巻き込まれ、吹き飛ぶ四肢。阿鼻叫喚に包まれた、砂漠。その渦中を空中から見下ろし、メイセルドは冷や汗を伝わせる。

どうやら砂漠の中にあつた、オアシスの街だつたようだが……建物は殆ど跡形もなく吹き飛ばされており、そこら中に骸が散乱していた。五体満足の遺体など、どこを探しても見つかる気配がない。

斃れているのはシルディニアス星人だけではなく——コスモマーーを纏う同胞や、この星の民間人もいる。

だが、最も多く戦場に散らばっていたのは、その誰でもなく……「命」にすら値しないと言われた、機竜達であつた。よく戦局を見てみれば、負傷して翔べなくなつた機竜を盾にした星雲特警達が、光線銃で応戦している光景が頻繁に眼につく。

体格が大きいことから、シルディニアス星人に狙われやすく。「修理より新造する方が安い」という情報が浸透しているため、一度傷つけば容赦無く盾にされ。自我を持たないが故に、自分の最期を知ることもない。

この世界の理不尽さを集約したような、景色だつた。上空からそれを見つめていたメイセルドは、唇を噛み締め両手を震わせる。

——自分達は本当に、この宇宙を守る正義の使者なのか、と。

「……!?

そんな時だつた。主戦場となつていた廃墟の街から、僅かに離れたオアシスの近くで——シルディニアス星人に囲まれている機竜を見つけた。

仲間達とはぐれたのか。始めはそう思つていたメイセルドだが、気づけば彼は、その機竜に注意を注いでいた。

——どこか、違うのだ。他の機竜とは、何がが。

「よし、G—17区域に到達した。メイセルド、降下の用意を——」「すみません先輩、負傷者を見つけましたので！」

「——ちよつ、おい!?

その直感が、若者を突き動かしていた。尤もらしい理由をつけて、先輩の言葉を遮りハッチを開いたメイセルドは、そのまま一気にシュテルオンから飛び降りてしまつた。

いきなり奇怪な行動に出た後輩に驚愕する、星雲特警の声には耳を貸さず——青年は、例の機竜を真っ直ぐに見据えて急降下していく。

コスモアーマーの耐衝撃性能に物を言わせ、翡翠の星雲特警が砂礫の街に着地したのは、その直後だつた。

激しい轟音と共に砂埃が舞い上がり、シルディアス星人達の眼光が向けられてくる。その殺気に怯むことなく、メイセルドは紫に輝く光刃剣を引き抜いた。

「そこの機竜、今だッ！」

「……！」

その刃に、シルディアス星人達が警戒する瞬間。注意が外れていた機竜は、メイセルドの言葉に顔を上げ——翼に備えられた鉄の爪を振るい、凶戦士達を一気に斬り伏せた。

それでも全滅させるには至らなかつたが……シルディアス星人達が機竜に襲い掛かるより速く、メイセルドの剣が彼らを切り裂いていく。

星雲特警と機竜。彼らのアイコンタクトによる連携攻撃で、このオアシスに集まつていたシルディアス星人は、瞬く間に一掃されてしまうのだつた。

——こんな芸当、自我のない機竜には絶対にできない。

「なあ、君は……」

「……」

「……」

そう思い至つたメイセルドは、こちらをじつと見つめる機竜に視線を合わせる。だが、鋭い牙を備えた彼の口から、言葉が発せられることはなかつた。

——自我を持つた特異な機竜ではないか。そんな自分の推測を捨てきれないでいたメイセルドは、何も語らない機竜を静かに見つめる。

やはり、違うのだ。意思を持たない機械の域を出なかつた、他の機竜とは……どこか。

だが、機竜の口から何かを語ることはなく。彼はやがてメイセルド

から視線を外し、背を向けてしまった。

(……戦うことしか知らない、自我のない機械。だから、次の獲物を探しに行こうとしているのか……)

その挙動から、やはり自分の思い違ひだつたのか——と、メイセルドは肩を落とす。もしかしたら、機竜を救うきっかけに繋がるかも知れないと思つていただけに、その落胆は軽いものではなかつた。

——が。

「……!?

機竜は、次の獲物を探しにいく……のではなく。オアシスの中に顔を突つ込み、水飛沫を上げて何かを引っ張り出して來た。

大口に咥えられていたそれは——樽。オアシスの中に沈められたいた、その樽をメイセルドの前に置いた機竜は、視線で訴えていた。これを開けろ、と。

「なつ……!」

それに促されるまま、樽の蓋を開けた先には——わあわあと泣き喚く、赤子の姿があつた。樽の中に閉じ込められた赤子を抱え上げ、メイセルドは機竜に視線を向ける。

(この機竜、赤子を樽に隠してオアシスに沈めていたんだ……！　シリデイアス星人から、この子を隠すために！　やはりこの機竜、他とは——!?)

そして、彼の中にあつた推測は確信に変わつた。……だが、機竜は用は済んだとばかりに踵を返すと、今度こそ次の獲物を求めて飛び去つてしまふ。

「あつ……！　ま、待つてくれ！　君は、やつぱり……！」

メイセルドは慌てて後を追おうとするが——泣き囁く赤子に気を取られ、足を止めてしまつた。彼を追うより今は、この赤子を保護せねばならない。そう、感じたからだ。

それに恐らくは……あの機竜も、それを望んでいる。メイセルドは飛び去る機竜の背を見送り、そう当たりをつけっていた。

(……いつかまた、どこかで……逢えるだろうか)

そして——消耗品のように扱われながらも、「命」を守るために戦つ

てくれた彼との再会を、密かに願う。

——だが。

次にメイセルドが、彼に会えたのは……「最悪の機竜暴走事故」の現場である、無数の墓標が広がる草原であつた。

事故の調査を依頼されていた彼は、その地で……天を仰ぐ「人」としての最期を、「命」の終わりを。その眼に、確かに刻んだのである。

◇

——グラム・ファーフニルは、世界でただ一人「意志」を持つ機竜であった。だが、その事実を知る者はいない。

本来自我を持たない「消耗品」でしかない機竜の中にそんな個体がいると知れば、何をされるか分からぬのだ。……そうなれば、周りと変わらない機竜のふりをして、彼女を守ることもできなくなる。将来を誓った幼馴染を、この不条理から守ることも。

彼女は——アリエッタは、グラムのような特異な存在ではなかつた。自分の意志を持たない、ただ戦うだけの機械に成り果てていた。それでもグラムは、彼女を命を賭して守ろうとしていたのである。例え自分が分からなくとも、もう昔のように語らうことができなくとも。それでも彼にとつて彼女は、アリエッタなのだ。

——そんな2人は機竜の兵隊として、この惑星レトウロインに派遣されていた。シルディアス星人と戦う星雲特警の、護衛役として。だが、彼らの前に待つっていたのは「護衛役」とは名ばかりの、消耗品扱いであった。傷一つでも付けば修理する価値はないと看做され、生きながら盾にされる。蜂の巣になり、盾にもならなくなればあつさり放棄され、シルディアス星人の玩具にされる。

グラム達を機竜に改造した「奴ら」は雑談の中で、星雲特警を「宇宙の平和を守るヒーロー」だと語つていた。そんな連中でさえ、機竜は「消耗品」であると見做していたのである。

その現実を目の当たりにして、グラムは胸中で唾を吐いた。何がヒーローだ、と。

そうして、星雲特警に不信を募らせながら戦う中で。グラムは不覚を取り、アリエッタとはぐれてしまつた。

——僅かでも傷付いた機竜は、修理するより新造する方が安価で早いという理由で、すぐさま「廃棄」されてしまう。しかも味方であるはずの星雲特警達は、自分達の体格を盾に利用してくる。他の機竜達は、そもそも意識すらない。彼女の味方など、自分以外にはどこにもいないのだ。

彼は焦燥を露わにして、アリエッタを探して飛び回る。——シルディアス星人に追われていた子供を見つけたのは、その最中だつた。幼い金髪の少年は、生まれて間もない赤子を抱え、血塗れになりながら逃げ惑っている。赤子の薄い金色の髪を見るに、恐らくは血を分けた弟なのだろう。

そんな懸命に弟を守ろうとしている彼を、シルディアス星人達はじわじわといたぶつていた。

——アリエッタを守るのは、意志を持つた機竜である自分しかいない。1分1秒の遅れが、彼女の生死を分ける。

それを理解していながら、グラムは弾かれるように翔び——シルディアス星人達に襲い掛かっていた。

「奴ら」によつて「牧場」にされた故郷に、どことなく似ているこの街で暮らしていたのであろう、この兄弟を……グラムはどうしても、放つては置けなかつたのである。だが、兄の方はすでに手遅れであつた。

程なくして力尽きた金髪の少年——「ヘイデリオン」の骸から、泣き喰る赤子を預かつたグラムは新手の接近を感じると、咄嗟に近場の樽に赤子を隠し、オアシスの下に沈めた。

ここまですれば、さすがにシルディアス星人も気づかないだろう。その可能性に賭けた彼は、自分を包囲してきた新手に、敢然と挑もうとしていた。

——遙か上空から急降下し、加勢に駆けつけた星雲特警との邂逅を果たしたのは、その直後である。エメラルドの外骨格を纏う彼は、自分で指示を送りながら紫色の光刃剣を振るい、瞬く間に新手を斬り捨ててしまつた。

そんな彼に、グラムは暫し啞然としていたのである。まさか星雲特

警の中に、機竜を守ろうとする変わり者がいたとは思わなかつたのだ。

そして、グラムは、そんな彼に赤子を託すことに決めたのだ。これほど情に厚い星雲特警なら、この子を守ってくれるかも知れないと。彼はオアシスから樽を引つ張り上げると、その中に隠していた赤子を星雲特警に預け、すぐさま飛び去つてしまつた。

——あの星雲特警は、自分に「意志」があることに勘づいていた。あまり近くにいると、自分のことを上に報告される恐れがある。それでもなくとも、今はアリエッタの安否が気掛かりなのだ。赤子を託した今、もう彼の近くに立つ理由もない。

そういうふた事情から、グラムは翡翠の星雲特警を一瞥しつつ——疾風のように姿を消した。

……のだが、心のどこかでは、名残惜しくもあつた。

自分達を単なる兵器とは見做さない。そんな奇特な星雲特警が、彼にとつてはどこか微笑ましかつたのである。

しかし。

彼ら2人が生きて再会することは、永遠になかつた。

最愛の幼馴染アリエッタを、この戦いによる傷で喪い。自分自身も廃棄されたグラムは——「最悪の機竜暴走事故」を引き起こし、「奴ら」と刺し違えるかのように機能を停止した。

その遺体を見上げる星雲特警メイセルドは、彼に託された赤子を抱き——僅か1日でも早く、シリデイアス星人との戦いを終わらせると誓う。

——そして。

グラムが救つた赤子は——かつて「牧場」にされていた彼の故郷の名を取り、「ユアルク」と名付けられたのだった。

その運命の子はやがて、「蒼海將軍」の異名を持つ星雲特警として——この宇宙を駆け巡ることとなる。

番外編 帝王は暁を仰ぐ

——今から約70年前、廃墟の群れと成り果てた旧東京の市街地。「魔王」と呼ばれる来訪者との戦争が幕を開け、800年もの年月が過ぎていた、この当時——かつての東京は死が蔓延る凄惨な戦場となっていた。

人類は彼らの猛威に抗するべく、人を人ならざる「第3の種族」と変異させる手段に踏み切り、現代の聖騎士「ゲオルギウス」を世に解き放つ。

「聖鎧」と呼ばれる甲冑を纏い、「破邪武装」と称される武具を振るう彼らは、人類に残された最後の希望として——侵略者を穿つ、鉾となっていた。

774年に渡る、被支配の時代。その悠久に等しい年月に終止符を打つべく、1人の男が廃墟の中を駆け抜ける。

3mもの巨躯。黄金色の縁取りが施された、紫色の装甲。額に刻まれた戦犬の文様。2m半ばの漆黒の戟。背部の長刀、そして飛行ユニット。

——その異様な容貌を持つ、鋼鉄の兵士こそ。「ゲオルギウス」の筆頭にして、人類の希望たる勇者——「暁」アカツキであった。

彼はヒトでありながらヒトを捨てた、改造人間の戦士達を率いて、この戦地を走り続けている。彼の同胞達は皆、この救世主を魔王の元へ行かせるために戦い——次々と散つて行く。1人、また1人、と。このままでは、敵軍を引きつけるための囮を買つて出た仲間達が全滅してしまう。何としても、その前に首魁の魔王を打倒し、仲間達を救いに戻らねばならない。

その焦燥に、突き動かされるかの如く。「暁」は背部のスラスターを噴射させ、さらに速度を増して行つた。

「……！」

——そして、魔王が待つ旧東京の中心を目前にして。彼は行く先に広がる光景を前に、足を止める。

死屍累々と地に転がる、悪魔の眷属。魔王の命に従い、人類を蹂躪

して来た死の尖兵達。彼らは「暁」が辿り着くよりも先に屍と成り果て、辺り一面に散乱していたのだ。

その景色を前に、鋼鉄の男は1人思案する。

——自分より先に、この地区に踏み込んで来た「ゲオルギウス」はないはず。彼らは皆、この敵陣に自分を進ませるために、遙か後方で陽動戦を続いているのだから。

——同士討ち？ あり得ない、彼らは長い歴史の中、互いを獲物にしたことなど一度もない。彼らの牙は全て、人類にのみ向けられていた。

やがて、「暁」の視界に巨大な悪魔の影が映り込む。1kmにも渡る巨体が、物言わぬ骸と化して、廃ビルに寄り掛かっていた。

——通常の魔族の体長は、最低でも約5m。大型のものになれば、ここで斃れている個体のように1kmを超えるものまでいる。だが、上位種の個体に近づけば近づくほど、再び体躯は小さくなっていく。そして「暁」の足元で眠る、骸の群れは——皆、5m程度の体躯であつた。ここが魔王の本拠地であることを鑑みると、彼らが最終防衛線を託された「近衛兵」達であつたことは容易に想像できる。

つまり。魔族の上位種の中でも、突出した精銳である「近衛兵」を全滅させるほどの「何か」^{「何か」ゲオルギウス自分達}が、この一帯に存在していた——ということだ。少なくとも自分達とは違う、「何か」が。

「……先ほどまでの奴らとは、違うな」

「——ツ！」

刹那。その疑問は、瞬く間に解消される。50mほど離れた先から響く、低くくぐもったような声が——「暁」に戦慄を齎し、臨戦態勢へと誘う。

魔族達の骸に紛れた黒い塊が、ゆらりと蠢いたのは、その後だつた。やがて「暁」はそのシリエットから、声の主が自分達と同じ「人型の怪物」であると悟る。

——紫紺の肌を覆い隠す、漆黒の重鎧。腰まで伸びる漆黒の長髪に、紅い凶眼を備えた黒の鉄仮面。プロテクターを内側から押し上げる、膨張した筋肉。2m半ばにも迫る、筋骨逞しい体躯。

魔族とも、自分達とも異なる「第4の種族」。それが彼に対する、「暁」の男の認識であつた。

離れていても感じていた、魔王の殺氣とも違う。自分達が皆等しく抱いていたような、燃え盛る闘志とも違う。こちら側の理解の外側から来た、得体の知れない異物。そうとしか思えないほどに、その者の存在は異質であり、歪であつた。

「魔王……ではないな、貴様。何者だ」

「……魔王、か。少なくとも、その名で呼ばれたことは一度もない。俺を『帝王』と呼ぶ者は多いがな」

「帝王……だと」

——帝王。そう名乗る異質な存在を前に、「暁」は仮面の下で眉を潜める。

相手が何者であろうと、今自分が倒すべきは魔王1人だ。それ以外に時間を取られている暇などないし、急がねば仲間達が危ない。

僅かな逡巡を経て、そう決断した「暁」の男は——バニニアを噴かせてこの場を通り抜けようとする。が、帝王の放つ殺氣の奔流が、それを阻んだ。

「……」この星の闘争が生む、死と殺戮の波動。それに引き寄せられて来てみれば、随分と面白いことが起きているではないか。こんな辺境の星に、お前らのような連中がいたとはな」「なに……？」

「我々にとつて戦いとは、生への充足。その本能に従い、俺は生きる。それがシルディアス星人として生を受けた、俺自身の在り方だ」

「さつきから何を訳のわからないことを……！」

「——俺の欲求からは逃れられん。俺が言っているのは、そういうことだ」

帝王の全身から迸る、悍ましいほどの殺氣と闘争心。何百年も熟成させたかのような、破壊欲の塊が——眼光となつて顯れ、「暁」の男を射抜いていた。

その紅い眼差しを浴び、「暁」の男は悟る。この異物は、避けては通れない——と。

——シルディアス星人は血と闘争を本能で要求する、戦闘民族だ。彼らは母星を拠点に全宇宙を転戦し、死に絶えるまで闘いを続ける。そんな彼らには、星の外から戦いの波動を感じする習性があつた。魔王と人類による永い戦争が、波動となつて宇宙に轟き……血に飢えた「帝王」を呼び寄せてしまつたのだ。

この当時、人類はまだシルディアス星人という侵略者の存在は知らない。だが「暁」の男はすでに、この帝王が魔王と同じ人類の脅威であることを悟っていた。上位種の近衛兵を単騎で一蹴する戦闘力など、尋常ではない。

彼は手にした戟を握り締め、一撃必殺の構えに入る。——後に魔王との決戦が控えていた以上、長期戦は避けねばならない。

「……貴様の欲求に付き合つてゐる暇はない。邪魔立てするなら、容赦はせん」

「案ずるな、時間は取らせん。お望み通り、一瞬で終わる」

その意を汲んだ上で、己の欲望を満たすため。帝王も腰に手を伸ばし、一振りの剣を引き抜いた。

——真紅に発光する光刃剣。それは、彼が今まで縊り殺してきた星雲特警から奪つた代物である。

闘争を望む暴力の化身。そう形容して差し支えない帝王の容貌に反して、その手に握られた赤い光刃剣は、鮮やかな輝きを放つていた。その光を目にした「暁」の男は、彼の剣が「自前」ではないことを察して、仮面の下で目を細める。これまで一体、どれほどの命を奪つてきたのか——と、敵愾心を露わにして。

「……行くぞ」

「……ああ」

魔王だろうと、帝王だろうと。人類に仇なす敵であるなら、排除する。自分達はそのために、人間としての己を捨てたのだから。

——「暁」の男は、その一心と突き出した戟に、己の魂を委ねる。命を力に変え、ただ真っ直ぐに刃を突き込むために。

それに応じるかの如く、帝王も赤い光刃剣を振り上げる。生への渴望。充足を得る為の戦い。その欲望を、満たすために。

戟が、光刃が。閃き、激突し。唸りを上げて、互いの血を望む。

——その結末は。互いが望んだ通り、一瞬のことであつた。



魔族の骸が散らばり、山となり、地に転がる死の大地。かつては東京と呼ばれていた、その地の中で——ただ1人の男が、得物を手に立ち尽くしていた。

その男は、鋼鉄の手に握り締めた戟を振るい——戦いの終わりを、言外に告げる。彼の足元では、異星の来訪者が倒れ伏していた。

「人間の意志」を燃料とし、「心の強さ」を以て刃を振るう「ゲオルギウス」の前には、本能のままに戦うだけのシルデイアス星人など敵ではない。

この結末が、その事実を雄弁に語っている。

「……殺す暇も惜しいか？　この俺を、倒しておいて」

「貴様の首の値打ちなど知らん。確かなのは、魔王を討たねば我々の戦いは終わらない……ということだけだ」

「そうか。……そう、か」

貴様など殺す価値もない。貴様などと遊んでいる暇はない。暗にそう告げられ、地に伏した帝王は乾いた笑いを漏らす。そんな彼を、どこか哀れむように見下ろした後——「暁」の男は踵を返し、バーニアを噴かし始めた。

「……行くのだろう。その前に、貴様の名を知りたい」

「貴様に名乗る名前などない」

敵対者であるには違いない。だが、この男がいなければ自分は、さらに大多数の魔族と戦わなければならなかつた。

その事実から、目を背けるように。「暁」の男は、魔王との決戦に向かうべく——帝王を残して飛び去つて行く。

「……ただ。この鎧は、『暁』と……そう呼ばれている。闇を切り裂く、太陽の輝きとして……な」

最後の置き土産に、相棒の名を告げて。

それだけを言い残した彼は、瞬く間に帝王の前から姿を消してしまつた。その影を見送る来訪者は、自分で初めて下した強者の名を、

その胸に刻み込む。

「……アカツキ、か」

——それから、間も無く。この星から姿を消した帝王は、戦いの結果を見届けることもなく母星へと帰還した。

圧倒的な力と霸氣を以て、自分を打ち倒したあの強者が——魔王と刺し違え、果てたことで。帝王を惹きつけた闘争の波動が、途絶えたのである。

それにより地球への関心を失つた帝王は、その星の名すらも忘れ去り——さらなる闘争を求めて、死と殺戮の海原へと漕ぎ出して行った。

そして「暁」の男が消えた以上、シルディイアス星人の存在を当時の人類が知ることはなく——人々がその力を思い知るのは、65年も先のことになるのであつた。



——人類の希望として、最期まで戦い抜いた「暁」の男。彼の死後、人類は「ゲオルギウス」を生み出した「W機関」の叡智を封印。シルディイアス星人さえ穿つ最強の科学力を、自ら葬つた。

それは……自分達の手で、自然を穢し地球を汚染してきた彼らが。最後にを見せた、良心だつたのかも知れない。

戦後、「ゲオルギウス」を欠いた人類は復興と並行して、新たな地球防衛組織を編成。聖騎士達が命を賭して紡いだ未来を、守り抜くための戦いに漕ぎ出していく。

その果てに待つ激動の時代を乗り越え、平和な世界を掴み取るために。——「暁」の男が愛した、この世界を守るために。



——今から約1年前。シルディイアス星の王宮前では、星雲特警とシリデイアス星人の最終決戦が始まっていた。

全身装甲の兵士達と、鋭利な爪を振るう魔獣達が、血で血を洗う死闘を繰り返す。その地獄絵図を玉座から見下ろし、帝王は過去を思い返していた。

69年前のあの日も、このような死地の中での戦いであつた——

と。

「……来たか、アカツキ」

そして、数百年に渡る歴史において。初めてこの「帝王の間」に踏み込んだ、侵入者を前にして——帝王は黒の仮面に笑みを隠し、赤い煌めきを放つ光刃剣を手にした。

——「暁」の鎧を纏う、ヒトを捨てたあの男。彼と同じ匂いを持つ、赤い鋼鉄の戦士を見据えて。本能に生きるシルディニアス星人の頂点は、光の剣を振りかざす。

「アカツキ？——違う」

だが。そんな帝王と相対する、長身の少年は——彼の言葉を否定する。

そして、蒼く輝く光刃剣を引き抜いて——長きに渡るシルディニアス星人との戦いに、幕を下ろそうとしていた。

「オレは……ハイデリオン。——星雲特警ハイデリオンだ」

番外編　星雲特警ユアルク

——今から約35年前、20XX年の東京。

辺境の惑星「地球」の一都市であるその地では当時、星雲特警と異星人による大規模な抗争が勃発していた。突出した科学力を持つ宇宙人同士の戦いに、地球の残存兵器はまるで通用せず——当時の地球防衛組織「人類統合軍」はただ、星雲特警の勝利を祈るより他なかつたのである。

しかも彼らは当時、地球上に現れた侵略知性体「レギオン」との、30年にも渡る戦争を終えたばかりであり——復興の間も無く始まつた激戦に、ついて行けなくなつていたのだ。魔王の死から僅か5年後に現れたレギオンとの死闘により、統合軍は戦う前から疲弊しきつていたのである。

「おお……見ろ！　奴らが、奴らが逃げて行くぞ！」

「勝つたんだ、俺達人類が……星雲特警が勝つたんだ！」

「万歳！　人類統合軍、万歳ッ！」

「星雲特警、万歳ッ！」

瓦礫と破片が散らばる廃墟と化した、東京のビル群。倒壊した東京タワーの残骸。その中で生き延びた地球の兵士達は、天高く飛び去つて行く円盤の群れを見上げ、歓声を上げていた。

「……ヒカリ、生きてるか」

『愚問。……あんな爆撃でどうにかなるほど、ボクは柔には造られていない』

「ああ……そう、だつたな」

『どうやら、本当にこれで終わつたらしいな。ホラ、さつさと帰つてきな。お楽しみの最上級名酒が待つてるぜ？』

『義父……妙に声が弾んでいる……』

『酒が楽しみなのはあんただけだろ、全く……』

その叫びを耳にして——亀裂と傷だらけの鎧を纏う重戦士は、ようやく戦いの終わりに気づき……深く息を吐く。凄惨な火傷を残した右眼が、澄み渡る青空を映していた。

疲れ果て、敗走を重ねる地球人達の中でただ1人——数多の異星人を蹴散らし、希望の光であり続けた男は。緊張の糸が切れたように、膝をつく。

長きに渡り、人類の希望を背負い続けてきた彼は……ようやくその羽を休めることを許されたのだつた。

——**鐵聖將**。セイセキ特殊合金「ヒヒイロノカネ」で身を固め、特殊エンジン「清石」を動力源とする大型強化外骨格。かつて「魔王」と刺し違え、人類に希望を灯した「ゲオルギウス」の再来を目指したその外骨格を以てしても、異星人の武力に抗することは叶わなかつた。

人類の希望を一身に背負いし伝説の英雄・「光楯」コウジュンを除いては。



魔王、レギオンと続き、異星人の脅威にまで見舞われていた人類統合軍は、そうして長きに渡る戦乱の終わりを悟り、狂喜している。その様子を、廃ビルの屋上から——1人の星雲特警が見下ろしていた。「……終わり、か。確かにこの星にとつては、そうなのかも知れんな」メタリックブルーの外骨格を纏う、若き星雲特警。彼の隣に立つ強面の男は、蒼い仮面に隠された横顔を、神妙に見つめていた。

「……あんたの方のおかげで、俺らの星は……地球は救われた。どんだけ礼を言つても足りねえのは分かつてゐし、あんたらの力になりたいのは山々なんだが……生憎、地球の軍隊じやあ足手まといにしかならなくてよ。……済まねえな」

「初めからそんなものは期待していない。私はただ、この青い星を守れと……上に命じられただけだ」

「ユアルク殿……」

「……それに、この星の平和は私の強さで得たものではない。良くも悪くも、地球の人々が掴んだものだ」

「……」

パンチパームの黒髪を、高所に吹く風に撫でられながら。男は蒼海将軍の含みを持つた言葉を受け、目を伏せる。

——他の惑星を侵略することで、宇宙での勢力圏を広めようとしていたドウクナス星人。

その侵略宇宙人から地球を守るべく派遣された、星雲特警ユアルクは……師であり父でもある歴戦^{メイセルド}の戦士から授かつた、幾多の技を駆使してこの星を守り抜いてみせた。

この星の防衛戦力である人類統合軍が全く歯が立たなかつたことを鑑みれば、彼の助力は地球にとつて不可欠だつたと言える。レギオンとの戦争を終えた時点で、彼らもすでに限界を越えていたのだから。

だが。ドウクナス星人達がこの星から撤退した理由は、蒼海將軍の存在だけではなかつた。

——割りに合わなかつたのである。

かつて地球は、緑と資源に満ち溢れた瑞々しい星であり、他の惑星にとつてはオアシスのような存在であつた。

それゆえ、今まで幾度となく異星人達に狙われ——その都度、星雲特警達によつて退けられてきたのだ。母星の外を知る術もなかつた当時の地球人には、知る由も無い話であるが。

……しかし。環境破壊を厭わない開発事業を、長い歴史の中で推し進めた結果。海は汚れ緑は消え、資源は食い荒らされ。異星人達が目をつけていた旨味は、現地民である地球人達によつて無自覚に奪われていたのである。

そのため、年を追うごとに地球を狙う異星人達は減つていき——それに伴い、星雲連邦警察も地球守備へのマークを緩めつつあつたのだ。

この星を狙う敵がいなくなるのであれば、星雲特警を常駐させる理由もない。それでなくとも、今はシルディアス星人との戦いを優先させねばならない。

そうした背景もあり、星雲連邦警察は地球を放置し始めていたのである。ドウクナス星人が地球を襲い始めたのは、その矢先の出来事だつた。

実はドウクナス星人も、他の星々のようにシルディアス星人の被害を受けていたのである。配下に置いていた惑星を次々に蹂躪され、戦いを挑むも返り討ちに遭い。僅かでも資源を得て生き延びるために、

藁にもすがる思いで地球に侵攻してきていたのだ。

だが、地球人達の軍勢——人類統合軍は蹴散らせて、星雲特警ユアルクにはまるで歯が立たず。これ以上無理に戦つて全滅してしまう前に、他の星を当たる方が賢明と判断したのだ。

貧しさに喘ぐドウクナス星人達にとつて、この星には蒼海将軍と戦つてまで奪う価値などないのである。

無論、ユアルクはそんな彼らの背景は調査済みであつた。だからこそ彼らを深追いすることもなく、こうして去りゆく円盤を見送つているのである。

——この地球から遠くない惑星は皆、シルディアス星人に蹂躪され尽くしている。飢えた彼らがどれほどもがいたところで、もはや辿り着ける場所などありはしないのだ。彼らは遠からず、暗黒の海原で餓死することになる。

そんな救いのない現実を、隣に立つ男はすでに知らされていた。……自分達の掴んだ平和は、決して誇れる形ではないのだということを。

「……良くも悪くも、か」

「将軍。私達は間も無く、この星を離れることになる。……後のことは任せたぞ」

「ああ、分かつてる。ここからは、俺達地球人の仕事だ。……例え、見せかけの平和でも……あんた達のおかげで掴んだ平和だ。きつちり守り抜くさ」

「そうしてくれ。……私もようやく、本来の戦場に帰る時が来た」「シルディアス星人、か……。せめて、この星から武運を祈らせてもらうぜ」

自分達ではどうしようもなかつたドウクナス星人との戦争も、シリディアス星人の暴虐を知る星雲特警達にとつては、ほんの前哨戦に過ぎない。そんな次元の違いを思い知られ、将軍と呼ばれたパンチパーマの男は深くため息をつく。

「——ユアルク。出発の準備が整つたぞ」

「済まない、デューネ。……では、我々はこれで失礼する。達者でな、

「将軍」

「……ああ」

やがて、ユアルクの名を呼ぶ1人の美少女が声をかけて來た。ショートに切り揃えた蒼い髪を靡かせる、色白の柔肌を持つ彼女は——デューネ・マリセイド。

「宇宙刑事デューネ」の異名を取る戦士であり、ユアルクと同様にこの星を守る任務を帯びていた女性だ。彼女自身も、ドウクナス星人と結託していた宇宙犯罪組織「ゲドウ」を壊滅させた手練れである。

95cmのIカップという巨峰を揺らしながら、切れ目の眼差しで戦友を見つめるデューネ。そんな地球人離れした美貌を持つ彼女に、思わず息を飲む長官を一瞥して……ユアルクは静かに立ち去つていった。

——次に会う時は、平和な時代がいい。

彼らは互いに、そう願つていたが。それが本当に叶うなど、この当時は全く信じていなかつた。

弱冠14歳の若さで星雲特警となり、シルディアース星人の「帝王」を打倒し、数百年に渡る戦いに終止符を打つ救世主の誕生など。彼らはまだ、想像すらしていなかつたのである。

「……」

「……どうした、デューネ。この星が名残惜しいか」

「いや……まあ、そうかな。環境汚染が進んでしまつたこの星でも、星空は美しかつた」

「そうか。……ならばその美しさを守るのも、我々の仕事だ。——行くぞデューネ」

「ああ——行こう、ユアルク」

将軍と別れ、大型宇宙船に乗り込む直前。ふと足を止めたデューネは、最後に目に焼き付けるかのように——その瞳に、東京の空を映していた。

だが、それから間も無く迷いを断ち切るように。彼女は踵を返し、蒼海将軍に続いて船へ乗り込んで行く。

そして、飛び去つていく自分達に手を振る、幼い子供達に微笑みか

けながら。宇宙からの使者達は、この星から姿を消した。

その子供達の1人——火鷹吾団に課せられた運命など、知る由もなく。

——この後。

ユアルク達を見送った将軍は世界各地を復興させ、人類統合軍を前身とする新組織「地球守備軍」を創設。その初代長官に就任し、退役後も政府高官として組織に関わり続けていた。

やがて、ドウクナス星人と抗争から30年後。シルディアス星人の襲撃を受け、地球守備軍が撃退された際は——マスコミのバッシングに耐え忍びながら、被災者の救援に奔走。老いた身を押してシルディアス星人の凶戦士達に立ち向かい、幾人もの幹部格を討ち取つていた英雄——光楯の担い手も、彼と共に走り続けていた。

その尽力そのものが、実を結ぶことはなかつたが——彼という存在は、「シルディアス星人の災厄」から5年の歳月を経て。

宇宙からの帰還兵だつた少年にとつて、かけがえのないものになるのだつた。



そして——21世紀の後半に差し掛かる、今から3年後の未来。ハイブリッドモンスター無機有機合成生命体を率いる悪の組織「黒い月」の侵攻が始まる、戦乱の世。

「空の戦士・電光レツドッ！」

人類はまだ、完全な平和を手にしてはいなかつた。

「海の戦士・電光ブルーツ！」

だが、それでも彼らは立ち上がる。

「陸の戦士・電光グリーンツ！」

機竜が。ゲオルギウスが。生態強化兵士が。宇宙刑事が。星雲特警が。人々が守り抜いてきた、この世界を救い——未来を紡ぐために。

「特務部隊・電光ツ！ 状況……開始ツ！」

そして——「彼」の姪である真弓嵐は、後に結成される「特務部隊電光」の部隊長付秘書官に就任。

叔父と同様に、地球の為に戦う若者達を支えて行くこととなる。

◇

——20XX年、現在。

5年前の災厄以来、異星人の侵略を受けることなく復興を続けてきた地球は、かつての平和を取り戻しつつあった。

街を行き交う人々は皆、5年前の災厄を過去のものとし、平穏な毎日を送っている。

だが、何一つ影響がないわけではない。

災厄を受けて、地球守備軍の軍拠は飛躍的に進行しており、その規模は5年前の数倍にも膨れ上がっている。近年では鐵聖将だけでなく、星雲特警のコスマーマーから着想を得た「地球製人間大パワードスース」の研究も進んでいた。

その新兵器——「ちきゅうとつけい地球特警」は後に3年の研鑽を経て、「特務部隊電光」の特殊強化戦闘服「電光スース」へと発展して行くのである。遠くない未来において、地球人はついにコスマーマーを超える人間大の強化外骨格を生み出したのだ。

それらの軍拠や新兵器の研究については、実戦でシルディアス星人に対抗出来なかつたことに起因する、世論からの反発も強かつたが——結局は、「武力無くして平和は成り立たない」とする勢力の方が多数派だったのだ。

一方、5年前の災厄でシルディアス星人を撃退したユアルクとメイセルドの勇姿は克明に記録されており、世間では彼らを35年前の「ユアルク星雲特警」と同一視する見方が強まっていた。幾度となく地球を救つてきた、宇宙からの使者である彼らを「神の使徒」と祀る宗教は、災厄の影響もあり35年前の10倍以上にまで勢力を強めている。

「宇宙から来た無敵のヒーロー」としか一般には周知されていない彼らは、老若男女全ての人々から絶大な支持を受けているのだ。光楯に続く、この星の救世主として。

「人呼んで、蒼海將軍！ 星雲特警ユアルク参上ーー！」

「メイセルド見参ーー！」

「デューネ推参ーー！」

「そして、このおれが……じんるいのきぼう、『暁』だーつ！」

『光楯』だー！」

「悪の異星人め、かくゞしろおつ！」

「きやーつ！」

それを裏付けるように——街中のとある孤児院では、幼い子供達が星雲特警や異星人等に扮して、ヒーローごっこに興じていた。その様子を、柵越しに1人の美女が微笑ましげに見守っている。

「……さて、そろそろ行くか」

やがて蒼い短髪を搔き上げ、踵を返した彼女は——豊満な巨峰をたわわに揺らしていた。その成熟した果実に、何人もの道行く男達が目を奪われていたのだが——好色の視線には慣れているのか、当人は気にすることなく歩み出して行く。

「……！」

そうして、彼女が立ち去ろうとした瞬間。戦災孤児院の院長を務める、1人の老女が——用務員アルバイトの少年を呼びつけている様子が見えた。その隣にはショートボブの黒髪を靡かせる、同年代らしき少女の姿も窺える。

少年達を見かけた美女は足を止め、茶色の作業服を纏う彼らを神妙に見つめる。

潑刺とした表情を浮かべる少年少女は、幼い子供達と笑い合いながら老女に駆け寄っていた。どうやら彼らは、子供達とも仲が良いらしい。

「はいはい、休憩の時間は終わりですよ。火鷹さん、進士さん。しんし田中先

生を呼んで来てください」

「わかりました。進士さん、行こつか！」

「は、はい！」

「さ、あなた達も教室に戻りなさい。授業を始めますよ」

「はーい！ たろーにーちゃん、あいねーちゃん、またあとでね！」

「うん、また後でね。君達、ちゃんと院長先生の言うこと聞くんだよ

？」

「また授業中にお喋りしてたら、ダメですよ？」

「わかつてゐる——！」

その後、用務員の少年は首に巻いた赤いスカーフを揺らして、施設の中に向かつて行く。ショートボブの少女は、そんな彼の背にほのかな想いを募らせて、その後ろに続いていた。

——その一方で、金色を僅かに残した白髪の老女は、わんぱくな子供達に声を掛けている。

「……」

地球守備軍の主力戦闘機「コスマビートル」。そのパイロットの証である、赤いスカーフを巻いた少年の優しげな貌を、蒼い髪の美女は遠くから静かに見守っていた。彼がこの孤児院の教師を呼びに、施設の中へと消える瞬間まで。

「……ユアルクめ、随分とつまらんホラを吹いたものだな。弟子の教育を誤った、などと」

やがて、少年の背を見届けた彼女——デューネ・マリセイドは、微笑を浮かべて踵を返す。脳裏に過る戦友の言葉が、今は可笑しくてたまらなかつたのだ。

あの少年——火鷹太団は、かつて地球のために戦い抜いた「星雲特警ユアルク」の心を、確かに受け継いでいたのだから。

——そして、彼女の足元では、道端に咲き誇る蓮の花々が、肌を撫でる穏やかな風を浴びて、ひらひらと揺らめいていた。

番外編 星雲特警と怪獣映画

——20XX年、4月中旬。

桜が散り、新学期という時期ではなくなり始めた春の日。火薙太図は1人、寂れた商店街に足を運んでいた。

黒のレザージャケットに袖を通し、赤いスカーフを首に巻く、優雅な顔立ちの少年は——薄気味悪さが漂う街道を、静かに歩む。学校も、孤児院のバイトもない休みの日は、こうしてここに訪れるのが定番になっていた。

「うわっ、とど……『めんなさい』

「……ああ、大丈夫。気をつけて通りなさい」

「はい、すみませんでしたっ」

目的地手前の曲がり角。そこで身形のいい通行人の男とぶつかりそうになり、太図は咄嗟に身をかわす。その後、穏やかに対応する通行人に頭を下げた彼は、足早にその場から立ち去つて行つた。

「……」

自分の背を見送る、通行人の男。その鋭い視線に、気づくこともなく。



少年の行き先は——薄暗い街角の地下で、ひつそりと経営されている小さな映画館。掃除が行き届いていないのか、床や壁は汚れで変色している。

その内装を一瞥した後、太図は受付に足を運んだ。向かい側から顔を出してきたのは、口をへの字に曲げた小柄な老人。彼は太図の顔と首元の赤いスカーフを見るなり、これ見よがしにため息をつく。

「へいらつしや……なんじや、また坊主か。ここんとこ毎週通いつめとるなあ、お前さん」

「館長さん、ここんちは。……学生1枚、いいですか？」

「うちには学生割引なんぞない、いつも言つとるじやろが。……またあの映画じやろ。今時の若もんにしちゃあ、随分偏屈な趣味しとるの

う

「あはは……」

太団は財布から小銭と札を出し、1枚のチケットを受け取る。その後、受付の隣にある、劇場への入り口で座っていた老婆にチケットを渡した彼は——汚れた廊下を渡り、暗く狭い劇場に向かつて行つた。

「……」

席はほとんどガラガラ。自分以外にも数名の客はいるが、年配者ばかり。そんな見慣れた光景を眺めながら、太団はお気に入りの席に着く。

画面全体を見渡せる、最後列だ。と言つても、劇場 자체が小さいのでそこまで前列との差があるわけではないのだが。

「よつ、と。坊主、ここ最近ずっとコレ見とるのう。若もんにはそんなに珍しいか?」

すると。さつきまで受付にいた老人が、太団の隣に腰掛けてきた。その状況に、少年は目を丸くする。

「え? 館長さん、受付は?」

「どうせ今日の上映はこれで終わりじゃからの。……館長権限じや、ケチケチ言うでない」

「は、はあ……」

一方、館長であるはずの老人本人は気にした様子もなく、間も無く上映を迎えるとしている大画面に見入っていた。足が床まで届かないのか、小柄な老人は両足をプラプラと降り続いている。

そんな彼をどこか可笑しく思いながら——太団も、上映が始まつた画面に視線を移すのだった。

◇

——それは、戦争を知る世代が前世紀に制作した、モノクロの特撮映画だった。

ある日突然、地質調査を行なつていた樹林警備隊を襲つた謎の怪獣。50mにも及ぶ巨体である、その怪獣は——まるで、キノコ雲のような異様な面相を持つていた。

その正体は核実験による環境破壊の影響で突然変異した、ジュラ紀

の恐竜だつたのだ。

圧倒的な耐久力と破壊力を兼ね備えた怪獣は、警察や軍隊を圧倒。街は破壊され人々は逃げ惑い、人類はなす術がなかつた。

——そんな時。ある1人の天才科学者が、怪獣を抹殺する超兵器を作り上げる。だが、その超兵器が軍事利用される事態を危惧した彼は、機密が漏れないよう資料を焼却。

さらに超兵器を、親友の樹林警備隊隊員に託して——拳銃自殺してしまうのだった。

そんな彼の想いを受け止めた隊員は、怪獣を仕留めるための特別攻撃に志願。超兵器を誰にも利用させないため、仲間達にもその存在を隠したまま死地に向かい——やがて、怪獣の眼前で超兵器を作動させて、自爆した。

怪獣との相討ちに持ち込んだ彼の死を悼む警備隊隊長は、「この悲劇を繰り返させぬためにも、自然を守らねばならない」と、決意を新たにする。

——それが、この映画の内容であつた。

過去のノウハウも何もなく、手探りの中で制作されたこの作品は、非常に粗も多い。だが、それを感じさせないほどの作り手達の想いが、画面を通じて観客達を惹きつけていた。

「ええのう……やっぱCGなんぞ邪道だわい。あの爆煙と臨場感は、生の映像でしか出せん。やはり昔ながらの特撮じやないとなあ」

隣で、そう独りごちる館長を一瞥しつつ。太団は、怪獣を倒した後のラストシーンを、神妙な面持ちで見つめていた。

『……あの怪獣は、本当に最後の一匹だつたのだろうか。奴という存在は、氷山の一角でしかなかつたのではないか?』

『本当にそうだとしたら、我々人類はどうなつてしまうのでしよう』

『わからん。……だが、環境破壊の悲劇が繰り返される限り。この戦いも、犠牲も……同じように繰り返されて行くのだろう』

沈痛な面持ちで空を仰ぐ隊長。その場面で映画は終わり、エンドロールが流れ始める。隣を見やると、館長が満足げな笑みを浮かべて

いた。

太団のことを偏屈な趣味と言いつつも、実のところはこの映画が好きでたまらないらしい。

「やっぱ特撮はええのう……わしらが坊主くらいの頃は、仲間達と一緒に通り詰めたもんじやわい」

「……今日も、来れて良かつたです。今じゃ、ここでしか見られないから」

「そうじやろ、そうじやろ。……なあにが不謹慎じや、全く。偉い連中はこれの良さがまるで分かつとらん」

「……」

——前世紀、それもこのような特撮映画が作られていた時代においては、怪獣も異星人もフィクションの存在でしかなかつた。人が空想で作り上げた、幻想のものでしかなかつた。

だが、度重なる外宇宙からの侵略を受けて、それらのジャンルは單なる娯楽とは言えないようになつてしまつたのだ。映画の中だからと笑つていられたことが全て、現実になつてしまつたのだから。

そのため、こうした怪獣や異星人の類を扱つた特撮映画は「遺族の心傷を軽視する不謹慎な作品」と見なされ、弾圧されてしまつたのである。

以来この手の作品群は、ここのような場末の映画館でしか見られない程の、肩身が狭い状況に立たされてしまつたのだ。

観客が年配者ばかりなのも、怪獣や異星人が架空のものだつた時代を、懐かしむ層が集まるからなのだろう。

「地球守備軍も随分強くなつたと言うどるし、ちょっとは融通利かしてたつてええじやろが。のう、坊主」

「……そうですね」

不遜な口調で文句を並べ、鼻を鳴らす館長。その様子を横目に見遣りながら、太団は暫し物思いに耽る。

——3年前。星雲特警として戦う日々の中で、太団は異星人達が地球を襲わなくなつた本当の理由を知つた。

この星にはもう、襲うに値するほどの「資源」がないのだと。その

「資源」を失わせてきたのは、他ならぬ地球人なのだと。

(同じように、繰り返されて行く……か)

その事実と向き合つた上で、太団は映画の中で隊長が放つた台詞を反芻する。

——地球の資源を犠牲にして、ドウクナス星人を撃退し、平和を掴み。シンシアの犠牲を以て、シルディアス星人を滅ぼし、安寧を取り戻した。地球人は歴史の中で、絶えず「命」を切り捨て、目の前にある未来を守り続けて来たのだ。

それはきっと、間違いではない。そうしなければ、今の平和はないのだから。

だが、その平和はそれまでの「過程」によつて今、脅かされようとしている。人類が自分達のために始めた核実験のせいで、誕生してしまった怪獣に脅かされていた——この映画のように。

——もしかしたら、この映画を作つた当時の人々には、分かつていたのではないか。こうして人類が、痛みを繰り返して傷ついて行く未来が、覗えていたのではないか。

その思いゆえに、強いシンパシーを感じたから。太団はこの映画を観るために、ここへ足繁く通つているのだ。

(……じゃあ……オレは一体、どうしたらいい。これ以上、悲劇は止められないのか？ 本当にオレは、全てを知りながら……死んで行くこの星を、見つめて行くしかないのか？)

——地球資源はまだ、すぐに枯渇するほど失われているわけではない。少なくとも太団が生きている間は、保つだろう。

だが異星人達にとつては、奪う価値すらないほどに枯れているのだ。地球人よりも遙かに長く、悠久の時を生きる彼らから見れば、この星は枯れかけた井戸のようなものなのだろう。

太団は、それをよく知つてゐる。現在の彼の保護者である軍の高官も、その状況は理解している。だが、軍拡の気運が高まりつつある世情の中では、資源の減少を押し留めることもできない。

それでも太団の素性を世間に明かし、説得力を得た上で地球の危機を訴えれば、世論を味方につけることも可能だつただろう。だが、そ

れは太団の安全を気遣つた蒼海将軍の思いに、反することになる。

そのジレンマを抱えていることも、彼が映画館に通う理由の一つであつた。

——地球の資源という危難を知りつつも、何もできない。そんな苦悩を抱えた彼にとつて、自分と同じ懸念を訴えるこの映画は、ある意味では救いだつたのだ。

(コロル、ケイ。シンシア……)

ただ生きているだけなのに。殺されるために、生まれて来たわけではないのに。強者の都合で犠牲を強いられた、映画の怪獣に重ねるようにな。

太団は、亡き少年少女達の幻影を悼み、目を伏せる。

「はあゝあ。世の中、つまらなくなつちまつたもんじやのう。せめて、現実の樹林警備隊もカツコ良けりやあなあ」

「……！」

館長のぼやきに反応した彼が、ハッと顔を上げたのは、その直後だつた。太団は真剣な面持ちで、への字に口を曲げた老人を見つめる。

「……そういうえば、この映画に出てくる樹林警備隊つて……実際に在つた組織なんでしたつけ」

「おん？　ああ、そうじやそうじや。イタリアが発祥の警察機関での。今は守備軍に吸收されて……確かに、自然警備隊つてのに変わつとるんじやと」

「自然警備隊……ですか」

「まあ、変わつたと言つても密猟者の逮捕やら環境汚染犯罪の捜査やら、やることは昔と変わつとらんらしいがの。……じやが今は、軍事開発だがなんだかで、森をめちゃくちゃにしとる軍部のやり方に反するつちゅうんで、肩身が狭くてたまらんらしいぞ」

「そなんですか……」

「じゃから、今は左遷された隊員の溜まり場になつとるつて話じや。……映画みたいにマジメな隊員なんて、1人もおらん。情けないのう」

「……」

樹林警備隊、改め自然警備隊。この映画で語られる彼らの勇ましさと、その実態の間にあるギャップの凄まじさに、館長は深々とため息をついていた。

一方。太団は何か思いつめるように、口元に手を当てている。
——理想と現実は違う。本当のところは、そんなにいいものじゃない。

い。

それは、太団自身が経験して来たことでもあった。

宇宙の平和を預かり、全宇宙の人々の安全を守る正義の戦士。そう謳われる星雲特警の1人だつた太団は、その美辞麗句に隠された現実を、嫌という程見て來たのだ。

敵性宇宙人とあらば、女子供だとると容赦なく抹殺し。10mもの巨大ロボットに乗り込んで、彼らを轟き殺す。それは確かに、最大多数の幸福を守るための、正義の一つではあつたけれど——喧伝されていていた綺麗事とは、程遠い景色だつた。

彼らという存在はこの地球において、「天スカイが遣バハわした救世ヒーロー主」として半ば神聖視されている節もあるが——当事者の1人である太団に言わせれば、買い被りもいいところである。

それでも、確かに正しくはあつたのだ。ただ、美しくも格好良くもなかつただけで、やらざるを得ないという背景は、確かにあつた。

そうと知りながら受け入れられず、抗つていた自分だからこそ分かる。綺麗事ではない、汚くて仕方ない世界にも……意義は、あるのだと。

シンシアを守ろうと「正義」に逆らつた自分だからこそ、見えるものがあるはずだと。

「……おん？ なんじゃ、妙にスッキリした顔しあつてからに」「……いえ」

その思いに至つた彼は、憑き物が落ちたような表情で顔を上げ、館長に穏やかな笑みを向ける。

そして、エンドロールの最後に「終」と映された画面を見つめ——口元を緩めるのだつた。

「……やつと。やりたいことが、覗えた気がするんです」



「……不審」

「不審、とは？」

「……先ほどから、ずっと物思いに耽っている。義父に送る酒の銘柄のことか？」

「違う。……というかあの歳でまだ飲むつもりでいるのか、あの人は……」

「還暦を過ぎても杖が必要になつても、義父は何も変わっていない。至極不愉快。……で、結局何をそんなに逡巡している？」

商店街から離れた、東京の大通り。絶えず車と人が行き交う、日常の景色の中で。

運転手を務めている少女——倉城ヒカリは「場末の映画館」の帰り道で、助手席に座る上官に疑問を投げ掛ける。上官の口数が少ないので今は今に始まつたことではないのだが、それについても普段とは様子が違うように感じられたのだ。

その機敏を見落とすような、浅い付き合いではない。永い年月の中で、命を預け合ってきたのだから。

「……さつき、変わった少年とすれ違つてな」

「変わつた……？」

「年不相応な、眼をしていた」

後部座席に座る身形のいい男は、目を背けるように窓の向こうへと視線を移す。

——年端も行かない少年でありながら、血と痛みと別れを知り過ぎた、帰還兵のような眼。それは5年に渡り平和を謳歌してきた、この星の市民としては余りにも奇特で、歪だ。しかもその首には、コスマビートルのパイロットの証であるスカーフがあつた。

矢城正也將軍は、そんな奇妙な少年の横顔を思い出し——暫し、物思いに耽る。

(……そう、あれはまるで……)

あの貌はまるで。共に戦つてきた仲間達も、可愛がつていた子供

も、何もかも喪い続けてきた——かつての自分のようだつたのだ。

番外編 星雲特警とソフビ人形

——20XX年、5月上旬。

学校が休みであり、孤児院のバイトもないG Wのこの日。火鷹太団は、大勢の人々で賑わうデパートに訪れていた。

「おーい、太団！ 何してんだよー！ 置いてくぞー！」

「はいはい。今行くから待つてね、あきら 晓くん」

彼の腰ほどの背丈しかない、幼い少年を連れて。



今年に入つて、5歳を迎えたばかりである少年——真弓まゆみ 晓あきらは、買い物力ゴを持つ太団を尻目に玩具コーナーを駆け回り、目当ての品を物色している。そんな腕白少年の滌刺とした立ち回りに、太団は苦笑いを浮かべていた。

——地球守備軍出身である、政府高官。彼の養子となつた太団は、仕事で中々家に帰れない父に代わる形で、こうして晓とG Wを過ごしているのだ。

「あつ、あつち見たい！ 太団、あつち行くぞあつちー！」

「えつ……ちよ、もう暁くんつ。あんまり走つたら危ないよ、こら待ちなさいつたら」

「シリディアス星人の災厄」の後に生まれた暁は、惨劇が起きた當時を知らないためか——活力に溢れる腕白な少年に育つており、いつもこうしてあちこち駆け回つては太団を振り回しているのである。

彼曰く、「後からウチに来たんだから太団はおれの弟！ おれが兄ちゃんだからな！」ということであるらしく、いつも「年上の弟」である太団の前で、えへんと胸を張つているのだ。

一方、太団も暁のことは実の弟のように可愛がつており——実子と養子ではあるが、2人は血を分けた兄弟のように良好な関係を築いている。

「あつたあ！ メイセルドのソフビ！ ……あれ、でもユアルクがねえや。しようがねーなー、他の店回ろうぜ」

「……うん、そうだね」

その理由は——暁の生い立ちに関係していた。

太団が持つてゐるカゴの中に、リアルな等身を再現した「星雲特警メイセルド」のソフトビニール人形を入れた暁は、「星雲特警ユアルク」の人形を探し始める。

そんな彼の背中を、太団はどこか物鬱げに見送つていた……。

◇

都内有数のデパート。その近くにある玩具屋数軒。それら全てを回り、目当ての人形を探し続けていた2人だつたが……思うような成果には至らなかつた。

玩具屋を渡り歩くうちに、いつの間にか都会の喧騒から離れ——寂れた商店街に出てしまつた暁は、地団駄を踏む。

「ちくしょー！ なんで何処にも売つてないんだよー！」

「ユアルク……って言つたら一番有名で人気だし、まして今はGWだからなあ。この時期に買う親子ばかりなんだろうね」

「むむうー！ まだだ、まだ諦めないと！ 絶対見つけてやるぜー！」

だが、暁はまだ諦める気配を見せらず、意氣揚々と歩み出して行く。その粘り強さに感心しつつ、「弟」らしく彼の後ろを歩く太団は——過去の記録映像で観た師の勇姿を、独り思ひ返していた。

——星雲特警ユアルク。35年前に怒濤の活躍で地球を救つた彼の雷名は、今もなお神話級の英雄として語り継がれている。

5年前の災厄で彼と共に地球に現れたメイセルドも、この星ではヒーローとして認識されているが……それでも、ユアルクの名声には遠く及ばない。それほどまでに、彼という存在は絶対的な正義として、広く認知されているのだ。

そんな彼の人形が、子供達に売れないとばらがなく。そんな子供達を持つ親が、GW時の大量入荷に目をつけないはずもなく。

結果として自分達は、その流れに乗り遅れてしまつたわけだ。何処かに一つくらいは売れ残つてゐるだろう、とタカをくくつたのが不味かつた。

——国内最大手の玩具メーカー「バンピーポ」。星雲特警や異星人等を商品化しているこの会社では、「リアルを追求した格好良さ」を重

点に置いた商品作りを目指しているらしく、主力商品であるソフトビニール人形に、その社風が顕れているという。

星雲特警や地球特警のようなどヒーローは、とことんカッコ良く。ドウクナス星人やシルディアス星人のような悪の異星人は、徹底的に邪悪に。そんな深層意識が透けて見えるほど、ソフビ人形の造形に強い拘りが窺えるのだ。

それはある意味、異星人の侵略に晒されて来たこの星にとつては、必然の文化だつたのだろう。

星雲特警のようなどく一部の味方を除く、全ての異星人は侵略者であり、悪。長きに渡る戦史の中で、人類はそう結論づけているのだから——こういった玩具にも、異星人を邪悪に描くプロパガンダが行われるのは当然なのだ。

実際、売れ行きの大半はヒーローグッズが占めているらしく、異星人のソフビ人形はヒーローの半数以下しか売れていないらしい。売っているとしても、それはヒーロー人形に華を持たせるためのサンドバッグ用でしかない。地域によっては、遺族の心情に配慮して販売すらしていない店舗もある。

——こうして。戦いに関わらない人々の日常にも現れる、憎しみの残滓を垣間見て。太団は暁の後ろで、静かに……それでいて深く、息を吐くのだった。

その後、彼は暁が「メイセルドにやつつけさせる悪役」として買ったシルディアス星人のソフビ人形に、視線を落とす。元星雲特警の眼に映る、その人形の貌は——彼自身が戦場で対峙してきた本物以上に、凶悪な面構えに造られていた。

「んつ……なんだ……？」

「……？」

——そんな折。ふと足を止めた暁が、小さな玩具屋の店頭に視線を移す。いつの時代かわからないような、古めかしい玩具が並んだその店には——今まで立ち寄ってきたどの店舗とも違う、異様な雰囲気が漂っていた。

「なんだあ、ここ。ヘンな玩具ばつかだな。人形もなんかブサイクだ

し。……げ、なんだこのユアルク。頭はデカいし手足は細いし、カツコ悪！」

「……」

その景観に、暁は眉をへの字に曲げて、訝しげな表情を浮かべる。一方、太団は店頭に並ぶ奇妙なソフビ人形の群ライシングナップれに目を奪われていた。基本的に箱詰めされているバンピーポ製のソフビ人形とは違い、その人形達はヘッダー付きのビニール袋に詰められている。

その人形の等身はリアルとは言い難く、不自然に頭部が大きいし手足は細過ぎる。デフォルメという割には顔付きそのものはリアル寄りで、そこがまたアンバランスであつた。

——だが、それでいてどこか愛嬌があつて。機械的なまでに精巧に再現されている、バンピーポ製のソフビにはない温かみ……のような何かを感じられる。

何より星雲特警であるユアルクと、それ以外の異星人との間に、造形の差異が感じられない——という点が、太団の関心を惹きつけていた。見てくれこそ些か不細工であるが……星雲特警も異星人も、平等なディテイールで造られていたのである。

「……んあ？ なんだお客様かい？ 珍しいなこんなところに」

すると、店の奥から恰幅のいい男性が顔を出してきた。この店を独りで切り盛りしている、店長だ。体毛が非常に濃く、無精髭が目立つ彼は太団達を目にして——ぶすっとした表情を浮かべる。

「……ああ、悪いね。ウチには今時のガキンチョに合う玩具はねえんだ。冷やかしなら帰つてくんなり。」

「な、なんだとー！ おい、太団もう行こうぜ！ こんなとこ——」「あの、すいません。この人形つて……」

バンピーポ製のソフビ人形を求める客であると即座に見抜いたらしく、店長はしつしつと手を振る。

客商売をしているとは思えない彼の対応に、暁が眉を吊り上げる一方で——太団はこの店のソフビ人形を手に取り、疑問を投げかけていた。今まで巡ってきた玩具屋では、一度も見たことがない形状なのだ。

「……まあ、知らんのも無理はねえ。なにせ兄ちゃん達が生まれる前に、潰れた会社の商品だからな。かれこれ30年以上は昔の人形だよ」

「30年ですか」

太団が手に取っている、奇妙なディティールのソフビ人形。その商品を入れているビニール袋のヘッダーには、「カウマック」というメーカーのロゴが描かれていた。

可愛らしい雌牛のロゴを一瞥し、太団は顔を上げて店長と視線を交わす。そんな彼の顔つきから何かを察した店長は、昔を懐かしむように口を開いた。

「……昔はな、異星人を信じてみよう、異星人と仲良くやつてみようつて連中もそれなりにいたんだ。今みたいに異星人共は全員敵、つて風潮なんかじやなかつた」

「……」

「だが、現実は厳しくつてな。結局は星雲特警以外の異星人にいい奴なんかない、異星人を信じたら殺される……つて、世の中に決め付けられちまつた。だから、星雲特警も異星人も、分け隔てなく同じ造形で作ってきたカウマックは潰れて……異星人を悪し様に見せるバンピーポが生き残った」

「異星人を、分け隔てなく……」

「ああ。……俺も、ガキンチョの頃は異星人とダチになるのが夢ですよ。カウマックのソフビ人形を毎日欲しがつては、お袋にドヤされたもんさ」

「それで今は……当時の商品を、ここで？」

「……ま、大体は俺が並べて懐かしみたいだけなんだがな。どうせ、カウマックのソフビ人形が好きな奴なんて……この時世にいるわけねえし」

「……」

どこか遠い昔を見つめるように、目を細める店長。そんな彼の横顔を見つめた後、太団は自分の手にある人形に再び視線を落とす。

「……え？ た、太団？」

「……」

——時流に押し潰され、闇に消えた対話への道。かつては存在していた、共生を願う思想。それが許されていた、時代の産物。

それを見詰めた瞬間——たまたまシルディアス星人に生まれただけの、幼気な少女の涙が、脳裏を過る。刹那、太団は人形を握り締めたまま目を伏せた。

そんな彼の異変に——隣でつまらなさそうにしていた暁が、不安げな顔つきに変わる。……その時だつた。

かつて共生の道を探していながら、自らの剣でそれを断ち切つてしまつた愚者は——店長の前に、カウマアク製のソフビ人形を差し出した。

「……この、ドウクナス星人を一つ。お願ひします」

「いいのかい、こんなダサい人形で。そこの坊主は、もつとカツコいい人形と遊びたいはずだが」

「これは自分用です。……持つていていいんです、その時代の人達が作つてくれた物を」

「……ハハ、変わつた兄ちゃんだな。あんたみたいな趣味の若いモンなんて、そろはいねえぞ」

あくまで自分用と言い切る太団に、苦笑しつつ。店長は彼の胸中を汲むように、ドウクナス星人のカウマアク製人形を受け取り……清算を始める。

すると。隣でその様子を眺めていた暁が、思い立つたように店頭へ向かい——1体のソフビ人形を持ってきた。先ほどまで彼自身が「カツコ悪い」と言つていたはずの、カウマアク製のユアルク人形だった。

「……じゃあ、おれはこれっ！　おつちゃん、おれ、これにするっ！」
「お？　坊主もカウマアクの人形にすんのかい。今日の客は変人ばつかだな」

「えつ、ちょ、暁くん!?　それ買つたら今月のお小遣いなくなっちゃうよ!?　暁くんが欲しいのはバンピーポ製の、リアルでカツコいいユアルクでしょ?」

どこか愛嬌はあるものの、不細工としか言えないユアルク人形。それを買いたいと申し出た暁は、キツとした目つきで太団を見上げる。

その眼には「決して譲れない」という、強い決意の色が滲んでいた。「……太団がそれ買うんだつたら、おれもこのユアルクにする！」

そーじやなきや、釣り合わないじやん！ バランス悪いじやん！」

「じゃ、じゃあこつちのユアルクもオレが一緒に買ってあげるから。何も暁くんが無理して……」

「やーだ！ フエアじやねーもん！ それに……太団と遊べなかつたら、意味ねーもん」

「……」

駄々をこねるよう腕を振る暁を見つめ、太団は暫し思案する。

——この少年は政府高官の子息という立場故、対等な友人というものが殆どいない。今通っている幼稚園にも、彼を通じて政府に媚を売ろうとしている親の子ばかりが来ているという。

そんな大人達の思惑を意識せず、対等に接してくれる「ともくん」という親友もいるようだが……それはごく稀なケースであり、彼を除けば暁には友人らしい友人がいない状況なのだ。

養子になつて間もない太団に、暁がこれほど懷いているのも——そこから来る寂しさに由来しているのである。彼にとつては玩具の出来云々より、太団が自分のように、純粹にソフビ人形に興味を示したことの方が重要だったのだ。

——太団も人形を欲しがつてゐなら、それと一緒に人形でおれも遊びたい。独りぼつちは、いやだ。一緒に遊んでくれる太団と一緒になれなきや、意味がない。

言外にそう訴える、暁の胸中を汲み取り——太団は観念したように頬を緩めると、店長の方に視線を向けた。その眼差しから意図を察した店長も、フツと笑みをこぼして清算をやり直す。

こうして、2人はカウマアク製のソフビ人形を2体購入し——今日の買い物に、幕を降ろすのだつた。

◇

そして、この日の夕暮れ。実の兄弟のように仲睦まじく、手を繋い

で帰路につく2人の胸には——それぞれが買った、カウマアク製のソフビ人形が抱かれていた。

予想外の買い物を楽しみつつ、彼らは笑いながら黄昏の道を歩んでいる。それは戦いの日々から遠く離れた、平和な世界そのものであつた。

「来月になつてお小遣い貰つたら、今度はちゃんとバンピーポ製のユアルク買いに行こつか。夏休みまでには、いい感じにセットが揃うといいね」

「んー……いいや。今度はあるの玩具屋で、メイセルド買いたい。こつちのタイプの」

「え……？」

「だつて太▣はこつちの方がいいらしいからな！ 兄ちゃんんだつたら、弟が楽しめるようにしてやらねーと！ なんたつておれは、太▣の兄ちゃんなんだからな！」

えへん、と胸を張る暁は満面の笑みで、手にしたユアルク人形を掲げている。かつてないほどに充足している、その滌刺とした笑顔を目にして——太▣も破顔していた。

「……そつか。兄ちゃんは、弟想いなんだね」

「へへん！ だろー!? 兄ちゃん凄いだろー!?

「うん。……凄いよ、暁くん。君は、凄い」

幼い身でありながら、大人達の思惑に振り回され——それでも笑顔を失わない彼に、自分にはない強さを感じつつ。太▣は優しげな笑みを浮かべ、黄昏の空を仰ぐ。

(……ユアルク教官。メイセルド隊長。異星人とオレ達が、手を取り合えるなんて……所詮は愚かな幻想なのかも知れません)

誰もが悪と糾弾する者を、悪と決めて斬ることが出来ない。そんな人間に、星雲特警という正義の執行者が務まるはずがない。

——そしてそんな愚者にしか、出来ない生き方がある。それが、誰にも認められない道であるとしても。

(だからこそオレは……その道を信じる、愚者で在り続けます)

そんな己という人間と向き合うように——太▣は、共生に望みを抱

いていた時代の象徴たる人形を、静かに見つめる。

不細工で、バランスが悪くて。それでいて愛嬌に溢れている、優しげな造形。そこには苛烈な憎しみも思想もなく——ただ、あるがままの願いだけが込められていた。



——そして、今から3年後の21世紀後半。

悪の秘密結社「黒い月」が放つ無機有機合成生命体^{ハイブリッドモニスター}が跋扈する、激動の時代の中——「特務部隊電光」は、正義を背負い戦場を駆け抜けていた。

そんな中、政府は「電光」を鼓舞するプロパガンダのため、彼らを題材にした商品を出すよう玩具業界に命じる。

——垂直短距離離着陸機電光ジヤイロや主力装備の電光銃、ステイツク状から多彩な形態に変形する電光ガジェット等を商品化した「特務部隊・電光シリーズ」が発売されたのは、それから間もなくのことであった。

もちろん、プロパガンダのために生み出された商品展開はそれだけには留まらず——リアル指向のバンピーポ製ソフビ人形も、飛ぶように売れていた。とりわけ部隊の筆頭である「電光レッド」の人形については、品切れになる店舗が続出していたらしい。

——その一方。とある商店街の小さな玩具屋に、奇妙なディティールで造られた「電光」のソフビ人形が並べられていたのだが。それを知る者は、誰もいなかつた。

「おーい！ おつちゃんいるー!?」

「また来たのかあ？ 物好きになつたもんだなあ、坊主も」

その人形を買う為に、暇を見つけては足繁くそこに通う——真弓暁を除いては。

彼は拙くも愛嬌のある人形を手に取り、ニンマリと笑みを浮かべる。

「明日はな、太団の20歳の誕生日なんだ！ 兄貴として、弟の誕生日は祝つてやんなきやなー！」

「……へえ、そうかい」

そんな彼の笑顔をして——店長の男は、憮然としつつも口を緩めていた。

辺境の後方部隊である自然警備隊の出身でありながら、航空隊出身のトップエリート・天羽宙^{あもうひろし}に次ぐ成績を残し、電光レツドの最終候補にまで選ばれていた……彼の「弟」。

——あの青年は優しげでありつつも、どこか寂しげな貌をしていた。恐らくはこの幼子も、子供心にそれを察していたのだろう。だからこうして、彼はここに来ているのだ。お互が抱えている寂しさを、埋め合うように。

過去の「災厄」で妻子を喪い、独り身となつた店長にとつては——そんな彼らの姿が、微笑ましかつたのである。子供達はこんな時代でも、なお強く生きようとしているのだと。

「あー……と。ダメだ、ちょっと足らない。電光グリーンだけ買えないや。しょーがない、レッドとブルーだけでも……」

「……ほれ。グリーン1体、オマケしといてやる」

「え……いいの?」

「ちようどそういうキヤンペーンやつてることなんだよ。……さつさと持つて行つて喜ばせてやりな、兄貴なんだろ」

「……おう、サンキューな!」

その喜びが、柄にもない氣遣いへと繋がつていた。店長は目を背けながら電光グリーンのソーフビを渡し、2体分の料金だけを受け取る。そんな彼の意図を察した上で、暁は満面の笑みを浮かべると——3体のプレゼントを握り締め、外へと駆け出していくのだった。

「車に気をつけろよ!……つたく、らしくねえつたら、なあ……」元気に駆け出していく子供。自分にはもう望めない、その景色を眺めた後——店長は天を仰ぎ、独りごちる。

「……誰だつてあんな風に笑えりやあ、いいのによ」

それは戦乱が絶えず、人々の悲しみが絶えないこの地球上に暮らす誰もが——願つてやまないことであつた。

◇

——その頃、日本の権威を預かる首相官邸では。優雅な自然に彩ら

れた庭園を歩む、2人の男達がいた。

平和の一翼を担う防衛大臣である男と、かつて侵略者レギオンから世界を救い——歴史の教科書にもその名を残している、生ける伝説。彼らはその威光に相応しい、正装と陸軍軍服に袖を通していったが——どちらも、その優雅な服が張り詰めてしまいそうな程の体格の持ち主であった。

その後ろに続く、軍服に袖を通した1人の少女は、黙々と彼らに付き従つている。

「似合わん、矢城。いつもの野戦服はどうした」

「官邸こにで着れるわけないだろう。それに、似合わないのはお互い様だ

——蒲生さん」

「……失礼ながら、右に同じ」

重厚な年季を漂わせ、低い声で笑い合う矢城正也将軍と——防衛大臣・蒲生丈太郎。そして、寡黙な面持ちを崩さない倉城ヒカリ。彼らは風情に溢れる庭園の縁を一望し、談笑のひと時を過ごしていた。

だが、昔ながらの悪友のように語らう彼らの佇まいに反して——その内容は、日本の行く末を憂う者達の、神妙な談話であつた。

『黒い月』……か。また物騒な世の中になつたもんだ。『電光』の連中もよくやつてくれちゃあいるが、決着がつくのは当分先になるだろう。この星も随分、平和の神様に嫌われたもんだな』

『電光』といえば……俺の部下が推した候補を蹴つたそうじやないか。強い奴が大好きな、あんたらしくもない』

「……それは、ボク達も気に掛かっていた。彼の戦闘力は、大臣もお気に召したはず」

「火鷹太団のことか？ 確かにあいつは、個人としての戦闘力なら天羽宙の上を行く。だが、上に立つて部隊を指揮するリーダーとしての資質が足りん。『電光』はチームだ、ワンマンアーミーはいらねえ。まして隊の命運と国民の安全を背負う電光レッドなんぞ、任せられるわけねえだろう」

「本当にそれだけが理由か？ あの坊主が只者じゃないってことは、あんたも知つてたはずだ。真弓元長官の養子で、火鷹吾団の息子……」

そして、『シリルディアス星人の災厄』の生き残り。そんなあいつが持つてゐる、並々ならぬ力をな

矢城の追及を受け、蒲生はある青年の貌を思い起こすように——蒼い空を仰ぐ。今が戦乱の時代であるとは思えないほどに、その眼に映る景色は澄み渡っていた。

「……なあ、矢城。俺がなぜ、『電光』を創つたと思う」

「あんたじやないから知らねえな。マスコミは口を揃えて、あなたの趣味だと喧伝していたが」

「正解だよ、それもな」

やがて蒲生は、ふつと口元を緩めて——不敵な面持ちで、矢城と視線を交わす。その眼は「黒い月」との戦いより、遙か先の未来を覗いていた。

自分達が消えた先の、未来を。

「……ゲオルギウス。鐵聖將。地球特警。俺達は、絶えず敵を倒すための『兵器』を造り続けてきた。強い侵略者が現れるたびに、より強力な『兵器』を……な」

「……」

「恐らくは『黒い月』を打倒した先も、ずっとそれは続くんだろう。平和つてのは所詮、次の戦争のための準備期間でしかない」

「『電光』なら、その連鎖を止められる……と？」

「敵の眼前で名乗り口上。決めポーズ。そんなもん、非効率極まりねえ。兵器としては失格もいいところだろう。実際、俺の政策にケチを付けてる野党の連中は、そこを槍玉に挙げてきてる」

「……そこまで分かつた上でなら、それがあんたにとつての最適解だつたつてことか」

——特務部隊「電光」。軍の実力組織としては、極めて特殊である彼らは、敵を倒すことを至上命題とする「軍人」と呼ぶには異質な存在だ。

遥か昔の特撮番組のような名乗り口上や決めポーズを経て、初めて状況を開始する。そんな部隊は、未だ嘗て前例がない。だが、蒲生丈太郎という男にとつては、それこそが「電光」に求めた意義だつたのだ。

である。

「國民は……いや、世界の民衆は、いつまでも終わらない戦いに疲れ果てている。より強力な『新兵器』を見るたびに彼らは、ため息をつくのさ。ああ、まだ終わらないんだ……つてよ」

「……非効率を敢えて強調することで、今までと同じ『兵器』であることを否定する。それが、あなたが『電光』に望んだ在り方、ということを何か」

「ガキの頃は、憧れたもんさ。このクソツタrena世の中を吹き飛ばしてくれる、カツコいいヒーローが現れてくれねえかな……つてよ。今が一番、そんな奴らが必要な時なんだよ。それを実現させられるのは、俺だけだつた」

「火鷹太団を拒んだのも、それが理由？」

矢城とヒカリの追及を受け、蒲生は再び空を仰ぐ。かつて対面したことのある、悲しみを知り過ぎた貌を思い浮かべ——彼は、大仰に肩を落とした。

「……『電光』はな、ただの兵器になつちやいけねえんだ。今までの歴史とは違うつてことを、國民に知らしめるための『希望』なんだよ。このクソツタrena連鎖を終わらせて、人々の疲弊を取つ払うための、イカした『正義のヒーロー』なんだ」

「……」

「だからその中に……あいつを入れるわけにはいかねえ。戦うことでしか、自分の正義を証明できねえ奴に電光スースを渡すわけにはいかねえのよ。『兵器のヒーロー』はもう、お呼びじやねえのさ」

——蒲生は『電光』の隊員を選出する際、能力の他にある条件を設けていた。

それは、ヒーローとしての在り方を分かつているか否か……というものが。古き良き特撮のお約束に理解があるか、という奇妙な問い合わせであった。

電光レッドの選考試験を受けた当時、火鷹太団はそれに理解を示していなかつたのである。見敵必殺を鉄則とする星雲特警だつた彼には、特撮のお約束など知る由もなかつたのだ。

——そして彼は、電光レツドの選考から外され。解つている天羽宙が、正式なレツドとなつた。

蒲生は、太団の詳細な経歴を知つてゐるわけではない。「シルディアス星人の災厄」を生き延びた戦災孤児であることと、政府高官に養子であるということまでしか、公式な記録もないものである。

——だが、それでも。奥深く刻まれた悲しみを滲ませる、彼の眼は。蒲生にその過去の傷を悟らせるには、十分だつたのだ。

全てを知つてゐるわけではない。それでも、その眼を見れば過去の痛みを慮ることはできる。だからこそ蒲生は、太団を「電光」には入れなかつたのだ。

「……だいたい俺はなあ、ああいう湿っぽいメンヘラ野郎が一番嫌いなんだ。あいつは森のパトロールにかこつけて、一生自然と戯れてるくらいが丁度いいんだよ」

「素直じやないな、あんたも」

「全く」

——そんな蒲生の不器用さに、矢城とヒカリはほくそ笑む。その部下の反応が気に入らなかつたのか、蒲生は不遜な面持ちで鼻を鳴らしていたが……その口元は、穏やかに緩んでいた。

「事実を言つてるだけだ。……おお、そうだ『電光』で思い出した。最近、旧い悪友の店が面白えグッズを仕入れたらしいんだ。お前も来るか？」

「……仕方ねえな全く。いい歳こいて玩具屋巡りかよ」

「そう言うな、古い付き合いじやねえかよ」

「……義父といい、上に立つ人間に限つて困つた人ばかり。至極、遺憾」

「いい歳こいてそんな趣味だから、理想を捨てないでいられるのさ。ほら、行くぜ」

やがて彼は、子供のような無邪気な笑みを覗かせると——優雅な足取りで、庭園を後にする。その後ろに続く英雄達は、相変わらず自由奔放な防衛大臣の道楽に、苦笑いを浮かべるのだつた。



——そして、火薙太囃が表舞台から姿を消して。特務部隊「電光」の威光が、戦場を席巻する時。

「星雲特警ヘイデリオン」の物語は、幕を下ろし。

「特務部隊・電光ッ！ 状況……開始ッ！」

「特務部隊 電光」の英雄譚が、産声を上げる。

番外編　四季は移ろい、花が咲く

四季という概念は、どの星にもあるわけではない。軸が常に傾いているこの**地球**だからこそ、季節は巡り命が芽吹き、花が咲く。

移ろいの理を持たずして歴史を重ねた、他の惑星においてはその範疇はない。それを意識し得るのは、「あつて当然」の星に生まれた者だけだ。

「そこまでだ、シルディアス星人」

「貴様は！……ええい、**星雲特警**の手先か！」

——生身であれば、目を開くことさえ叶わぬほどの猛吹雪。視界の全てを白く染め上げる、遠い星の雪国の中で。異星人同士が今、対決の瞬間を迎えていた。

鋭利な爪を研ぎ澄ます異形の凶戦士達は、たつた1人で自分達の前に現れた刺客を前に、殺氣を露わにしている。

広大なこの星の海を守護する、仮面の戦士達。「星雲特警」と呼ばれる彼らの中において、ただ1人四季のある**地球**に生まれた少年は。

真紅の鎧と白銀の鉄面に、己の全てを閉じ込めて。蒼い煌めきを放つ光刃剣を振るい、異形の群れに飛び掛かつた。

「皆の者、掛けられいッ！」

「……ッ！」

絶えず吹雪に包まれ、死化粧の如き世界に彩られているこの惑星は、真冬以外の季節を知らない。他の生物では棲めぬこの地は、悪名高い侵略宇宙人の潜伏地としては、格好の**秘密基地**であつた。

その事実を突き止めた少年は、「師」の命じるままに剣を振るい、悪を絶つ。星雲特警が掲げる、絶対的正義の下に。

——だが、それは戦いと呼ぶには、あまりにも一方的で。「虐殺」と呼んで差し支えない、「処刑」であつた。

命を刈り取らんと迫る刃を、紙一重でかわし。刹那に背後を取り、光刃を以て死罰を下す。地に染まる紅い滴りが同胞の末路を語り、他の者達がさらに色めき立つ。

それすらも、腰のホルスターから得物を引き抜く少年にとつては、

織り込み済みのことであつた。防御も回避も忘れ、群がる蛮勇の群れに向けられる光線銃の先は——この戦地に死神を呼び、屍の山を築く。

引き金に指を掛けるたび、閃光が迸り。命を焼き尽くす熱線が、阿鼻叫喚の地獄を生む。

血と闘争を何よりも好み、他者の命を糧として生き永らえてきたシリルディアス星人が、星雲特警という最上位の「捕食者」によつて喰われていく。

間一髪、その中をくぐり抜けた猛者は己の爪を振るい、少年の首を狙うが——軽やかに身を翻した彼は、回避と同時に銃口下部の光刃短剣を、猛者の延髄に突き立てた。

視界の全てが、白く塗り潰されていたはずの極寒の地が。撒き散らされる命の塗料で、紅く染められて行く。

「ぬうツ?! ——がツ!」

その刃には、一点の迷いもない。迫る新手に同胞の遺体を投げ付け、敵方が受け止めた一瞬を狙い——飛び上がつた少年の一閃が、2体纏めて斬り捨てる。

その羅刹の如き戦いは、シリルディアス星人という種を「ヒト」と見做さぬ星雲特警にしか、成し得ない所業であった。

全宇宙の平和と安寧を護る、正義の使徒。それが銀河に伝えられている、星雲連邦警察の勇士——星雲特警の存在意義である。

彼らの行いは、間違いなく正義なのだ。少なくとも、彼らとの対立を避けている、大多数の異星人達にとつては。

「おつ……のれええええツ! 正義を騙る狂人どもがああああツ!」

「——」

吹き荒ぶ豪雪を搔き分け、斬り結ぶ戦士達。最後に残つた悪の異星人と、真紅の剣士は瞬く間にすれ違い——蒼白の光刃が、異形の身体を上下に斬り分けた。

「あつ、が……!」

「……」

あらゆる星々から悪鬼と恐れられる、シリルディアス星人。その雷名

に恥じぬ生命力で、最後の生き残りは体の半分を失いながらも——懸命に地を這い、生き延びようとする。

「嫌だ……！ 死ねない、俺はまだ死ねない！ 俺はまだ、生きて……！」

「……ツ！」

その様はまるで、今まで彼らが殺めてきた、無辜の人々のようであつた。余りに弱々しい、彼の声は聞くに堪えず——少年は星人の上に覆い被さると、鉄面の頭頂から切り離した頭部光刃レーザースラッガーで、その喉笛を搔き斬つてしまふ。

「……かあ、さ、ん」

否応無く黙らされた星人は、泣き喚く暇もなく。そのまま、ヒトのようく涙を流して眠りについた。

「……」

師のように、ヒトでないと思えば。畜生だと思えば、堪えられたはずだつた。

しかし。全てが終わつた後に残る真紅くれなゐの海が、それを許してはくれなかつた。

絶命の瞬間、母を呼んだ星人の嘆きが聴覚に刺さり、離れない。どれほど強い吹雪が来ようとも、その耳鳴りを搔き消すほどには至らなかつた。

感情を持たない仮面の下に、悲痛に歪んだ貌を隠し、声にならぬ慟哭を上げても。彼が遺した、たつた一言が——離れない。

シルディアス星人によつて、家族を失い。生きるために戦う道を、否応なく選ばされた少年の中で。

自身の手で断ち切つた「命」の叫びが、己が味わつた苦しみと重なつてゐることを——彼は、否定出来ずにいたのだ。

一面の雪景色に包まれた、この世界の中で。いつしか少年は眼に映る真紅くれなゐが、自身の鎧なのか、自身が作つた地獄のかすらも、分からなくなつていた。

——それが、2年前のこと。

星雲特警ヘイデリオン——火鷹太団ひだかたろうが今でも見る、悪夢の一つだ。

◇

「ねえ、たろー！　はやくあそぼーよー！」

「はいはい、水遣りが終わつたらすぐに行くから」

四季折々の花が咲く、この星に帰つてきた今も。時折、あの日の夢を見ることがある。

孤児院で子供達と触れ合い、笑い合う平和な日々の中にあつても――

――悪夢はふと、少年の脳裏を過つていた。

だが、鋼の仮面を捨てた今であつても、その身に背負つた業と悲しみを他者に見せるわけにはいかない。遠い星での惨劇など知る由もない幼子達に、かつての星雲特警は笑顔で手を振つていた。

「全く、あの子達また転ばなきやいいけ、ど……」

そして、何者でもないただの地球人として暮らす、彼の目に。花壇の中咲き誇る、真紅の花々が映り込む。

その花言葉は、「眞実の愛」。そんなものからは縁遠い人生を歩んできた少年にとつて、眩しすぎる響きであつた。

(……あつても、いいよな。どこかには、きっと)

それでも、あるわけがない、とは言いたくない。少年はその一心で、蒼く澄み渡る空を仰ぐ。

遠い世界での争いなど、微塵も感じさせない晴れやかな春空。それは真冬を越えた先に待つ、温もりの世界であった。

――そしてまた、季節は巡り。この地球^{ほし}もまた、純白に染まり行く。しかし、もう。悪の血族^{くわなゐ}が絶えた今、そこに真紅が滲むことはない。誰に犠牲を強いることもなく。

四季は移ろい、花が咲く。

特別編 笑顔のために —For Smile—

第1話 正義なき大義

22世紀の空は青く澄み渡り、眼に映る景色からは、過去の爪痕は微塵も窺えない。だが、それは先人達の献身があつてこそその世界である。

あからさまには見えないというだけ。爪痕は、確かに在る。

歴史からそれを知る者も、直にそれを味わった者も、皆等しく生きているこの時代は——この先の未来を分ける、分水嶺であった。

6年前の「シルディアス星人の災厄」が残した、異星人との拭い難き確執。未だ根深いその爪痕は、「友好的な来訪者」との交流においても影響を及ぼしている。

災厄から僅か3年後という頃に現れた二つの種族——アズリアンと、ファイマリアン。

自分達の技術及び能力の提供を対価とし、地球人との交流を求めて現れた、彼らの口から語られた真実は……混沌としていた地球に更なる波紋を呼んでいた。

——シルディアス星人の脅威から地球を救い、正義のヒーローとしての名声を欲しいままにしている「せいうんとつけい星雲特警」。彼らはその圧倒的な武力を以て宇宙の秩序を保ち、悪しき異星人の芽を摘み取る役目を担っていた。

その星雲特警に与する種族であつたはずのアズリアンとファイマリアンは……地球人が知らなかつた、彼らの正体を語つたのである。シルディアス星人を始めとする、敵対勢力に対する無慈悲な虐殺。生命体の兵器利用などの、非人道的戦略。

それら全てを明かされた地球連邦政府は、星雲特警を信奉する民衆に警鐘を鳴らすべく、彼らの発言を公開するに至つた。

——だが、事実としてシルディアス星人の脅威から救われ、大いなる恩義を感じていた人々が、それを容易く受け入れることはなかつた。

それだけではない。彼らの中でも最も強く、地球連邦政府の公表に異を唱えていた勢力が——「ヒーローを愚弄した」として、アズリアンとファイマリアンの排除に動き出したのである。

星雲特警を神の使徒と見做し、彼らの行いは神意に等しきものと疑わない過激派組織——「星雲神理教」。

彼らはアズリアンとファイマリアンを「地球人を洗脳し、神の使いと争わせようと目論む悪魔」であると糾弾し、過激な手段を以て両種族の「肅清」を掲げているのである。

これを鎮圧するべく、地球守備軍は「人類統合軍」として再編され。その新たな軍事組織における精銳部隊「グレイハウンド」は、星雲神理教の武装解除を目標に動き始めていた。

そしてその総指揮を取る矢城正也中将は、星雲神理教に狙われる可能性の高い、ある施設の防衛を部下に命じた。
やしろせいや



真夏の季節における山奥の孤児院は、特に騒がしい。燐々と輝く太陽の下ではしゃぐ孤児達は、暑さに負けじとばかりに遊びまわっている。

動こうが動くまいが結局暑いのだから、思い切り遊んだ方がいい。そんな純粹な動機が、見ているだけでも伝わってくるような光景であつた。

——彼ら見守る大人達の多くは、そんな子供達を温かく見守つているのだが。

「……やかましいガキどもだ。やつてらんねえな、全く」

あからさまに悪態を吐く、火村竜馬だけは。彼らの輪からは遠く離れた納屋にもたれ掛かり、忌々しげに見つめていた。

端正に切り揃えられた黒髪や、筋肉質でありつつもどこか細身なその体躯は、18歳の若者らしい外見であるが——刃の如きその貌を目見れば、「普通」の青年とは掛け離れた存在であることが見て取れる。

グレイハウンドの隊員にして、この近辺の防衛を託された生態強化

兵士である彼は——星雲特警による迫害を受け、この孤児院に身を寄せる「異星人の子供達」を守る使命を帯びていた。

そんな彼が、護衛対象であるはずの子供達に向けて、忌々しげな視線を送っているのには——その過去が関係していた。

6年前に起きた、「シルディアス星人の災厄」。その犠牲になつた多くの民間人の中には、彼の家族も含まれている。

……そのシルディアス星人は星雲特警によつて駆逐され。その星雲特警は、独善的な組織であり。そこから逃れてきた異星人達は、我が物顔で地球上に住み着いている。

そうした時代のうねりを経て、彼の中に残されたのは……星雲特警やアズリアン、ファイマリアンを含む、全ての異星人への忌避感だけであつた。

何の理由もなく、家族を奪つたシルディアス星人も。正義面して、地球人を洗脳していった星雲特警も。被害者面して地球上に居つく異星人達も。竜馬にとつては分け隔てなく、侵略者でしかなかつたのだ。

「や、 やめようよキーユ……」

「大丈夫だつて！ ねーねー、 りょうまもこつち来いよー！ 鬼ごっこしようぜー！」

「……るせエ、 話しかけんな」

「ちえー、 今回もダメかあ。 しゃあねえ、 行こうぜイア」

「……う、 うん……」

そういつた思想は表情にも滲み出でているようで、子供達の大半は彼を避けている。全く彼を恐れず、気さくに誘おうとするアズリアンの少年——キーユのような例外もいるが、それはほんの一握り。

いつも彼の側に隠れ、恐る恐る竜馬を見つめているファイマリアンの少女——イアのような子が、ほとんどなのだ。

浅黒い肌と赤い髪を持つ、アズリアンの少年。白い肌と蒼い髪を持つ、ファイマリアンの少女。対象的な要望を持つ2人の子供達は、躊躇いがちに竜馬を一瞥しつつ——仲間達の輪に戻つて行く。

そんな2人の背を見送る兵士は、不遜に鼻を鳴らして背を向けてしまつた。——6年前、全てを喪つた日の自分と同じ歳である彼らか

ら。

「……ふん」

異星人達がこの星で暮らしていることは、無論気に食わない。星雲特警を英雄と担ぎ上げる、星雲神理教も気に入らない。

だが、何よりも許せなかつたのは、

「……すみません、お仕事の邪魔をしてしまいます。あの子達もどうにか、施設に関わる全員と仲良くなろうとしているんですけど……」

子供達の輪の中心になり、いつも彼らと笑顔で触れ合つて、
用務員の男。
アルバイト

こうして、誰に対しても敵愾心を露わにして、竜馬にさえ、穏やかな眼差しを向ける、この男。——火鷹太ひだかたろう田の存在であつた。

聞けばこの男は、竜馬と同様に6年前の災厄で、家族を失つているという。にも拘らず、確執など感じさせない優しげな貌でいつも、異星人の子供達に接しているというのだ。

自分は未だに、過去の災厄に囚われているというのに。

それが何より、竜馬には解せなかつた。そして、気に食わなかつたのだ。

——幼気な子供にまで、やるせない苛立ちをぶつけて、自分がたまらなく、惨めに見えてしまいそうで。

「……うぜえんだよ。あんな異星人なんかとヘラヘラしやがつて。気味が悪い」

「……あの子達は、あなたが思うような異星人ではありませんよ」「同じだ！ どうせああいう無害そうな顔して、隙を探つてるに決まつてんだよ！ 正義のヒーローを騙つて人類を欺いた、あの星雲特警どもと同じでな！」

「——ならなぜ、あなたはこの任務を引き受けて下さつたのです」

「……っ」

生態強化兵士の膂力で胸倉を掴まれてもなお、太田は澄んだ貌のままである。同じ年とは思えないその佇まいが、竜馬をさらに苛立たせていた。

——何もかも分かつた風に言う、その口振りも。

「本当に、心からそうお思いであるならば……僕達を守るという役目を、引き受けて下さることもなかつたでしよう。あなたも本当は——」

「——そういうところが、一番気に入らねえんだよ!」

「……」

剥き出しの感情で太団を突き放し、竜馬は踵を返して納屋の奥へと消えていく。そんな彼の背を、太団は神妙な眼差しで見送っていた——|。



火の海に包まれた教会が焼け、鉄骨が剥き出しになつていく。落下した鐘の轟音が、この「支部」の終焉を告げる。

その様を見届ける機械仕掛けの武者達は、冷ややかにその末路を眼に映していた。

「当該施設、完全に沈黙。——これより、帰投します」

『了解。……初陣にしては上々だつたな』

彼らはやがて踵を返し、黒煙に穢れた夜空を駆ける。その先頭を翔ぶ、グレイハウンド隊員——くろさきはるお黒崎治夫は、仲間達を引き連れこの場を後にしていった。

——星雲神理教に与する者達が所有する、兵器群。それらを秘匿していた地下勢力との「交渉」は、程なくして武力衝突へと発展した。だが、人類統合軍においても最強と名高いグレイハウンドに、狂気に塗れただけの素人達が敵うはずもなく……結果は、人類軍の完勝に終わつた。

特に——この戦いで初陣を飾り、無数の敵を屠つた黒崎治夫の活躍は目覚ましく。彼の実績は、かの伝説の英雄・矢城正也も認めるほどであつた。

「……あの支部に隠されていた資料から、『教皇』の居場所を割り出せました。……日本、神奈川です」

『不穏分子の分際で、堂々と都会暮らしか。……獅子身中の虫、とはよく言つたものだ』

——しかし。これが前哨戦に過ぎないことは、双方とも理解していた。この戦いで得た足掛かりが、「決戦」へ繋がっていくということも。

『神奈川なら……近辺の孤児院に火村が常駐しているはずだな。あいつにも警戒するよう伝えておけ』

「……火村、ですか」

隊長である矢城の口から出たその名に、黒崎は愛機の鐵聖将——【仁護】の中で眉を顰める。2人は御世辞にも、仲が良いとは言えない間柄であつた。

『……気に入らんか?』

「……あいつの腕は買つて いるつもりです。ただ……異星人の孤児の護衛、という任務に適任であるとは思えません」

異星人という来訪者を一律に嫌い、露骨に感情を露わにする火村竜馬の姿勢は、黒崎としては好ましいものではなく。なまじ実力があり、意識することもあるだけに、そういういた側面が余計に目についてしまう。

そんな竜馬がよりによつて、異星人の護衛任務に就いている。それがどうにも、黒崎には解せなかつた。

『……実力は指折りだが、お前もまだ青いな』

「……どういうことです」

『あいつが憎いのはシルディニアス星人でも星雲特警でもない。……そんな奴らから何も守れなかつた、弱い過去の自分だけだ。本当に異星人そのものを嫌つてるなら、俺の命令でもあいつは聞かなかつた』

「……」

『そんなに心配なら、お前がサポートに回つても良い。……だが、そこまであいつを見損なう必要はないぞ』

その言葉を最後に、矢城からの通信は終了した。だが、彼とのやりとりを終えた後も——黒崎は1人、仁護の中で腑に落ちない表情を浮かべている。

『隊長の仰ることは、いつものことながら解せないわね』

「……隊長から許可は下りてる。火村の様子を見に行くぞ、アカリ」

『……あいつの様子、か……』

鐵聖將【仁護】の統合管制インターフェース——【贊姫】に相当する少女。「アカリ」と呼ばれる彼女は、宿主である鐵聖將の中で怪訝そうな声を漏らしている。

——人に近しい感覚を持ちながら、その生い立ちゆえに人らしくは生きられない。そんな彼女にとつて、地球人以外の異星人を無差別に敵視する火村竜馬という男は、どうにも受け入れ難いものがあった。

元々外向的な人柄でもないが、それを差し引いても竜馬に対する彼女の評価は、芳しいものではない。

「……今は隊長の言葉を信じるしかない。あいつは、私情で命を選別するような奴ではない……と」

『……ええ、そうね』

竜馬という男を知るがゆえに、彼らの声色には陰が滲んでいる。それでも、行かないという選択肢はあり得ない。

彼らを運ぶ【仁護】はやがて、仲間達と別れるように弧を描き……夜空の向こうへ飛び去つて行く。支部を焼き尽くす炎が見えなくなる、その先まで。



五芒星の中央に描かれた盾。星雲特警の紋章である、その印が刻まれた床を中心にして——白くめの狂者達が、縁に広がつていた。

讐言のように星雲特警を讃え、崇め奉る彼らの眼は、ヒトの範疇を超える盲信に満たされている。その様子を玉座から眺める1人の男が、満足げに頷いていた。

艶やかなブロンドの髪を靡かせる、壯年の男性。40代半ばとは思えない程に、その肉体は堅牢に鍛え上げられ、常に張り詰めている。祭服は、内側の筋肉に押し上げられ、常に張り詰めている。

その傍に控える茶髪の男は、30代程だろうか。玉座に君臨する金髪の男以上に、膨張した筋肉の鎧で全身を固めている。漆黒の祭服は隣の男と同様に、膨張しきつているようだ。

「……教皇猊下。北欧方面の支部が壊滅したと、先程連絡がありました。如何致しましよう

「そうですか。……どうやら、異分子共がここを嗅ぎ付けるのも時間の問題のようですね」

教皇と呼ばれるその男は、配下の男を一瞥し——ほくそ笑む。狂気に満ちた彼の眼は、眼前に聳え立つ「星雲特警ユアルク」の立像を映していた。

「……いいでしよう。ヴォザム司祭、各支部に残されている神獣をこちらに取り寄せなさい。この聖域で異分子共を討ち、この星と宇宙に秩序を取り戻すのです」

「……はい」

「それから……異星人アズラが持つ予知能力ノンと開発技術ファイマリアンの回収を急ぎましょ
うか。今ある神器を、さらなる高みへ導くためにも」

「……仰せのままに」

第2話 反吐が出る甘さ

夏休みが近いということもあり、大都市を行き交う人々は誰もが浮き足立っている。その様子をテレビ越しに見つめる竜馬は、外の景色に視線を移し——はしゃぎ回る異星人の子達を一瞥していた。

「……ちッ」

無邪気に駆け回る子供達は、滌刺とした笑顔を絶えず振りまいている。異星人には、この星の何もかもが珍しく見えるのだろう。地球上と異星人の確執など知らない彼らは、争いのない「現代^{いま}」を謳歌していた。

そして——そんな彼らを、どこか羨んでいる自分がいる。それが許せず、竜馬はいつものように不遜な表情での舌打ちを繰り返していた。

——太団は今夜、子供達と行うバーべキューの用意をするために山を降り、街へ繰り出している。

その間のお守りを任せられている身ではあるが……異星人を嫌う竜馬は子供達の輪に入ろうとはせず、施設の窓から遠巻きに眺めるだけであった。

「……！」

だが、そもそも言つてられない時もある。木をよじ登り、折れかかつた枝の上ではしゃぐキーユの姿が視えた時——彼は考えるよりも速く、窓から飛び降りていた。

枝の裂け目に気づかず、興味本位でそこに乗つてしまつたのだろう。そこから先の危難を想定し、竜馬は弾かれたように駆ける。

「キ、キーユ、危ないよお……！」

「へーきへーき！ イアも来いよ、これ樂しつ……!?」

その時が来たのは、間も無くのことであつた。キーユが腰掛け、上下に揺さぶつていた枝は軽い音と共に折れてしまい——バランスを崩した彼は、頭から落下してしまう。

そんな親友の姿が目に映り、イアが声にならない悲鳴を上げた時……だつた。

「あつ……！」

「……」

滑るように真下に駆けつけた竜馬が、颯爽とキューの身体を受け止める。自分を抱える両腕の逞しさに、少年が瞠目する瞬間——彼の視界に、無愛想な青年の貌が映り込んだ。

「あつ……ありがと、りょうま！」

「……気をつけろ、バカが」

辛辣な言葉とは裏腹に、優しくキューを下ろした竜馬は踵を返すと、足早に施設へと引き返していく。

——子供が無事だったことに安堵していた自分の貌を、隠すように。

すると、その時。

「ひ、火村さん、大変です！ ニュース見てください、ニュース！」

「……なんです、そんなに血相変えて」

施設から飛び出してきた職員が、焦燥に満ちた表情で竜馬の前に駆け込んでくる。そのただならぬ様子から、良くないニュースを予感した兵士は、職員が持っていたタブレットを取り——目の色を一変させた。

市街地全体に立ち昇る、破壊の黒煙。鉄塔を溶かし、建物さえも焼き払う火炎の渦。その災禍に包まれた映像に映されているのは、ここからそう遠くない街——太団が買い出しに繰り出している街であった。

これほどの規模で既に被害が広がっているというならば、単なる火事の類であるとは考えにくい。

考えられるのは——やはり、星雲神理教の過激派。先日、矢城隊長から連絡があつた通り……どうやら、この日本に中枢が潜んでいたらしい。世界各地の支部を黒崎達に潰され、ついに尻尾を隠しきれなくなつたか。

「えつ、なになにー！？」

「せんせー、どしたのー？」

「み、みんな早く中に入つて！ 火村さんも早く……早くなんとかし

てくださいよ！」

子供達を施設に誘導しつつ、職員がまくし立てる。その様子を一瞥した後、竜馬は再び走り出した。

向かう先は、施設の外れにひつそりと建つ納屋。

——なぜ、あなたはこの任務を引き受けて下さったのです。

——本当に、心からそうお思いであるならば……僕達を守るという役目を、引き受けて下さることもなかつたでしよう。あなたも本当は

「……うるせえ、うるせえよ。分かつてんだよ、オレだつて分かつてんだ」

絶えず脳裏を過ぎる彼の言葉に、言いようのない苛立ちを覚えながら。乱暴に扉を開いた彼の前には——陸上迷彩に染め上げられた、3・2mの鉄人が跪いていた。

人類統合軍が擁する最新式の量産型鐵聖將——ストライクランサーIII。両肩に4連ミサイルランチャーを、右腕には対レギオンビームブレードを装備した鋼の巨鎧は、主人の前で出撃の時を待ちわびているかのようだつた。

「……気に食わねえんだよ、どいつもこいつもツ！」

それに応えるように——竜馬は鋼の鎧をその身に纏い、生態強化兵士の本懐を遂げる。本来、「持ち場」を離れるのは御法度だが……星雲神理教の暴威を前にして、ただ座していてはそれこそグレイハウンドの名折れであつた。

ストライクランサーIIIを装着した彼は、納屋を突き破り空中へ飛び上ると——街を目指して、一気に駆け抜けて行く。鋼鉄の戦士が音速に達する速さで翔び、木々がその余波に煽られていた。

それから、数分も経たず。嵐そのものと化した彼の眼にはすでに、戦火に包まれた都市が映されていた——。



過去に地球を襲つたレギオンやシルディニアス星人の存在は、現代のバイオウエポン生物兵器にも影響を及ぼしている。

過去——先の大戦で消耗しきつていた戦力を補うため。彼らのよ

うな超生物の遺伝情報を利用し、兵器として「使役」できる人造獣を培養しようという計画が、人類軍の研究機関で検討されていた時期があつた。

それらは制御が難しい上に失敗した際のリスクも大きい、ということで最終的に頓挫したのだが——「人類軍を去った元幹部が、廃棄したと偽つて当時の研究資料を持ち出した」という噂が、まことしやかに囁かれていた。

——そして今その噂は、現実のものとなつていて。



無数の脚と紫紺の体を持つ、醜悪な蜘蛛のような巨大生物の群れが、先ほどまで平和だつたはずの街を死の煉獄に塗り替えていた。

「痛いだろう、苦しいだろう！ そう、それこそが星雲特警への感謝を忘れた貴様らへ下された罰なのだ！ かの神々がこの地球に降臨なされなければ、これ以上の地獄が待つていたことは火を見るよりも明らかであろう！」

「それを知りなおも！ 地球連邦政府は彼らを愚弄し、あまつさえ侵略者と切つて捨てた！ これは、神々への大逆である！」

「よつて我らの眷属たる『神獣』の群れが、その手先である貴様らに誅を下す！ 信ずるべき神を見失った地球連邦を怨み、死に行くがよい！」

——星雲特警に仇なす者は神の敵に等しく、そのような異端者には怪物の餌となるのが相応しい。それが、星雲神理教が高らかに叫ぶ「狂氣」であり。この生物兵器達の、存在理由なのだ。

異形の上に乗り、大仰に両手を広げる白装束の狂信者達。彼らは怒号と共に生物兵器達に指令を与え、泣き叫ぶ市民に容赦なく牙を剥いていた。

彼らは逃げ惑う人々の頭上に強酸を振り撒き、無辜の民衆で死臭の漂う骸の山を築き上げる。それはまるで、星雲特警がいなければあり得た未来を、自らの手で再現するかのように。

「……ッ！」

その中を潜り抜け、常人ならざる身のこなしで生き延びる火薙太団

は。かつての英雄の名を叫びながら、悪業を重ねる星雲神理教の使徒達を目の当たりにして……苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。

やがて——親とはぐれ、すすり泣く幼子を抱える彼を見つけた狂信者が、生物兵器に命令を下すべく片手を上げる。

「愚かな。罪に汚れた小童のために、命を張ろうなどと——!?」

そして子供を抱きしめたまま、この場を脱しようと駆け出した太団に——生物兵器が狙いを定めた瞬間。

「……ピー。ピーと、うるせえ奴らだ」

閃く熱線の刃が、空と共に異形を裂く。狂信者もろとも両断された生物兵器が、体液の飛沫を上げて絶命し、太団の前に崩れ落ちて行った。

その骸を踏みつけ、この戦地に馳せ参じるストライクランサーII I。彼の者の勇姿を仰ぐ太団は、その豪快な拳動から正体を看破する。

「火村さん……」

「……よう、いいザマだな。さつさと片付けるから、ちょっと下がつてろ」

そんな彼を退がらせるように、雄々しい鉄腕を振る瞬間。「異端者」を討つべく群がる邪教の軍勢が、巨鎧を纏う竜馬に飛び掛かってきた。

「——覗えてんだよ、狂人共が」

刹那。踵を返し、生物兵器達に向き直った竜馬は——両肩に搭載された4連ミサイルランチャーの威力を、一斉に解き放つ。

弾頭の濁流が異形の群れを飲み込み、炎ごと消し飛ばしていく。人類にとつての地獄を、異形共にとつての地獄へと塗り潰すかのように。

「平和を乱す正義なんぞ、踏み潰してやるよ。——それ以上の大義でな」

その弾幕を生き延び、満身創痍で迫る邪教の使徒を、ビームブレードの炎熱が焼き切つて行く。過去の侵略者達の惡意を模倣しただけ

の人工物では、人類軍の象徴たる傑作機に敵うはずもなかつた。



戦闘開始から、約10分。それはもはや、戦いにすら値しなかつた。竜馬が駆るストライクランサーIIIによつて、生物兵器の群れは見え無く全滅。

酸と火砲に蹂躪され続け、痛ましい傷跡を残したこの市街地に、ようやく静けさが訪れたのであつた。だが、それで失われた命が戻るわけでもない。

巨鎧の周囲には今も、市民の嗚咽が木霊している。その中には、到着が遅れた竜馬への怨嗟も含まれていた。

「ママあああ！」

「……」

そんな中。太団が抱いていた子供が、母親を見つけたらしく……泣きじやくるように声を上げる。母親の方も我が子を見つけるなり、泣き腫らした貌で太団の前に駆け込んできた。

この襲撃と混乱を乗り越え、ようやく再会を果たした親子。彼らは太団に一礼した後、この場から避難するべく立ち去つて行つた。

——6年前、「シルディニアス星人の災厄」をその身で味わつた2人の男は。去り行く親子の背を、見えなくなるまで視線で追つ続けていた。

キーユやイアと同世代なのであろう、あの子供は……2人のような運命を辿ることなく、家族と巡り会うことが出来た。

「……あなたのおかけですよ、火村さん。ありがとうございました」

「……皮肉にしか聞こえねえっての」

だからというわけではない。わけではないが、それでも。この戦いには意味があつたのだと、2人は信じたかつた。

——しかし。

「……ッ!?」

その「意味」を揺るがす爆音と地鳴りが、彼らの焦燥を煽る。彼らが振り返つた方角は——あの孤児院があつた。

子供達が帰りを待つてゐるであろう、山奥のあの場所から立ち込め

る黒煙。その光景が意味するものが、分からぬ2人ではない。

「——野郎、こつちは陽動かツ！」

「……ツ！」

次の瞬間、太団は素早くその場から駆け出すと——横倒しにされた赤いバイクを起こし、颯爽と跨った。

その行動を目にした瞬間、竜馬は彼の意図を察し、ストライクランサーI—Iの足で行く手を阻む。

「……どこに行く気だよ」

「僕は子供達を助けに向かいいます。火村さんはグレイハウンドの方々を呼んで——」

「ナマ言うのも大概にしやがれ！ 生態強化兵士でもねえ、生身の分際で何が出来るつてんだ！ 生身の分際で……なんだつてそこまで！」

己の危険も顧みず、異星人であろうと分け隔てなく、ただ幼い命の為にひた走る。今もなお過去に囚われている自分とは、何もかもが正反対なその姿が竜馬には嫉ましく……眩しかつた。

「……許し難いことを許せなどと、烏滸がましいことは申しません。僕はただ、今出来ない誰かに代わりたい」

「……！」

「過ちも後悔も、数え切れないほど重ねてきました。……それでも、投げ出せば良かつたと思つたことは一度もありません」

そんな彼の胸中を知つてか知らずか。太団は人間を超越する鉄人を仰ぎ、臆することなく言い放つ。

甘い理想論だ、と吐き捨てるることは容易かつた。綺麗事だと切り捨てることは簡単だった。

しかし、その誹りは現実を突き付けられてなおも、実現しようと足搔く者に向けるべき感情ではない。竜馬は太団の「甘さ」を知ればこそ、戯言と断じることに踏み切れずにいた。

「……どうしてもよ。丸腰で奴らとやりあおうなんてえのは、ただの命知らずだ」

「……」

それまでのような荒々しさの抜けた、穏やかな声色で。竜馬は太団の前に立ち、黒煙が立ち込める山中に視線を向ける。

——そこから飛び出す怪しい影は、鐵聖将に比肩する体躯を誇っていた。星雲神理教が旧式の機体をいくつか鹹獲している、という噂が本当ならば……この先には、鐵聖將同士の戦いが待ち受けていることになる。

「……山のボヤはあいつの仕業だろう。オレは奴を追う、孤児院のことはお前に任せた」

「火村さん……」

ならば人間を超越した者達の戦場に、生身の彼を巻き込むわけにはいかない。竜馬は初めて、「苛立ち」ではない感情で太団の前に立ち塞がつていた。

「……仕方ねえから、今回だけは付き合つてやる。反吐が出そうな、お前の甘さにな」

「……ありがとうございます」

やがて竜馬が纏うストライクランサーⅢⅢは、バーニアを噴かして黒鉛の空へと向かつて行く。星雲神理教の尾を追うその背中を——かつて「地球出身の星雲特警」だつた青年が、見送つていた。「コロル、ケイ……シンシア。君達を犠牲にしてまで……オレ達は一体、何を守つたんだろうな」

その問いに、答えられる者はおらず。彼の呟きは虚しく、喧騒の中に消え行くのだつた——。

第3話 神具の力

市街地から遠く離れた、郊外の山奥。

そこに人知れず建てられた教会があることを知る者は、関係者を除けばいない——はずだつた。今日という日に、至るまでは。

「……どうどう見つけたぜ。ここで決着を付けてやる、星雲神理教ツ！」

火を吐くかの如き怒号と共に。竜馬は両肩に装備された4連ミサイルランチャーを構え、その狙いを前方の機影に向ける。

見慣れないシルエットを持つ、その機体の中心に——照準が定まった。

「……ツ!?

だが、それまでだつた。竜馬は大義を成すための弾頭を撃てぬまま、対象の機影から照準を外してしまう。

狙いを拡大^{ズーム}した先に映された、子供達の影——キーユとイアを見つけた瞬間、ここで撃墜するという選択肢は潰えてしまった。

——その一瞬の躊躇いを突いて。2人を抱える謎の鐵聖将は、瞬く間に旋回し光線砲を発射する。

「がツ——！」

人を撃つことへの迷いはもちろん、微かな照準のブレさえ感じさせない冷徹な殺意。その鋭利な光が矢のように閃き——ストライクランサーⅢⅢの右肩を貫いていく。

(こいつ……鹵獲機、なんかじやねえツ!)

人類軍の——地球人の技術とは似て非なる光熱の一閃。その「力」の奔流に「鐵聖將」にはないものを感じた竜馬は、傷ついた機体を引きずるように回避に徹する。

だが、手負いな上に戦闘経験も浅い新兵では、未知の攻撃を捌き切ることなど出来ない。光線砲をかわそようと——生き抜こうと足搔く彼を嘲笑うかのように、彼の者が放つ閃光が唸りを上げる。

「がツ……ああああツ！」

矢継ぎ早に放たれる光線砲の連射は、ストライクランサーⅢⅢの

装甲を容易く抉り——空という戦場から、追放してしまう。やがて森林の中へと墮ちて行く、鋼鉄の巨鎧。爆炎に飲まれ、地に向かうその無残な姿に——ただ見ているしかない子供達は、声にならない悲鳴を上げるのだつた。



「いいザマだな、火村」

「……オレを笑いに来やがつたか」

「それだけの為にいちいち動くほど、暇人になつた覚えはない。お前とは違つてな」

「けつ、お高くとまりやがつて」

それは、火鷹太団を拒絶していた過去の自分への、意趣返しのようであつた。

森の中に墜落し、大破炎上するストライクランサーIII。その機体から満身創痍の彼を救出したのは——仲が良い、とは口が裂けても言えない「同期」であつた。

グレイハウンドの隊長にして、人類軍を代表する最強の英雄——矢城正也。その生ける伝説に見出され、【仁護】を託された新進気鋭のトップエース。

それが竜馬を見下ろし、歯に絹着せない言葉を放つ——黒崎治夫という男であった。彼と共に【仁護】を制御している【贊姫】——アカリも、同じ感想なのだろう。

何も言つては来ないが、浴びせられている冷ややかな眼差しは……黒崎1人だけのものとは思えない。

「当たり前の人間」のように生きることが出来ない、自分への劣等感を抱えている彼女だからこそ。

異星人でありながらも、この地球の者として懸命に生きようとするアズリアンやファイマリアンを嫌う竜馬を、許すことが出来ないのだ。

「……おい、傷が余計に開くぞ。死にたくなければ、大人しく——」「んなわけに行くか。……約束したんだよ、ちゃんと守つてやるつてな！」

「――」

しかし、彼らはまだ知らなかつた。火村竜馬という男がすでに――自分達が思うような差別主義者ではなくなつていていたことに。

黒崎は、異星人を忌み嫌う竜馬という男をよく知つていた。知つていたからこそ、その言葉に衝撃を受け、足を止めてしまう。

彼はその間に、鮮血が滴る胸の傷を抑えながら――己の血で足元を濡らし、歩み続けていた。身を引きずるように進む彼は、体ひとつで『教会』を目指している。

「……そんな体で何が出来る。大人しくここで待つていろ、後は……」「うるせえッ！　あいつらが……ガキどもが、助けてつて『ツラ』してたんだよ……！」

「……」

黒崎は竜馬を嫌つてはいるが、その一方で彼が持つ実力そのものには一目置いていた。その竜馬が、人質を取られていたとはいえ一方的に敗れたとあつては――今までと同じ相手だとは思えない。

その威力を味わつてなおも、体ひとつで乗り込もうとする彼の姿を目撃した黒崎は、僅かな逡巡を経て。【仁護】の手を翳し、彼の行く手を制止する。

「……2度も言わせるな。俺達はお前を笑うためにわざわざ、ここまで来たわけじゃない

『ここから先は……私達が引き受けるわ』

「……お前、ら……」

そんなに死にたいなら好きにしろ、と切り捨てるのは容易かつた。今までと変わらない竜馬が相手なら、そう言つていただろう。

だが気がつけば黒崎は、彼を死なせまいとその鉄腕で制止している。もはや彼の中での竜馬は、今までと同じではなくなつていたのだ。

程なくして黒崎とアカリは、竜馬を置き去りにして森の外へと飛び出して行く。星雲神理教の首脳部が棲まう『教会』を目指して。

「……ざつ、けんな。そいつは……オレの仕事なんだつづの……ツ！」

グレイハウンドにおいても名うての黒崎とアカリなら、何も心配は

ないだろう。彼らの言う通り、後は任せておけばいい。

——のに。火村竜馬という男は、彼らに「借り」を作ることを良しとせず。文字通りの血だるまになりながらも、飛び去る【仁護】を追うように森の中を進み続けて行く。

そして、その姿は。彼自身が「氣味が悪い」と吐き捨てていた、火鷹太図の生き様そのものであつた。



星雲特警によつて救われたこの星は、彼らあつての秩序によつて守られている。彼らはいわば神が遣わした正義の使徒であり、地球の民は皆、彼らを敬い崇めなければならない。

——それが6年前、シルディアス星人ととの戦いで星雲特警ユアルクに救われた、元人類軍将校の思想であつた。

「ゾデュア教皇。異分子共がここを嗅ぎつけたようです」

「……どうどう来ましたか。ヴォザム司祭、一番槍は任せましたよ」「ハツ、仰せのままに」

かつての部下は、教団の重鎮となり。天から齋された「神具」をその身に纏い、この場を後にして行く。異分子への裁きを下すためにその生を受けた、「神獣」の群れを引き連れて。

その背を見送つた教皇——ゾデュアは、正面に聳え立つ神の使徒の像を仰ぐ。

雄々しく佇む、その像の背後には。この星を救つた英雄を彷彿させる、蒼き装甲に包まれし巨鎧が控えていた。

『りょう、ま……』

『たす、け……』

巨鎧の両肩から、子供達の呻き声が聞こえてくる。喧騒と共に司祭達が去つた今、鉄の塊に閉じ込められた彼らの苦悶の声だけが、この空間に響いていた。

「……この『神具』には、ファイマリアンの技術も使われていますからね。『神具』が持ち得る本来の性能を余すところなく活かし、異分子共を射つには……その情報を保有している個体の『記憶』を、見せて頂かなくてはなりません」

右肩に封じられた蒼い髪の少女——イア。

「……それに。アズリアンの予知能力があれば、彼らの『先』を読むことも出来ますからね。あなた達にはこの『神具』をより高みへと導くための、人柱になつて頂きます」

左肩に封じられた赤い髪の少年——キーユ。

「……星雲特警に仇なす『侵略者』にしては、破格の待遇でしよう?」
鐵聖将とは似て非なる、蒼き巨鎧に幽閉された2人の少年少女に、
教皇と呼ばれる男は冷笑を浮かべる。

ヒトとしての情が窺えないその眼は、かつて滅びたはずのシルディ
アス星人を幻視しているかのようであつた。

第4話 祓

一見すれば、山奥にひつそりと建つ「教会」でしかないその場所だが——礼拝堂から続く地下通路の先には、星雲神理教の武装施設が広がっている。

【仁護】を纏い、その最奥を目指す黒崎とアカリを待っていたのは、星雲特警を絶対神と崇める狂信者達の出迎えであつた。

彼らが「神獣」と称する生体兵器のプラントであるこの空間を、埋め尽くすほどの多勢。その筆頭に建つ深緑の巨鎧が、銀色の侵入者と真っ向から対峙していた。

「この宇宙に平和と秩序を齎す、星雲特警に弓引く不届きな異分子よ。この司祭ヴォザムが、神に代わり裁きを下す」

「……言いたいことはそれだけか」

『やはり、対話の余地はないようね』

腕部一体型のアグニブレードを構え、鐵聖将……らしき機体と相対する【仁護】。その中で黒崎は、得体の知れない相手の姿を凝視していた。

鐵聖将と同格——3m級の体躯でありつつも、その独特な装甲や顔面のデザインからは「地球製とは異なる文明」を感じさせる。さらに右手に握られた大型光刃剣や、トサカのような形状の頭頂部は——星雲特警の共通装備「コスマアーマー」を彷彿させていた。

人類軍から鹵獲した鐵聖将の外見を、星雲特警に似せて改修した……とも考えられるが。黒崎としてはそんな見掛け倒しだけが、この「異物感」の理由だとは思えなかつた。

（火村の奴が、単なる鹵獲機風情に遅れを取つたとは思えん。……やはりあの機体、單なる鐵聖将の類ではないな）

「……」の巨鎧が気になるか。当然だろう、なにせこれは貴様ら人類軍には知る由もない——

そして、その思考を。

「な……ッ！」

「現実」を以て、断ち切るかの如く。音速の次元^{はや}さえ穿つ疾さで、巨

鎧の刃が肉薄してきた。

「——眞の正義。『星雲特警』の新たなる『象徴』なのだからな」
紫紺に輝く光刃が閃き、【仁護】に迫る。思考を伴わない「反射」だけを頼りに、アグニブレードでその一閃を斬り払つた黒崎は——かつてないスピードによる接近戦を瞬時に体感し、息を飲んでいた。

そしてその緊張は、【仁護】を通して【贊姫】^{アカリ}にも伝わっている。

「な、に……!?

『使い手、コイツは……!』

そう。この機体は竜馬と黒崎が感じた通り、既存の鐵聖將を利用した「鹹獲機」などではない。

星雲連邦警察の勢力圏から離脱し、地球人に帰化したアズリアンとファイマリアンに圧力を掛けたため。秘密裏に星雲特警が、自分達を支持する星雲神理教に貸し与えた新型強化外骨格——「コスモアーマーI-I先行試作型」なのだ。

元人類軍の生態強化兵士でありながら、自分達に心酔してもいる星雲神理教の幹部達は、星雲特警にとつてはこれ以上ないほどに有用な「現地協力者」だつたのである。

「弱者たる地球の民は歴史の中で、多くの災厄に苦しみ……散つてきた。魔王、レギオン、ヤマタノオロチ。ドウクナス星人、そしてシリディアス星人……」

「……」

「その全てに勝る災厄をも打ち払う、神の如きこの力を振るう。それが許された我々星雲神理教こそが、地球の命運を預かる『正義』そのものなのだ。卑しく利権にしがみつく、人類軍の猿どもには分からぬいだらうがな」

「……」の星のユダと成り果てた貴様らが、偉そうな口を叩くな

コスモアーマーI-I先行試作型。その全貌が判明したわけではないが、今の太刀合わせで「おおよそ」の経緯を推し量ることは出来る。

星雲特警の力を借り、自分達が思い描く「正義」を執行するためならば、如何なる犠牲も厭わない星雲神理教。その極地を垣間見た黒崎は、昂ぶる感情を押さえ込むように、アグニブレードの切つ先を震わ

せていた。

「……なるほどな」

すると。剣呑な雰囲気に包まれた、この戦場の空気が。

ふと響き渡つたその一声で——さらに張り詰めたものへと変貌する。

『姉さん、どうして……！』

『新兵だけに任せんには、少しばかり重過ぎる。……それが、隊長の

……使い手の判断』

振り返つた先に在る光景に、黒崎は息を呑み。アカリは彼の胸中を代弁するかのように、言葉を漏らす。

その問いに答えたのは、【仁護】の背後に現れた瑠璃色の鎧武者——の、中に居る【贊姫】であつた。人類の希望を背負う伝説の鐵聖将が、この地に顕現していたのである。

矢城正也中将と、その相棒であるヒカリが操る決戦兵器——【光楯】が。

「隊長……」

「お前らがそこまでやる気になつてゐることは……余程、火村の奴に焚きつけられたらしいな。言つただろう？ 見損なう必要はない」と

「……」

かつてレギオン大戦に終止符を打ち、この地球に平和と栄光を取り戻した救世主。その手が時代を担う若人の肩に乗せられた瞬間——英雄の眼差しは、目前の敵勢を射抜いていた。

「……いい機会だ、あの未確認機はお前にくれてやる。データにない相手と戦えないようでは、グレイハウンドは務まらん」

「……了解」

「見たところ、俺達が知る鐵聖将とは違うようだが——誰が相手だろうと、俺達の任務に変わりはない。周りの雑魚共は、俺達で掃除しておいてやる」

鞘から抜き放された大太刀が、真紅の輝きを放つ。数多の侵略者を討ち、英雄の名をこの地球上に知らしめた一振りの「伝説」が、狂信者

の尖兵達に向けられていた。

本来、戦場において「絶対」と言えるものなど存在しない。それは、死地に立つ兵士が考えてはならない概念である。

だが黒崎は、そうと知りながら。

紅い切つ先を神獣達に向ける【光楯】の背中に——許されざる「絶対」を感じていた。

「……さつさと終わらせて、倉城のジジイに晩飯の一つでも奢らせようぜ」

『賛成、天然物の高級肉を所望』

「……相変わらずだな、お前も」

人類軍の、絶対なる勝利を。



星雲特警を絶対の正義と掲げ、人類軍の使者に牙を剥く異形の群れ。その狂気に切つ先を向ける2機の鐵聖将は、この「本部」を「戦場」に塗り替えていた。

「……ハア、ハアツ……あいつら、狭い地下で無茶苦茶やりやがって……！」

——物陰に隠れながら、その激戦区を搔い潜る火村竜馬は。頭上を飛び交う熱線と銃弾の下を、這うように進み続けて行く。

「神獣」を培養するプラントであるこの地下施設は、入り口である「教会」の外觀からは想像も付かないほどに広大である、が——それでも3m級の鉄人達が雌雄を決する場としては、些か狭い。

狭いということはそれだけ安全な場所が少ないとということでもあり、身一つでここまで潜入している竜馬は、絶えず巻き添えの危険に晒されていた。

それでも、彼は退かない。キーユとイアはあの時確かに、自分に助けを求めていた。黒崎とアカリが戦っている、あの謎の敵機に捕まっていた彼らは——幼気な眼差しで、竜馬を呼び続けていた。

その光景は、まるで。6年前の災厄で、何も出来ず助けを求めるばかりだった、幼き日の自分を見ているようだつたのだ。

どれだけ泣いても、叫んでも。助けなど来ないし、大切なものも守

れない。だから自分の力で自分を守り、救い続けるしかないのだと、かつての少年は生身を捨てて生態強化兵士となつた。

——だがそれは、立ちはだかる現実に折り合いを付けるための、後付けの理由でしかない。本当のことは、ずっと前から分かっている。自分のような思いを、未来に残してはいけない。こんな悲しみは、自分が最後にしなくてはならない。……この先を生きて行く子供達には、せめて笑顔でいてほしい。

荒んだ世界に擦り切れて、捻ぐれて、ずっと目を背けてきた本当の「理由」。自分を見つめる子供達の眼を通して、それを思い出してもつた竜馬は。

「……待つてろよ、キーユ。イア」

痛みも、恐怖も、かなぐり捨てて。ただ愚直に、助けを待つ過去の自分に、向き合おうとしていた。



「ここは……」

大乱戦の猛火に包まれた、プラントを抜けた先。そこには、星雲神理教によつて鹵獲された兵器群が格納されていた。

広大な兵器庫であるその場所へ辿り着いた竜馬は、狂信者達の手に落ちた兵器達を静かに仰ぐ。この場に集められた鐵聖将や重火器等は全て、旧時代に運用されていた「型落ち」ばかりであつた。

「こんな骨董品で人類軍に勝つ気だつたのかよ、あいつらは。つくづく分からねえ連中——ツ！」

その兵器群を見つめる竜馬が、ふと零した時。彼の第六感が、鋭い眼差しを後方へと向けさせる。

「——分かる必要などありませんよ。ここで死ぬ貴方には」

そうして振り返つた先に、待ち受けていたのは。蒼い輝きを放つ、鐵聖將——ならざる者であつた。

莊厳なる「教皇」の玉座。その頂から歩み下りしていく壯年の男——ゾデュアは、階段の終わりに待つていた蒼鋼の鉄人を見つめている。やがて、鉄人の隣に立つた「教皇」——この星雲神理教の頂点に君臨する男は、穏やかな貌に狂氣を宿して。招かれざる客である竜馬に

対し、一礼して見せた。

「遠路はるばる、ご苦労でしたね。……身一つでここまで来るとは、よほど敵性異星人に肩入れしたいと見える。地球人の風上にも置けぬ、叛逆者達よ」

「……散々世間を引っ搔き回しておいて、どのツラ下げて抜かしてやがる。あいつらはどうした！」

「あいつら？」

「キーユヒイア！　てめえの部下が孤兎院から攫つた、アズリアンとファイマリアンのガキだ！」

「……ああ、なるほど」

一方、子供達を攫われた怒り故に、竜馬は鬼気迫る表情でまくし立てる。そんな彼の怒号を嘲るように嗤うと、ゾデュアは隣に聳え立つ「コスモアーマーII先行試作型」を一瞥した。

伝説の英雄「星雲特警ユアルク」を模した立像。その傍らに控えている鉄人は、かつての英雄を想起させる蒼い装甲に包まれている。

「なッ……！」

「彼らなら、ここに居ますよ」

——両肩のアーマーに「内蔵」された少年少女の姿が、一見すれば優雅にも見えるこの機体の「狂氣」を如実に物語っていた。

「てめえ……何のつもりだッ！　正義を掲げる星雲神理教様が、堂々と人質作戦つてか！」

「そんな下らない理由で、敵性異星人をわざわざ……崇高なる我が神殿に招くものですか。彼らは、この『神具』を完成させるための『人柱』なのですよ」

「……人柱、だと……？」

「我が主……星雲連邦警察より授かりし、この『神具』ですが。駆動機構の一部には、離反する直前まで主に協力していた、ファイマリアンの技術が使われていましてね。『神具』が持ち得る真価を發揮するためには、地球文明に勝るその知識を継承している彼女が必要なのです」

「……！　それで記憶を覗き込むために、イアを……！」

「優れた予知能力を持つアズリアンの少年も、『神具』の完成に一役買つてくれましたよ。全てを穿つ速さと火力を以て敵を制圧する、この『神具』にとつて……相手の動きを読める力の存在というものは、大いに役立ちます。地球への帰化を望むのであれば、相応の禊は必要でしよう？」

「……ツ！」

混濁する意識と、密閉された鉄人の肩部の中で。朦朧とした瞳に竜馬を映し、助けを求めて手を伸ばす子供達。どうやらあの機体は、体内に閉じ込めた者の記憶や能力を、自分のものとすることが出来るらしい。

その景色が——竜馬を、さらなる激情へと駆り立てる。一方ゾデュアは、あくまで災いを呼ぶ敵性異星人^{アズリアンとファイマリアン}共を救おうとする彼の貌に、侮蔑の表情を向けていた。

「……この星を脅かす悪鬼を、せめて意義ある存在に祀ろうというのですよ。その慈悲がわからないと?」

「分かつてたまるかよ……！　そんなガラクタのために、ガキを利用して何が正義だツ！」

「ガラクタ？　この『神具』が……コスモアーマーIIが、ガラクタですと？」

「……コスモアーマー、II……だと？」

彼の発言から察するに、やはり竜馬が睨んだ通り。あの機体は、既存の鐵聖将を改修しただけの見掛け倒しなどではない。

星雲連邦警察が彼らに絡んでいたとするならば……最新銳機であるストライクランサーIIIの装甲を容易く破った、あの威力にも説明がつく。竜馬は、この星に「正義」を翳していたはずの星雲特警を見せた「馬脚」を前にして——血が滲むほどに唇を噛み締めた。(少なくとも……貴様らを信じていた民衆にとつては、間違いなく『ヒーロー』だつたろうにツ……)

「……ならばその『ガラクタ』を以て、貴方^{じんるいぐん}の全てを否定してご覧入れましよう」

彼が抱える歯痒さなど、気にも留めず。ゾデュアは祭服を翻し、蒼

き異邦の鉄人をその身に纏う。

『りよ、うま……！』

『た、すけつ……！』

「——そうせい装星」

子供達の叫びをかき消す、眩い電光。その煌めきと共に装着を終え、人類軍に立ちはだかる彼の者は——「星雲特警ユアルク」をさらに強く想起させる、翡翠に輝く大型光刃剣を振り上げていた。

「……ッ！」

血塗られた歴史を背負いし、かつての英雄を彷彿させる蒼き巨鎧。その機体から放たれる殺意を肌で感じ取り、竜馬は咄嗟に兵器群の影に飛び込む。

次の瞬間、大型光刃剣の一閃が床に叩き込まれ、辺りの鐵聖将や重火器が衝撃で吹っ飛ばされて行つた。

——如何に生態強化兵士といえど、体一つ……それも満身創痍の身で、鐵聖将に相当する超兵器の一撃をかわせるはずがない。

敢えて竜馬をいたぶり、じわじわと殺して行こうという、教皇の魂胆が透けて見えるようであつた。

(……野郎。グレイハウンドをナメてる、痛い目に遭うぜ)

その意図を察した上で、戦車や戦闘機といった旧時代の兵器に身を隠す竜馬。彼は「この場で使える有用な兵器」を探し、辺りを見渡していた。

そして——間も無く。彼は自身に最も適した、新たなる「相棒」を見出す。

弾かれたように駆け出した彼が、迷彩色の巨鎧に手を伸ばしたのは、その直後であった。

『あぐううつ！ りょう、まあ……！』

「……く、ふふ。見える、見えますよ愚かな人類軍ツ！」

それから、僅か数秒後。

アズリアンであるキーユの予知能力を頼りに、物陰に隠れ続けていた竜馬の「出方」を看破したゾデュアは——彼が飛び出してくるであろう、方角へと視線を移し。

「……どこに隠れ、どこから狙おうと同じことですよ。アズリアンの予知能力を得た、このコスマーマーイーの前では——ツ!」

言い終える間も無く、蒼き巨鎧の顔面のみに、鋼鉄の足が炸裂する。

ゾデュアの迎撃よりも疾く、その頭部に飛び蹴りを叩き込んだのは——この倉庫から竜馬が発見した、旧式の量産型鐵聖將「ストライクランサー」であつた。

「……いいねえ。IIIより、こっちの方がしつくり来るぜ」

30年以上も前の機体でありながら、最新鋭機とも渡り合う「骨董品」。その機内でほくそ笑む竜馬の眼前で——コスマーマーイー先行試作型の蒼い巨躯が、轟音と共に転倒する。

「……き、さまッ……！」

「キーウの予知を借りておいて、その程度の反応速度じやあ宝の持ち腐れだぜ。どんなに良い機体に乗ろうが……乗り手が雑魚なら、この程度が限界さ」

肩部には掠りもせず、ダメージが乗り手にのみ向かう急所だけを狙つた蹴り。その一撃を「人類軍」の「旧式」に浴びせられ、怒りに打ち震えるゾデュアに対し——烈火の如く猛る若き兵士は、巨大な野戦刀の切つ先を向けるのだつた。

「……覚悟が違うんだよ。6年前に地球人を見限り、星雲特警に尻尾を振った貴様らと。この星を信じ続けた、オレ達人類統合軍はなツ！」

第5話 愚者の炎

それはもはや、「戦い」と呼ぶに値する内容ではなかつた。言うなれば、「裁き」。

圧倒的上位に君臨する者が、付け上がつた愚者に下す「制裁」のそれである。

「馬鹿、な……！」星雲特警により斬された、この『神具』が……！」「……そんな安っぽい神に、魂を売った貴様には似合いの格好だ」翡翠の装甲はそのほとんどを剥がされ、内部の機構が露出するほど損傷している。激しいダメージにさらされ続けていたコスモアーマーII先行試作型は、英雄の後継者たる【仁護】の前に膝をついていた。

それはまるで、許しを請うているかのように。

だが、ヴォザムはまだ勝負を捨てていない。消えかけていた紫紺の大型光刃剣が、息を吹き返し眩い閃光を纏う。力尽き行く炎が、最後の輝きを放つように。

起死回生を狙う、至近距離からの刺突。グレイハウンドの精銳でさえ、その一閃をかわすのは困難であつただろう。

——黒崎治夫とアカリ。そして、【仁護】が相手でさえなければ。「な……ッ！」

銀色の鎧武者は、一瞬にも満たぬ刹那の中で。紫紺に光る巨大な刃を、最小限の動作を以て回避していたのである。

機体の向きと首を、ほんの僅か傾けるだけ。大型光刃剣の高熱をかわす、たつたそれだけの動きで——【仁護】の機体は、ヴォザムの不意打ちをかわしてしまつたのだ。

そして、一切の隙を見せないその回避は——避けられぬ「反撃」の予兆でもあつた。

アグニブレードによる袈裟斬りが、すでに損傷が激しい先行試作型を襲い。剣を握る翡翠の腕が、斬り落とされていく。

もはや、狂信者に抗う術はない。誰の目にも明らかなほどの、完勝であった。

「……勝負あつたな。大人しく投降すれば——！」

「——ぬがああああツ！　主よ、我らに光をおおおツ！」

しかし。ヴォザムは腕を斬られながらも、なお屈することなく【仁護】に飛び掛かる。それが自爆による心中を狙つたものだと氣付いたのは、迫る翡翠の機体が妖しい光に包まれた時だつた。

『——使い手ツ！』

「くツ！」

【光楯】の系譜に連なる鐵聖将。その機体に秘められしボテンシャルを武器に、黒崎は一気に後方へ退避する。爆炎の中に崩れ行く異星の使いが、この決闘の終焉を告げているようだつた。

「機密保持を優先しての自爆装置とは……随分な『正義』を掲げたものだな」

『……消化不良ね。まるで戦つた気がしないわ』

「本来、俺達の役目は子供達を助けに来たあいつのサポートだ。こんな地下施設で破邪武装なんて使つてみろ、何もかもが跡形もなくなる」

『……それもそうね』

ここまで来た限り、孤児院から攫われたという子供達の姿は見えない。恐らくこの先のフロアに、子供達と——星雲神理教の頂点に立つ【教皇】が待つてゐる。

ヴォザム司祭との一騎打ちを制した黒崎とアカリは、さらに奥のエリアへと続く扉へと視線を向けていた。

「……さて。あいつは上手くやつてるかな」

『……使い手。やはり、「彼」に気づいていた』

「お前と組んでから、もう隨分と経つがな。部下の事が分からなくな
るほど、耄碌した覚えはねえよ」

——その一方。【仁護】の背後には、異形の骸による「山」が築かれていた。人類軍の亡靈とも称するべき「神獣」達が、【光楯】の振るう大太刀の鋒と成り果てていたのである。

【仁護】にしても【光楯】にしても、その気になりさえすれば、このような地下施設など一瞬で塵に出来る。今この地下に子供達が……

火村竜馬がいるからこそ、彼らは最小限の武装で鎮圧に当たっているのだ。

『戦闘中の地下施設を、装備もなしに通過するなど愚の骨頂。まるで猪』

「……どうう？ だから任せたんだよ。護るべき者の為なら、そんな無謀でもやり通せるあいつにな』

「神獣」を率いる星雲神理教の手先と、圧倒的な戦力を誇る2機の決戦兵器。狭い地下施設で繰り広げられていたその激戦の中を、身一つで掻い潜っていた無鉄砲な部下を——矢城正也は確かに見送つていた。

『……』

そんな「使い手」の剛毅な姿勢に。【贊姫】として彼を支え続けてきたヒカリは、【光楯】の中で人知れず口元を緩めるのだつた。



狂信者が掲げる正義の「炎」が、為す術のない弱者に災厄を齎している。孤児院を飲み込む黒煙が天を衝き、空を仰ぐ人々を脅かしていた。

絶対的正義の下に命を選別する星雲神理教の魔の手は、異星人でしかない市井にまで及んでいる。

「……はツ！」

その惡意を象徴する、大火災の渦中から。子供達を抱く青年が黒髪を靡かせ、灼熱の中から飛び出してくる。

彼が振り返った先に広がる業火の渦は、宇宙難民が身を寄せ合う通り所を、跡形もなく焼き尽くそうとしていた。

「あ、ああ、なんで、なんでこんなツ……！」

「……』

職員達はその光景を前に膝をつき、子供達は互いに寄り添いながら啜り哭く。そんな中、涙ぐむ幼子を抱く火鷹太~~団~~は——ただ1人、不屈の色を湛えた眼差しで、立ち昇る炎を仰いでいた。

(……火村さん……どうか、あの子達を……！)

本来ならこの場にいるはずで、今ここにはいない2人の子供達。彼

らの命運を背負う火村竜馬の、勝利を願う。

かつては最強と星雲特警とも称された彼に出来ることは、もはやそれしか残されていないのだ。

——1年前の自分には救えなかつた笑顔を、未来を守つてくれると信じて。



人類軍の主力兵器であり、機体やパイロット次第では一騎当千の威力にもなる鐵聖将。その力は地球を辺境惑星と見做していた星雲連邦警察も注目しており、情勢によつては脅威にもなりうると危惧していた。

その懸念は、約3年前にアズリアンとファイマリアンが星雲連邦警察から離反し、地球に帰化を求めた事でより強いものとなり——組織内においても、地球連邦政府に彼らの「引き渡し」を求めようとする声が高まつてゐる。彼らの「力」が鐵聖将に使われる前に、摘み取るべきだと。

そこで星雲連邦警察は、アズリアン及びファイマリアンの監視を目的として、彼らに対する抑止力となる「新兵器」に着手した。それが地球の鐵聖将を基に生み出された、コスマオーマーIIなのである。しかし同機はまだ試作段階である上、すでに地球上では星雲連邦警察が危惧していた通り、アズリアンとファイマリアンの技術を得て進化した新型鐵聖将【仁護】のテストが始まつていた。ファイマリアンが残した過去の技術だけでは、完成には間に合わなかつたのである。そこで彼らは早急に圧力を掛けるべく、自分達を除く全異星人を迫害している過激派組織——星雲神理教に、天啓と称して試験運用を命じた。

異星人への憎悪。星雲特警への盲信。レギオンやシルディアス星人の脅威を味わつていながら、アズリアンとファイマリアンを保護する人類軍への反感。その全てを抱えて燐つていた彼らに、全ての望みを叶え得る「力」を授ければ——今のような事態に発展することは、目に見えていた。

地球が敵となり得るならば。星雲連邦警察にとつての、第2のシル

ディアス星人になり得るならば。手段の如何を問わず、その芽を根刈り摘み取る。

それが宇宙の「正義」が掲げる、地球人類への答えであった。

——その尖兵である教皇ゾデュアの凶刃が、絶え間なく人類軍の兵を斬り裂いていく。中にいる乗り手ごと破壊されていくストライクランサーは、血と燃料で紅く染められていた。

超人的な身体能力を持つ異星人による運用を前提とする、コスマモアーマーII先行試作型は、ブランクがある生態強化兵士が使いこなすには荷が重い機体である。

……だが、それでも。ファイマリアンの頭脳とアズリアンの能力を吸収し、本来の性能を発揮し得る状況を整えた今なら。機体の速さに慣れさえすれば。

「よく分かつたでしょう！　これが——神の！　星雲特警の！　正義の力なのですよッ！」

「……か……ッ！」

型落ちの量産機如きに、遅れを取ることなど、万に一つもあり得ない。

出血多量か、燃料不足か。片膝をつき、身動きが取れなくなつたストライクランサーを、先行試作型の蒼い足が幾度となく踏み付ける。

——最初の勢いのまま、ゾデュアが機体に慣れる前に完封することも不可能ではなかつた。が、鎧の両肩に人質を閉じ込めている彼を倒すには、内部にいる乗り手を直接攻撃する……つまりは中心部にのみ攻撃を加え続けるしかない。

しかしその部位は、先行試作型のボディにおいて最も強固な装甲に覆われており……型落ちの量産機でしかないストライクランサーの武器では、速やかには破れなかつたのだ。

最初の一撃で不覚を取つたとはい、ゾデュアもかつては一線級の生態強化兵士。旧式の機体に乗る若手相手に、いつまでもやられるような弱卒ではない。

結局、竜馬は先行試作型の装甲を破り切る前に、機体に適応したゾデュアに反撃され——地に伏したのである。

文字通りの「血だるま」と成り果てたストライクランサーは、崩れるようにうつ伏せになり。勝利に酔う教皇の蹴りを、その背に受け続けっていた。

——もはや。機体の中で泣きじやくる子供達の嗚咽など、誰にも届かない。

(……これで、いいのか。こんなのが……6年前の、繰り返しじやないのか……!)

しかし、それでもなお。全身の感覚を失い、鮮血に身を汚し、生きているか死んでいるかも分からぬままになりながら。

火村竜馬はこの期に及んで、眠ることを拒否していた。

思い出すのは、6年前の災厄。家族も友人も炎に消え、何も出来ず逃げ惑い、死に怯えるだけのひと時。

あの日のことを思い出す度に、冷えた体が熱を帯び、芯の奥深くから激情が衝き上げる。絶え間なく襲う自分自身への怒りが、肉体を突き動かす。

——半死半生の身であるはずの、この体を焚きつける。

「……ぬ、う？」

た——その時だった。

「……言つた、だろ。覚悟が……違う、ツてよ……！」

赤く血塗られた、満身創痍のストライクランサーが。自分を踏み付ける足ごと、先行試作型を持ち上げるように——身を起こしていく。

その光景に目を剥く教皇は、「異星人に味方する叛逆者」が見せた往生際の悪さに、わなわなと打ち震えていた。

「……自らの罪も知らない、異端の愚者がアツ！」

「……ツ！」

今度こそ黙らせるべく、ストライクランサーの顔面を蹴り上げる。だが、激しい衝撃音と共に転倒した後も——彼は、震えながら立ち上がり続けた。

野戦刀だけは手放さず、軋む機体に無理を敷いて。竜馬は混濁する

意識の中で、相対する仇敵を見据えていた。

「……愚者で十分さ。だがな、それでも……オレはツ……！」

そして、高周波振動野戦刀の切つ先を、先行試作型に向けて。なおも戦うと、姿勢を以て宣言してみせる。

流血によつて紅く彩られた、その雄姿は——迫害されし異形の為に戦つた、遠い星^{ヘイデリオン}の愚者^{オラン}のようであつた。

「もう眠れッ……咎人めがアアッ！」

そんな彼の命に、終止符を打つべく。翡翠に輝く大型光刃剣を振り翳し、先行試作型が一気に仕掛けってきた。それに対応するように、ストライクランサーも刺突の姿勢に移る。

鐵聖将、あるいはそれに準ずる者同士の戦いは一瞬で決まる。音速で翔ぶ武者達の一騎打ちが、長く続くことはない。

文字通り、瞬きの暇もなく。死を呼ぶ凶刃が、竜馬の眼前に迫つていた。

「……付き合つちまつてんだよ。反吐が出そうな、あいつの甘さにな」
だが。迎え撃つ若き兵士に、躊躇いの色はない。

その眼に宿すのは、炎。6年前、全てを焼き払つた災厄さえ飲み込む——闘志の猛火。

火鷹太団の想いを繼いだ、火村竜馬だからこそ纏うことの出来る、愚者の炎であつた。

——刹那。

大型光刃剣の袈裟斬りが、ストライクランサーの命を刈り取るべく。その肩口を捉え、機体を焼き尽くしていく。

刃が中にいる竜馬に辿り着くまでの時間はもう……一瞬にも満たない。もはや彼の命運は尽きたのだと、誰もが確信し得る瞬間であった。

だが。

勝利を確信し、嗤うゾデュアの凶刃が。それ以上、ストライクランサーの機体に沈むことはなかつた。

ここではないどこかを、狂笑と共に見つめる教皇は——とどめを刺すことなく、刃を止めている。

諦めの悪い叛逆者を斃し、人類軍を撃破し、邪魔な異星人達を根刈り滅ぼす。そんな理想の未来を、幻視しているかのような貌であった。

そして。そんな彼の表情を隠した、先行試作型の胸には。

竜馬によつて突き刺された野戦刀の刃が、深々と沈んでいる。中にいるゾデュアの元まで、確実に届くほどの傷であつた。

——邪魔な若造を排除し、人類軍を打倒するはずだつた星雲神理教の教皇は。その目的に、踏み出すことも叶わぬまま。

この地下深くで、己の歩みを永遠に止めてしまつたのである。野戦刀の斬撃を浴び続けてきた蒼い装甲は、すでに限界を迎えていたのだ。

キーユの予知能力は、竜馬の一手が「刺突」であることを既に見抜いていた。野戦刀が正面から、迫つてくることは分かつていた。

だが、満身創痍の量産型ではさしたる速さは出せないと見込んだ彼は——音速に迫る彼の一閃に秘められた、底力までは視ようとしなかつた。

その僅か一瞬の、あるはずのない「力」を見落としたが為に。予知で見える可能性だけが、全てではないと理解しなかつたが故に。

——兵士としては許されない、「絶対」を信じた。それが、ゾデュアに最期を齎したのである。

野戦刀を引き抜かれても、蒼い機体は倒れることなく両の足で立つてゐる。それは、己が信じる者のために戦つた戦士が見せた、最後の意地であつた。

中にある乗り手を殺され、爆発することなく機能停止した先行試作型。その姿を前にして、竜馬は歪む視界の中でようやく——戦いの終わりを悟る。

「……バカが。こんな型落ちで、無茶ばかりしやがつて」

そして、自身も糸が切れたように倒れ込む——その瞬間。差し伸べられた銀色の腕が、真紅に染まる「型落ち」を受け止めるのだった。

到着した時にはすでに、決着がついていたことを悟つた【仁護】——黒崎とアカリは、先行試作型の両肩に囚われていた子供達を発見す

る。そこで竜馬が、彼らを救う為に戦つていたことを認めるのだった。

——まるで、異星人の子供達と、罪なき少女を救えなかつた
紅き愚者の無念を、打ち払うかの如く。

『使い手。この男……』

「……ああ。全く、手間の掛かる同期だよ」

深手によつて氣を失い、【仁護】の腕に支えられているストライクランサー。その中で眠り続けているのであろう、愚者の顔を想像して。
【贊姫】は複雑な声を漏らし——「伝説」の後継者たる若き兵士は、不敵にほくそ笑むのだつた。

そして、次世代を担う彼らが勝利を掴む瞬間を見届けた、生ける伝説は。

『……あの新人は、いつも心配ばかり掛ける。不満、不服』
『いいじやねえか。……新兵つてのは、『猪』くらいがちょうどいい』
長年共に戦つてきた相棒と共に、微笑を浮かべ踵を返すのだつた——
。

最終話 笑顔のために —For Smile—

星雲神理教の壊滅。

それは、星雲特警に対する地球人類の見解を大きく変える、歴史の
ターニングポイント
転換期でもあった。

アズリアン、ファイマリアンといった異種族を過剰に弾圧し、幼気な子供を攫い兵器に利用する——という非人道的な行為はセンセーショナルに報じられ、それまでの「神獣」を利用したテロ行為も併せて、「星雲特警に与する者」の危うさが改めて喧伝されることとなつた。

さらに地球連邦政府は、星雲連邦警察が星雲神理教に「新兵器」を貸し与えていた事実を発表し、星雲特警を敵視出来ずに入れた市民に衝撃を与える。

世界を震撼させてきたテロ組織に、あの星雲特警が自ら手を貸していた。それは市井に根付いていたはずの、彼らを信じようという想いさえ打ち碎く報道だつたのである。

この一連の事件を経て、地球連邦政府は改めて星雲連邦警察への対応を見直す運びとなり——世論には、星雲特警と敵対する流れが生まれつつあつた。

当然ながら人類軍も、かつての「救世主^{ヒーロー}」であつた星雲特警と戦うことになる可能性を見据えて、訓練の幅を広げていくこととなる。

その一助として、教皇ゾデュアが保有していたコスマオーマーIII先行試作型が活用される——と、期待されていたのだが。同機は黒崎によつて鹵獲された後、基地へと移送される際に自爆。時間差を狙つた玉碎攻撃によつて、機体は跡形もなく消し飛んでしまつたのである。

「現物」を失つた人類軍は、黒崎達が残した戦闘データのみを頼りに、対策を練ることになつてしまつたのだ。機体が自爆する前に肩のパーツを外していただけで、子供達が無事だつたのは不幸中の幸いと言える。

——レギオンは滅びた。シルディアス星人はもういない。だが、そ

れでも世界はまだ、平和ではなく。

この先の未来には、星雲特警という新たな「脅威」が待ち受けている。

その事実と向き合い、乗り越え、この地球に真の自由を齎すために。矢城率いるグレイハウンドは、今日も過酷な訓練に挑み行くのであつた――。



遙か宇宙の彼方を翔ぶ、鋼鉄の船。物々しい武装に固められた、その船体には――五芒星の中心に盾を描いた、独特の紋章が刻まれている。

暗黒の世界を渡る、その船の中では――2人の男達が、神妙な貌で星の大海上を眺めていた。

「……定時連絡が途絶えてから、もう2週間になります。やはり、彼らは……」

「ああ。……遠からず、こうなるような気はしていた。すでに十分なデータは取れたのだ、コスマモアーマーIIはこれから完成させればいい」

「……」

褐色の肌を持つ屈強な男は、金色の髪を靡かせる「部下」の肩を叩き――目を背けるように、踵を返す。そんな彼とは対照的に、「部下」は星々の向こうに見える青い惑星を、真っ直ぐに見据えていた。

「……地球との対立は、もはや避けられないでしょう。地球上にとつての我々はさしづめ、第2のシルディニアス星人……ですか」

「それが星雲連邦警察の選択であるならば、我々は戦うだけだ。……何をどれほど、犠牲にしようともな」

「……」

絞り出すような「師」の声色から、「部下」はその胸中を慮り――静かに目を伏せる。

そんな彼の傍らには、赤い片胸^{チエストプロテクター}当てが飾られていた。唯一無二の「弟子」が残した、その装備に視線を移して――男は、打ちひしがれるように呟く。

「……タロウ。これだけの犠牲を払つて、我々は一体……何を守つた
というのだろうな。我々は一体、何のために……」

だが、その声は誰にも届かない。もはや地球には、その言葉は届か
ない。

彼らも、地球も。今さら引き返すには、あまりにも遅過ぎたのだ。

◇
数多くの戦争や災害を味わってきた歴史を持つ……と言われてい
るだけのことはあり。極東支部の管轄下における復興の速さは、世界
的にも目を見張るものであつた。

星雲神理教によるテロ行為から僅か2週間足らずで、市街地のライ
フラインは復旧を終え、件の孤児院も破壊された建物の再建を終えて
いる。

過去の悲しみを乗り越え、現在いまを笑つて生き抜くために——孤児達
は、ついに迎えたバーべキューを心ゆくまで堪能していた。

「りょうま、りょうま！ ほら、肉焼けたよ肉！ りょうまも一緒に食
べようぜ！」

「……あア？」

「だ、だめだよキーユ……また怒られちゃうよ……」

その中には、決して子供達に近づこうとしなかつた火村竜馬の姿も
ある。彼はキーユの誘いに、怪訝な表情を向けるが——その奥にある
心情の変化を、異星人の孤児は幼心に感じ取っていた。

「……しゃあねえか。ちゃんと焼けてんだろうな？」

「あ、あれっ……？」

「わーいやつたー！ りょうまが食べたー！」

「……うるせえ」

やがて竜馬は憮然とした表情のまま、キーユから差し出された串を
取り上げる。そんな彼の変化に微笑を浮かべつつ、火鷹太団は子供達
に肉や野菜を振る舞つていた。

（……みんな、あんなことがあつたのに元気に笑つてる。たぶん、
慣れてるんだろうな）

——アズリアンにしてもファイマリアンにしても、その背景には宇

宇宙難民という過酷な経験がある。恐らくは地球に辿り着くまでに、幾度となく「別れ」を経験してきたのだろう。

だからこそ、この星で恐ろしいことが起きてても、笑顔を失わずにいられるのだ。宇宙を漂い生きてきた、この孤児達にはその強さがある。

そんな経緯を知ればこそ。太団は、願わざにはいられなかつた。

これ以上、子供達が要らぬ哀しみを知ることなく、平和な時代を生きられるように。これ以上、傷つけ合う日々が続かないように。

それは「星雲特警」の1人だつた彼が願うには、余りに浅ましく分不相応なのかも知れない。だが、そうと知りながらも——彼は願うのだ。

（今だけでも笑つてないと、辛氣臭いだけ損。「さらば涙、ようこそ笑顔」、か……）

全てを失い、罪に汚れてこの星に還つて来た日の、自分を支えてくれた養父の言葉。それがふと、脳裏を過る。

ふと、後ろを見遣れば。程よい加減で肉を焼いてキーユを喜ばせている、竜馬の姿が伺えた。焼き色ひとつに神経を注ぐその横顔からは、彼のただならぬ気合が垣間見える。

——これから先、星雲連邦警察と戦うようなことになれば、さらに厳しい状況にもなりかねない。それは恐らく、竜馬も理解しているはず。

にも拘らず彼は、厳しい訓練に明け暮れるわけでもなく。こうして任務を終えた後も、暇を見つけては子供達に会いに来ている。まるで、束の間の平和だけでも、彼らを笑顔にしようとしているかのように。

「さあ皆、いつものお歌を歌いましょうか！」

「はーいっ！」

その想いに、呼応するかの如く。バーベキューを堪能する子供達は、職員の呼びかけに声を上げて——この施設にとつてはお馴染みの、合唱を始める。

それは。この地球を、母星に代わる新たな故郷ふるさとと称して。かつては

悲しみに溢れていた星空に、永遠の平和を願う祈りの旋律。どんな時代でも消えることのない「笑顔」を歌う、異星人達の愛の歌であつた。彼らの歌声と、そこに込められた切実な願いを背に受けて。太団は儂げな笑みを浮かべ、窓辺に身を寄せる。

「……きっと。オレ達はみんな、この笑顔のために。この笑顔を守るために……」

ふと、満天の星空を仰ぎ、口をついて呟かれたその言葉は。まるで遠い宇宙からの「問い合わせ」に対する、「答え」のようであつた。

だが、その想いが通じ合うことはない。いつか遠くない未来、地球は再び戦乱の時代を迎えることとなる。

——それでも。戦士達は、屈することなく戦い続ける道を選ぶのだ。

人類の未来に、光明を齎すため。次の世代に、希望を授けるため。全ては今、ここにある笑顔のために。

◇

そして。この戦いから、僅か1年後。星雲連邦警察と人類統合軍の対立は、武力衝突へと発展し。それから、しばらくの月日を経て。

己こそが銀河の秩序と驕り、肅清の限りを尽くしてきた者達の滅亡を以て。この宇宙に、真なる調和の時が訪れたのだという――。

番外編 報われし御靈へと

——かつて、宇宙と呼ばれる暗黒の大海を舞台に。

星雲特警せいいうんとっけいと呼ばれる正義の戦士達と、シルディアス星人シルディアスという凶暴な異星人との、熾烈な激戦が繰り広げられていた。

「撃ち終わりッ！ エネルギーパック再装填急げエツ！」

「10時の方角より、円盤48機！ 15秒後に射程圏内に入りますッ！」

「左45度、仰角60度オツ！」

血に飢えた、獰猛な宇宙の害獣。そう教えられた敵方の円盤群を捕捉した戦士達が、迅速に迎撃態勢に入る。

彼らを乗せた宇宙戦艦は「帝王」との決着を付けるべく、シルディアス星人の本拠地ホンコクチを目指していた。そんな侵入者達の行く手を阻む星人達の攻撃も、苛烈を極めている。

激しい掃射によつて自動機能オートシステムが全てダウントしているため、星雲特警達は手動でレーザー機銃を操作しなければならないのだが——そんな彼らの姿は、格好の「的」であつた。

「があはアツ！」

「隊長——ひ、ぎツ！」

「弾だ、弾を早く、早——ああああがツ！」

戦艦の防楯やコスモアーマーさえ貫通する、円盤群のレーザー銃。

その威力を真っ向から浴びせられた機銃座の戦士達が、次々と斃れていく。機銃を放つレバーには、千切れた射手の腕だけが残されていた。

「教官、航空支援のシユテルオンは何をしているんですか!? オレ達の機体の修理は、まだ終わらないんですかッ!」

「今は8時の方角から来た連中の相手をしている！ 片付くまでは我々で持ち堪えるしかないッ！」

赤いコスモアーマーを纏う「ヘイデリオン」と、蒼いコスモアーマーを身に付けた「ユアルク」も、その戦士達の一員であつた。

艦内を走っていた彼らは、機銃座に寄り掛かる仲間達の肩を叩き。死亡を確認すると、素早くそれらを押し除けていく。

白銀の仮面の下に悲痛な貌を隠して、弔う暇すら惜しみながら。

レバーに残っていた腕を払い除けると、ユアルクは射手の座に付いた。ハイデリオンも落ちているエネルギー・パックを小脇に抱え、機銃の後方へと移動する。

「……エネルギー・パック、装填よオしッ！」

「おおおおおおッ！」

装填手の位置に付き、パックを機銃後部へと差し込んだ弟子の合図を皮切りに。ユアルクは声を張り上げ、敵方目掛けて対空レーザーを連射した。

だが、円盤群はその猛攻を容易くかわし、再び掃射を仕掛けて来る。閃光の猛雨がハイデリオン達に降り掛かり、彼らの身体を掠めていった。

「ぐわああッ！」

「がああ……ッ！」

コスマモアーマーを着てているとはいえ、対艦用に威力を高められたレーザーが、人に当たればどうなるか。それは2人の足元に累々と横たわる死体の群れが、如実に物語つている。

掠めただけでありながら、ハイデリオンとユアルクは肉を焼かれる痛みに叫び、銃座から吹つ飛ばされてしまう。壁に叩き付けられた彼らは、震える身体を寄せ合い、それでも立ち上がるうとしていた。「タロウッ……お前は次の弾を取りに行け、装填したばかりだから少しは保つ……！」

「教、官ツ……！」

「シユテルオンの修理が終わつたら、お前だけでも先に艦から離れろ……！　ここも、奴らの星に着くまで持つか分からんツ……！　生き抜くんだ、絶対にツ！」

ハイデリオンを本名で呼ぶユアルクは、せめて愛弟子だけは助かるよう、「的」の役を買おうとしていた。だが、当の少年は首を横に振る。

「……弾は取ってきます。でも、1人でなんて行けませんッ！ 残りますよ、教官がここにいる限り……！」

「タロウ……！」

ここまで来たからには、生きるも死ぬも師と一緒に。少なくともこの当時、ハイデリオンと呼ばれていた少年は、本気でそう思っていた。彼は壁に手をつき、よろけながらも次のエネルギー・パックを取るために、倉庫へと向かおうとする。その背は師を独りにはしまいとう、揺るがない決意を纏つていた。

かつては戦いとは無縁な、虫も殺せない少年だつたはず。そんな愛弟子の変わり果てた勇姿に、複雑な想いを抱えながら。ユアルクも機銃の射手という今の「持ち場」へと、身を引き摺るように戻っていく。——生きるも、死ぬも一緒。彼ら師弟は、それほどまでに固い絆で結ばれた、兄弟だった。家族だった。

そして、宿敵だった――。

◇
シルディアス星人の虐殺。アズリアン、ファイマリアンに対する迫害。

星雲連邦警察が秘匿してきた、それら全ての暗部が人類統合軍によつて暴かれ。星雲特警をヒーローと信じてきた地球人類は、彼らこそが争いを生み出す諸悪の根源であると知つた。

やがて地球の守護を担う人類統合軍は、星雲連邦警察との武力衝突に発展。長い戦いの歴史の中で、異星人達の想定を遙かに上回る兵器を生み出していた人類は、彼らを次々と駆逐していき――やがてこの戦争は、人類の勝利に終わつた。

その中で、かつてこの地球の守護神と崇められていた「星雲特警ユアルク」の名は。人類を騙し、意のままに操ろうとしていた卑劣な侵略者という、悪魔の代名詞となつたのである。

つい数年前まで、人気を博していたユアルクのソフビ人形も。今や悪鬼の象徴でしかなく、その全てがゴミ箱に打ち捨てられていた。

「……」

そんな中。百合の花束を手に街を歩いていた、1人の青年は。路地

裏に転がるその一つを目にして、足を止める。

艶やかな黒髪を靡かせる彼は、目を細めてそれを拾い上げると。埃や泥に塗れた人形の姿に、悲しみを帯びた表情を浮かべていた。

やがて。整備された林の奥へと歩みを進めた青年は、その道中にあつた水場で、人形を洗い始める。

そこは年配の夫婦や子連れの主婦など、多くの人が行き交う山道の近くであり——通りがかった者達は皆、「悪魔」であるユアルクの人形を丁寧に洗う青年の姿に、奇異の視線を向けていた。

だが。青年はその視線を背に浴びながらも意に介さず、新品さながらに綺麗な姿を取り戻した「師」の姿に、微笑を浮かべる。

その後。年配の「遺族」に配慮された緩やかな階段を上り、さらに奥へと進んだ彼の前に——高く聳え立つ石碑が現れた。

それは、7年前に起きた「シルディアス星人の災厄」の犠牲者達を悼む、慰靈碑。ここに訪れる者は当然ながら、災厄によりこの世を去つた者達の遺族ばかりであつた。

青年も、その1人だと思ったのだろう。慰靈碑を清掃していた初老の男性が、心配げに声を掛けてくる。

「……あんたあ、遺族の人かい。悪いこと言わねえから、そんなもの供えん方がいい。今の人達にとっちゃあ、シルディアス星人も、星雲特警もなんちや変わらん」

「大丈夫ですよ。……こうしておけば、彼らにしか分かりません」

だが、青年は微笑みを送りながら。百合の花束と一緒に、ユアルクの人形を慰靈碑の前に供えてしまう。

花束の中に包むことで、外からは見えないようにして。……それはさながら、花葬のように。

「……見えますか、教官。誰がなんと言おうと、あなたが報いた人達です」

手を合わせ、暫し默祷した後。顔を上げた青年は優しげな笑みを浮かべ、慰靈碑に刻まれた犠牲者達の名前を眺めていた。その中には「火鷹太^{ひだかたろう}」という、青年の名も含まれている。

人類軍との戦争で、命を落とした星雲特警ユアルクは。遺された

人々にとつては違つていても、すでに旅立つた彼らにとつては。間違
いなく、その御靈に報いた「英雄」だつた。

「オレのことは、心配しないでください。……生き抜きますよ。あなた
の、命令ですから」

そうであつて欲しいと信じる青年は。かつて「星雲特警ヘイデリオ
ン」だつた、火鷹太団は。

地球の人々と、宇宙の人々が。それぞれの未来のために歩んだ先
に、生きている者として。

星雲特警の滅亡を以て、真なる調和が齎された青空を仰ぎ。その頬
に、温かな滴を伝わせて。儂くも、優しげに笑う。

3年前の命令を、守り続けるために。



やがて、去りゆく彼の後ろでは。吹き抜ける穏やかな風に、百合の
花々が揺らめいていた。

その中に包まれたユアルクの人形を撫で、労わるかのように――。